# 戦国BASARAの佐助を、AOGの至高の一人として突っ込んでみた！

水城大地

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

≪はじめに≫

・まず、この話の中には、オリジナルの至高の御方と言うのか、クロス転生の至高の御方が出てきます。

・元戦国ＢＡＳＡＲＡ　の佐助の転生で、リアルでは社畜の戦闘系警備員。

・ナザリックでは、異形種属「天狐」の【北斗】と名乗ってます。

つまり、戦国ＢＡＳＡＲＡとオーバーロードのクロスネタになります。

宜しいですか？

こちらの作品は、ｐｉｘｉｖにも投稿しています。

短編から連載に変更しました。

# 目次


終了数時間前～佐助の独白～ ―――― 1
ゲーム終了、約二時間前の悲劇!? ―――― 8
終了、約一時間から三十分前まで ―――― 16
終了、約二十分前から終了直後まで～そして、世界は…… ―――― 24
時間終了直後から続く、ドタバタな会話をするモモンガ達の話 30
霊廟前でのやり取りと、ウルベルトの心中 ―――― 47
霊廟に入ってみたら、世界級アイテムが一つ足りないんですけど!? ―――― 55
俺様たち四人が、余裕で生活出来るパンドラの自室って…ねぇ 65
パンドラへの処遇と、モモンガさんのお食事事情を含めた事を相談してみた ―――― 79
楽しい食事と、周囲の探索をしてみたんだけどねぇ…… ―――― 92
アイテムの回収と資金集めについて考えてみた ―――― 104
番外編などのエピソード集
【番外編～佐助に、対テロ組織について聞いてみた～】 ―――― 117

# 終了数時間前～佐助の独白～

俺様の名は、上月幸吉（かみつきゆきよし）。
前世で呼ばれていた名は、猿飛佐助。
所謂、前世の記憶持ちって奴だ。
しかも、俺様は単なる前世の記憶持ちなんてレベルじゃない。
なんでかって？
それは、実に簡単な話さ。
なんて言っても、俺様は前世で持っていた能力を使えるからね。
それが、どんな能力かって言うと……前世では【婆沙羅】って呼ばれた、炎、風、雷、氷、光、闇の六種類の力を操るもの。
その中でも特に特殊な【闇婆沙羅】が俺様って訳さ。
さて、そんな俺様が現在暮らしているのは、文字通り終焉間近でぎりぎり生き延びてるような、そんな腐った世界だ。
水も空気も大地も腐っていて、どう考えてもまともじゃあない。
この世界に、もし片倉の旦那が転生していたら、絶対に発狂していると思うね、俺様。
あの、畑と野菜を愛するお人には、ここはとても暮らせる世界じゃありゃしないって。
俺様も、あのお人が作る野菜の味を思い出したら、凄くこっちの世界の食事がむなしくなっちまった位だからね。
そんな世界に転生して、早二十五年。
この世界じゃ、前世の俺様達が生きていた頃より少しまし程度しか物を学ぶ事が出来ない。
理由は、世界を支配する企業群のお偉方、所謂富裕層が絶対的な支配者として君臨し、それ以外の者が簡単に成り上がれないような仕組みを維持するためだ。
下層の人間が知恵を付けて、下手に成り上がられたら自分たちが困るからね。
だから、今の世界は完全に生まれで立場が決まっちまう。

え、俺様？
もちろん、最下層の生まれに決まってるでしょ。
前世で、忍びで猿だった俺様が、人間様に生まれたからって最下層から抜け出せる訳がないでしょっての。
ただ、この身体は前世から受け継いでいる【闇婆沙羅】のお陰なのか、それとも前世が忍だったお陰なのか、普通よりちょっとばかりすばしっこくて身体能力が高いんだよ。
それもあって、小学校を何とか卒業した後に勤めている先は、警備会社で特に対テロチームなんて危険なお仕事さ。
この世の中じゃ、富裕層に不満を抱いているモンも多いからね。
俺様は、色々な意味で規格外扱いされてるから、他の連中よりも結構実入りが良いんだよね、このお仕事。
まぁ、俺様のお仕事に関してはこれ位にしておくとして、さ。
今、俺様がこんな面倒なお仕事をしているにも拘らず、ずっと続けている事が一つだけあるんだよ。
そいつはね、ＶＲＭＭＯ【ユグドラシル】って言うゲームさ。
この世界に転生して、俺様なりに成長に合わせてこの世界の仕組みって奴を理解していった後に嵌ったのが、このゲームでなんだけど……仕事場でも見付けられなかった、俺様が新たに主って呼んでいいお人に会ったのもこのゲームの中なんだから、当然の話かもしれないね。
さて……俺様が、ゲームの中とは言え己の主と仰いでいるお人の名は、【アインズ・ウール・ゴウン】のギルドマスター、モモンガの大将だよ。
あのお人に、俺様が初めて会ったのは……【ユグドラシル】が始まってから二年目の冬、俺様が初めてゲームを始めてすぐの事だったかな。
何せ、興味があっても警備関係の仕事なんてもんをしていたら、中々お休みなんてものを貰える機会がないものさ。
特に、ゲームが配信スタートした頃はまだ勤め始めて一年過ぎたばかりの新人だからね。

お休みなんてもんは、殆どなかったものさ。
それでも、ゲームが始まって二年目の冬に、漸くそれなりにシフトを汲んで貰えるような立場になったから、速攻で初めてログインしてみたんだよ、俺様。
そこで、つい懐かしいもんを見付けちまった。
それこそ、俺様が現在進行形で使っているアバター、【天狐】の原型と言うべき【狐族】だった。
いやー、つい、あの種族を見付けた瞬間、武田の大将や真田の旦那に巻き込まれた【武田道場】を思い出しちまってさ。
気付いたら、それで【北斗】って名前のアバターを組んじまってたんだから、もう仕方がないって諦めた。
俺様の中で、前世の記憶って奴がいまだに根強いんだって事をね。
そう開き直ったら、あっさりとそのアバターも受け入れられたし、これ以外のアバターを組む気にはなれなくなってたんだよ。
そんな俺様が、あのゲームでは人間種以外は迫害されているってことを知ったのは、ゲームをスタートして二日目の事だった。
まだまだ序盤ってレベルも良い所で、のんびりじっくりと自分のキャラを育てようって考えていた俺様は、無理に背伸びをしたりせずに初心者向けのフィールドで戦闘を繰り返していた所だったんだよ。
そこに、俺様のような異形種を選択した初心者を専門に狙う、ＰＫが現れたのは。
まぁ、初心者を狙うＰＫって輩は、それなりに高レベルの連中が割と多くてね。
普通なら、初めて二日目の初心者はあっさりとＰＫされちまうもんなんだけど……ほら、このゲームの場合は、戦士系を選択すると格闘技とかの肉体能力も反映されるからさ。
俺様、ほら……仕事柄、ぶっちゃけて言うと警察や軍人よりもある意味、対人戦闘は強いでしょ？
昔取った杵柄ってのもあるし、現役でもあるからさ。
刀とか、色々と使いこなせている訳だし。
はははは……本来、レベル差三十以上あったのに、一対三の戦闘

で勝っちゃったんだよね、てへぺろ！
その結果、もう、そこから先はＰＫ達に付け狙われる日々が続いちゃって……そろそろ限界って時だった。
彼らが……当時の【ナインズ・オウン・ゴール】の面々が、俺様の事を助けてくれたのは。
そん時の俺様は、色々と精神的に参っていたから、本当に救いの神のようなもんだったよ、うん。
そんな事もあって、俺様は彼らとの縁を繋ぐ事が出来たのさ。
だけど、それから暫くの間、俺様は彼らの組織に加わる事はなかったんだよね。
その理由？
あぁ、実はとっても簡単な話で、お仕事が忙しくなり過ぎちまったせいでまともにログイン出来なくなっちまったからさ。
しかも、基本的に社会人の彼らがログインするのは昼間だろう？
俺様は仕事柄休みが不定期で、寝ずの番とかもあったりする会社だったから、休みも日中だけとかって事も多くて、彼らと顔を合わせる時間が無かったんだよ。
ホント、その頃は割と寂しい思いもしたもんさ。
だけど……モモンガの大将は、俺様の事を忘れたりしてなかった。
それまでクランだった【ナインズ・オウン・ゴール】が、ギルド【アインズ・ウール・ゴウン】になった直後、俺様に改めてギルドに参加しないかって誘ってくれたんだ。
もう、そのメールを受け取った時は、本気で俺様泣いちまったね。
それで、俺様は改めてギルメンの顔合わせをした後、モモンガの大将とたっちの旦那、ウルベルトの旦那と茶釜のお嬢の推挙を受けて、正式にギルド【アインズ・ウール・ゴウン】に所属したって訳さ。
ギルドの面々は、みんな愉快なお人ばかりだったよ。
たっちの旦那とウルベルトの旦那は、いっつも喧嘩ばかりしているってのに、一度戦闘になれば息があったコンビネーションを見せるし、茶釜のお嬢とペロ（ペロロンチーノ）の旦那もおんなじ。
まぁ、茶釜のお嬢とペロの旦那は姉弟だから、息が合うのも判るけ

どさ。
あー……俺様と、いっつも忍者談義で揉める相手が、実は弐式の旦那だ。
このお人の理想は、隠密性に優れた忍だってのに、俺様は【忍ばない忍】って奴を前世でも現世でも体現しちまってるからね。
俺様の在り方を、笑って楽しんでいる他の旦那方や俺様自身に、時々食って掛かってきては、建御雷の旦那に宥められてたっけ。
そんな楽しい日々も、次第に少なくなったのはいつの頃だっただろうか？
もちろん、俺様とモモンガの大将以外のお人たちには、色んな事情があるって事位判っていたさ。
むしろ、モモンガの大将や俺様の様に廃れかけた【ユグドラシル】に残ってギルドを守ろうって言うのが、珍しい扱いだって事位理解している。
それでも……最後まで、ずっと頑張っているモモンガの大将を見ていたら、その中に【真田の大将】の姿が浮かんじまって……もう、あのお人を放っておくなんて選択肢は存在していなかったね。
誰も残らないなら、俺様がモモンガの大将を支えて最後まで駆け抜けてやるって、そう決めたのもこの時さ。
そこから、【ユグドラシル】が終了するまでの間、俺様はモモンガの大将の為に色々と出来る事を考えた。
先ずは、ギルドを維持するための維持費を稼ぎ出す事。
これに関しては、俺様自身も稼ぎに行ったし、課金も遠慮なく選択したもんさ。
もう、リアル世界での食生活事情に関して、諦めに似た感覚があったから、贅沢するなんて気は起きなかったし、その分課金に回しても構わないってあっさりと思えたんだよね。
もちろん、それを直接言うとモモンガの大将は気にするから、もっぱら課金してゲーム硬貨を溜めちゃ、換金アイテムを買い集めて、それをパンドラズ・アクターに換金させたもんさ。
俺様が換金するより、音改さんの姿になったパンドラズ・アクター

に換金させた方が、効率が良かったからね。
もちろん、それだけで義理を果たしたとは思ってないよ。
俺様、モモンガの大将を一人きりにするつもりもなかったからね。
出来るだけ、シフト時間をモモンガの大将がログインする時間帯以外に変更してやった。
この頃には、俺様は警備会社の中でトップの実力者で、警備班を弐つほど率いる立場だったから、ちょっとばかり無理がきいたんだよね、うん。
その分、時間帯によっては深夜とか早朝とかも平気で勤務してたから、部下たちからは苦笑されても文句を言われたりしなかったよ。
時間も、かなり延長していた事も多かったからだろうね。
そんな風に、俺様がのめり込んだゲームも、後数時間で終了する。
ホント、終わりが来るっていうのは、どんなことでも寂しいもんさね。
まぁ……モモンガの大将とは、これで縁を切るつもりはないって随分前から言ってたこともあって、最近じゃリアルでもお互いの休みが合えば顔を合わせたりする間柄だ。
今日の事だって、「最終日だから絶対にログインするんで、絶対に待っていてくれよ、モモンガの大将」って昨日の夜に言ったら、「北斗さんは、約束を破る人じゃありませんから、安心して待ってますよ(▽(　))」って返されて、本気で【モモンガの大将、マジ天使！】って思ったっけ。
だから、絶対に今日はのんびりと最後をモモンガの大将と楽しむんだって、そう思っていたのに……誰だよ、俺様の職場である企業を襲撃しようって馬鹿は！
……ん？
あれ、あの顔……あっ!!
あの馬鹿！
ったく、モモンガの大将からの呼び出しを無視して、こんな所で阿呆な真似してるなんて、いい度胸じゃないか、ウルベルトの旦那……ふふふふ……あんたのせいで、ここで足止めを食らった分の怒り

も、きっちり受けて貰いましょうかね！

# ゲーム終了、約二時間前の悲劇!?

上月幸吉は、【猿飛佐助】としての前世の記憶を持つ転生者だ。
この終末を迎えようとする世界に転生したが、幸か不幸か前世の記憶だけじゃなくその時に持っていた能力も、そっくりそのまま継承している転生者だ。
もちろん、それは誰にも……家族にすら、欠片も打ち明けた事はないが。
と言うよりも、打ち明けるべき家族は存在していない。
何せ、この世界は富裕層と下層の人間との差が歴然としている世界だったから、下層に生まれた彼の家族も例に漏れる事無く、彼が小学校を卒業する頃には死別してしまっていたのだ。
もっとも、その家族との死別が既に継承していた記憶の中の能力の発現の引き金になったのだから、彼の中ではそれなりに家族は重要な位置に居たのだと言えるだろう。
それはさておき。
この能力の発現が、誰にも知られる事なく済んだ事は、佐助にとって幸いだっただろう。
彼が嘗て生きていた時代よりも、確固たる富裕層の権力が明確なこの世界で、彼の持つ能力の存在が知られていたとしたら、確実に実験材料としての生しか佐助には残されていなかった筈だからだ。
その事は、佐助自身も良く自覚していたので、人に悟られるような真似はしていない。
婆沙羅のお陰で、身体能力が向上した事を利用して、警備会社に勤める事を選択したのも、ある意味間違いじゃなかったと、今ではそう考えている。
普通の仕事よりも、危険度が高い分給料が良いこの仕事のお陰で、趣味のゲームを続けられているのだから。
佐助が夢中になっているゲームは、ＶＲＭＭＯ【ユグドラシル】と言う、日本最大のゲームだった。

配信されてから二年ほどたってから始めた佐助だが、今ではそれなりに名の通ったプレイヤーだ。
とは言え、そのゲームも今夜で終わるのだが。
ゲームが終わる事が決まったその日に、佐助は職場にその日の休暇申請を出していた。
もちろん、何か月も前からの申請だったので普通に許可が下りたのだが、その休みが半休に変更になったのは一週間ほど前。
別の部署が、この一週間の間に【テロが起きる可能性】を拾ってきたのである。
佐助の今の立場では、流石に【職場にテロが起きる】と予測されている状況下で、一日休みを寄越せと言う事は出来なかった。
むしろ、半日休みをくれると言うだけで【良し】とするべきだと諦めた。
前世では、もっと大変な状況だったのだから。
もし、テロが佐助の休みより早い段階で起きたら、速攻で決着を付ければそのまま一日休みを貰えるように交渉を済ませ、じりじり待つ事六日間。
結局、休みの当日までテロリスト共は動く事無く、佐助は最終日当日の夜まで詰める事になった。
昨日の出勤直後、約束だった終了日当日の半休すら取り消しにされたのである。
その代わりとして、仕事が完了した直後から翌日から三日間の休みを与えられてはいるが、それで納得出来る筈がないだろう。
もちろん、この警備会社で警備員最強の佐助を欠いた状態での、テロリストとの対峙を嫌がったのは、前世で指揮官側に立ったこともある佐助としても理解出来なくはない。
むしろ、当然の選択だと理解できるから大人しくしたがっているが、それでもピリピリと仲間にしか判らない殺気を放つ佐助に、誰もが【さっさと来いよ、テロリスト共!!】と、内心泣きが入っていた。
終了時間二時間前、漸くテロリストたちの動きが掴め、佐助率いる部隊がその殲滅の為に最終確認に向かってみれば、そこにあったのは

ある意味見たくなかった懐かしい顔。
その顔を認識した瞬間、一瞬のうちに周囲を凍り付かせるほどの殺気を放ったかと思うと、佐助は大きく息を吐いた。
『……ホント、何やらかしてくれてたりするかな、ウルベルトの旦那は。
こんな事、この終末を迎える寸前の世界でしたって、意味なんてないでしょうに……
まぁ、旦那の気持ちも分からなくはないけどさ、モモンガの大将の呼び出しを無視したってぇのは、ちょいと見逃せないかな。
しかも、俺様の会社がターゲットたぁ……調査不足もいいところでしょ、ウルベルトの旦那は。
ふふふふふ……俺様まで、モモンガの大将を待たせる原因になったんだ。
しっかり、その分の八つ当たりも含めてきっちり仕置きさせて貰うとしましょうかね♪』
にいっと、愉し気に口の端を挙げたかと思うと、部下たちに出入り口を固めて逃げ出すテロリストを捕まえるように指示を出しつつ、自分は単身特攻を仕掛ける旨を言い渡す。
警備部最強の佐助の戦い方は、周囲に居るものを全て薙ぎ倒すバーサーカーに近いもの。
佐助の部下なら、この佐助の戦闘方法は誰もが知っていたし、普段から割と一般的な指示だった事もあり、あっさり指示に従う彼らを見送った後、暗視ゴーグルを填めて彼らが潜む一角の照明を落とすと、一気に単身身を躍らせていた。
照明が消え、テロリスト側からの干渉もあって監視カメラなどが機能停止している事を知っている佐助は、平然と闇婆沙羅を使用して中に居るテロリストたちを刈り取っていく。
それこそ、その勢いはゲーム内で雑魚を根こそぎ薙ぎ払うのと、ほぼ変わらないペースだった。
暗視ゴーグルと闇婆沙羅の併用によって、どこに誰がいて何をしているのか、それこそ手に取るようにわかる佐助には、それこそ単独で

動く方がとても効率がいい戦闘方法なのである。
　そうして、ウルベルトの位置を把握しながら丁寧に仲間を始末していった佐助は、最後に残ったウルベルトの背後に完全に気配を消して近寄ると、口を抑え込んで叫べないようにしながら、がっしり腕を捩じり上げて楽し気な様子で耳元に口を寄せると、そっと声を掛けた。
「ふふふふふ……ウルベルトの旦那ぁ……つ・か・ま・え・た・ぜぇ……」
　出来るだけ、恨みが籠ったおどろおどろしい声に聞こえるように、地を這う様な響きを持たせるようにと、そういう意図をもって名を呼んでやったのだが、まさか【リアル】で【ユグドラシル】の名を呼ばれると、ウルベルトは思っていなかったんだろう。
　本気で仰天した様子で、佐助の顔を確認しようと後ろを振り返ってくる。
　だが、その行動は無意味だった。
　何故なら、今の佐助は顔を見られない様にと、いつの間に装着したのか【お稲荷様】の仮面を被っていたからだ。
　暗闇の中で、白く浮かび上がる様な狐の面と言うのは、正直言ってかなり不気味な雰囲気を持つものだ。
　多分、同じ事をウルベルトのも思ったのだろう。
　今度こそ、ウルベルトが恐怖に顔を思い切り引きつらせるのを見届けた所で、佐助は首筋に手刀を入れてその意識を刈り取った。
　手早く、ウルベルトの周りの端末をチェックし、ウルベルトに関わるものと判別出来るものは全て回収していく。
　簡単にチェックした限りでは、ウルベルトはそれほど大きな役割を振られていた形跡もなく、このまま他の端末をチェックされてもこの場に居た事がバレる心配はないだろう。
「さて……これでモモンガの大将へのお土産も確保したし、お仕事は終了って事で上に報告しましょうかね。」
　気絶させたウルベルトを、そのまま闇婆沙羅に飲み込ませて自分の家に送り届けつつ、佐助は片が付いた事を報告するべくインカムのスイッチを入れた。

今回のテロリストの人数を、上も現場も正確に把握していない事は確認済みなので、ウルベルト一人くらいなら誤魔化しが効くだろう。
彼以外のテロリストは、既に全員三途の川を渡って貰って居るので、足が付く心配もない。
そもそも、殲滅班の仕事は遺体の始末までが含まれているのだ。
手早く、慣れた手付きで遺体を一カ所に集めると、遺体処理用の特殊分解液を掛けて処分していく。
分解が終わるまで、かなりきつい匂いが漂うが、これで処分してしまう方が後の処理が楽な為、殲滅班では当たり前のようにこれを殲滅したテロリストに使用していた。
正直、殲滅班ではテロリストを生かして捕らえる事はない。
富裕層にとって、テロリストとは処分が必要なゴミでしかないからだ。
そんなものを、わざわざ捕まえると言う認識は彼らの中に存在しない。
むしろ、手間を掛けて捕まえて仲間のことを白状させるより、彼らが使っていた端末から情報を拾い上げて、ある程度の潜伏地域を割り出して、その地域ごと処分した方が無駄な手間がないとすら思うのが、富裕層の中でも支配階級に居る者の常識なのだ。
数回のコール音の後、副班長が出たので現場の処理まで終了までした事を告げ、こちらに来るように指示を出す。
こちらの指示を復唱した後、インカムが切れたのを確認してから、今度は端末を取り出した。
「もしもし、殲滅班の上月です。
現時点をもって、ビルの地下に侵入しようとしていたテロリストの殲滅を終了しました。
私の単独特攻の結果、チームの被害はゼロで作戦終了です。
つきましては、今日の任務にあたる前のお約束通り、副班長にこの場に居る二班の指揮と現場を任せて、私はこれより直帰して休暇に入らせていただきたく思いますが、宜しいですね。」
これに関しては、最初の段階で決まっていた話だ。

元々、危険職としての最低限度の取る必要がある休暇枠での休みの予定だった佐助に、緊急事態だと言う事で強引に勤務を捻じ込んだ都合上、上としても優秀な人材に転職される危険性を減らす為に出した条件である。
だから、佐助がこの話を切り出しても、向こう側は慌てる事無かった。
≪副班長との引継ぎが終了し次第、上月班長の直帰を許可する。≫
そう、あっさりとした返答を受け取り、簡単な挨拶を交わし終えた所で端末を切る。
これで、後は引継ぎを待つばかりだと思っていた所に、副班長が率いる殲滅班が戻ってきた。
それと同時に、消されていた照明類も全て元に戻り、現場を照らしている。
「それじゃ、俺はこのまま直帰の許可も出たから、副班長は引継ぎを宜しく頼むわ。
あぁ、テロリスト共の端末はあそこね。
遺体は全部処理済み、端末は一つだけ開けてみたけどそれ程情報は入ってなさそうかも。
全員、端末は違法改造ものばかりだし、お互いに本名とか使ってなかったみたいだからね。
もし、事後調査後に俺に報告するべき内容が在るなら、上の判断を仰いだ上で休暇明けにでもしてくれると助かるかな。
それじゃ、また三日後の休暇明けに。」
ひらひらと、軽く手を振りながら背中を向けると、背後から班員全員が声を揃えて挨拶の声を上げた。
「「「「「お疲れさまでした、上月班長!!」」」」」
多分、ビシッと整列して頭を下げているんだろうが、それを振り返ってみる事もせず、佐助はその場を後にした。
正直言って、彼らには少しだけ申し訳ない気もしないでもない。
何と言っても、本来なら殲滅して処理すべきテロリストを、自分の都合とは言え一人見逃して匿っているのだ。

『……でも、まぁ……今のところ、俺様の所持しているブラックリストの中に、ウルベルトの旦那の本名は挙がって来てないからなぁ。
多分、名前が上がらない様に今まで後方支援に回っていたのか、今回が初参加だったのか。
どちらにせよ、今回はギリギリ問題ないでしょ。
今後の事は、ウルベルトの旦那が自分で決めればいいさ。
俺様としては、あと少しで終わる【ユグドラシル】でのモモンガの大将への義理さえきちんと果たして貰えれば、そこから先はウルベルトの旦那自身の問題だからね。』
サクッと、ウルベルトがテロリストを続けるかどうかに関しては、今夜の事が終わってから自分で決めればいいんじゃないかと、本人に問題を丸投げすることを決めつつ、佐助は家路を急ぐ。
テロリストを発見した時点で、終了まであと二時間ほどだったのだ。
佐助が単独特攻する事で、サクサクとテロリストを全て片付けたものの、それでもあの場所から直帰の許可を貰うまで三十分も掛かってしまった。
ここから移動して、ウルベルトの端末に【ユグドラシル】のアバターのコピーを突っ込んで起動させるなら、最低でも三十分は必要だろう。
「っとに、やる事が多すぎるってぇの！
一応、間に合う計算だから良いけどさぁ……ホント、これでモモンガの大将と碌に話せなかったら……本気で恨むぜ、ウルベルトの旦那ぁ……」
ウルベルトの予想外の行動によって、完全に予定を狂わされた佐助は小さくぼやく。
それでも……自分がいた場所以外だったら、ウルベルトの命は確実に散らされていただろう。
彼が思う程、富裕層の警備を任されている警備部の殲滅舞台は甘くない。
幾らか不満はあるけれど、そのお陰で拾えた【ギルド仲間】の命が

あって、モモンガへの土産になるのだから、これも悪くはないと思い直しつつ、可能な限り急いで家路へとつく佐助だった。

## 終了、約一時間から三十分前まで

自宅に戻ると、意識がないウルベルトを闇婆沙羅の中から引き摺り出し、そのままベッドに転がした。
佐助の住んでいる部屋は、元々それほど広くはない。
故に、ベッドに寝転がすくらいしか、他に場所が無かったのだ。
ウルベルトをベッドの上に転がしておいて、佐助が向かったのは自室の押し入れだった。
そこには、以前同じ部署だった先輩から貰った、ゲーム用の端末機が予備としておいてある。
転勤に伴い、これらの娯楽系の端末が使える環境じゃなくなったため、佐助に格安で譲ってくれたのだ。
もちろん、今は自分で新しいものを購入して使っているが、この予備端末だって十分に使えるように定期的にメンテナンスしているので、短時間ならウルベルトに貸し与えて使用させるのも問題ないだろう。
それでも、念の為に端末機の環境を整えていたら、背後で呻き声が聞こえてきた。
漸く、ウルベルトの意識が戻ったらしい。
背後に感じる気配は、どことなく状況が判らなくて戸惑っている様子だった。
「……ばんわー、ウルベルトの旦那。
気分はどうだい？」
佐助が振り返る事なく声を掛けると、佐助の存在に今更のように気付いて驚いたらしい。
ぎょっとしているのを感じ、苦笑しつつ佐助は振り返った。
「あのさ、あんな粗末で使えない道具と、技量不足のテロリスト共とあの場所に行って、本気でテロが成功すると思ってたのかい、ウルベルトの旦那。
だとしたら、余程阿呆が過ぎるでしょうに。
あそこの会社は、さぁ……襲撃して来ようとするテロリストを、一

切残らず殲滅部隊を差し向けて殺処分にする事で有名な所だって、聞いた事が無かったのかい？
もし、知っててそれでも行動しようとしたなら、それこそ蛮勇が過ぎるっての。
言っておくけど、あの場に居たあんた以外のテロリスト共は、俺様がこの手で処分する羽目になったんだからね。」
はぁっと、佐助が大きな溜息を吐いて見せれば、言われた内容にギョッとした様にウルベルトは佐助を見る。
だが、佐助の方にはまだまだ言いたい事があったので、それを無視すると言葉を続けた。
「……あのさぁ、俺様がこういう仕事についているってことは、ウルベルトの旦那だって知ってただろう？
だからこそ、俺様の事をあんたはたっちの旦那の次に嫌ってた訳だし。
まぁ……俺様だって、自分の仕事を褒められたもんだとは思ってないさ。
それでも、俺様には他に生きていく手段が与えられなかった。
だから、今更それに関してどうこう言われても、どうする事も出来やしない。
俺様自身、それもしょうがないって受け入れているから、それは別に構わないさ。
今更、こんな終わりが見えてる世界でどうこう言ったって、実際にはどうする事も出来ない事んざ、それこそ幾らだってある話だからね。
それよりも、さぁ……俺様としては、ウルベルトの旦那に言いたい事があって、わざわざこんな手間を掛けてるんだよね。
一体、何だと思う？」
一瞬で間合いを詰め、グイッとウルベルトの胸倉を掴み上げると、ニィッと口の端を上げるように笑う。
そして、腹から地を這う様な低い声を響かせつつ、ウルベルトに問い掛けた。

「あんたさぁ……今夜が何の日か、随分前からモモンガの大将からメールを貰ってたよな？
それで、何で糞みたいな幼稚な作戦で絶対に失敗するのが確定している、今日のテロリスト共の襲撃に参加してる訳？
もしかして、作戦内容知らされずに人員として動員されただけ？
それが図星なら、旦那はあのテロリスト共に良い様に利用されてただけだろうね。
まぁ……それでも構わないとかいうなら、旦那の人生だし俺様が口を挟むこっちゃないんだろうけど、ね……」
調整が完成した端末を、グッとウルベルトの胸元に押し付け、掴んでいた手を放すとそのままベッドの上に突き倒す。
「今の俺様が、あんたに言いたい事はただ一つ。
今夜くらい、モモンガの大将への不義理を詫びに行けや、あぁ？
その為に、俺様が色々と骨を折って手間かけてあそこから助けてやったんだからな。
ゲーム配信終了してシャットアウトされる時間まで、モモンガの大将に付き合ってナザリックで過ごすっていう義理さえ果たしたら、そこから先は旦那の好きにすればいいさ。
俺様だって、あんたがまたテロリストに戻ろうがどうしようが、止め立てしたりしやしない。
その代わりに、モモンガの大将の前では一切の不満は言いっこなしにしてくれ。
どんな不条理だろうと……昔から、敗者は勝者に従うもんだ。
あんたは、あの場で俺様に指一本触れられずに一撃で倒されたんだから、これ位の事は聞いてくれても構わないだろう？」
威圧するようにそう告げる佐助は、文字通り背後に般若を背負っていると言われてもおかしくない程の迫力だったと、後日ウルベルトがモモンガ相手に話す事になるのだが……それは横に置くとして、だ。
佐助の雰囲気に飲まれたウルベルトは、素直にその言葉に頷いていた。
真っ直ぐ、自分の事を見据えて告げる佐助の目の奥に暗く燃える怒

りの炎が恐ろしくて、自分の怒りすら抑え込まれてしまった結果ともいう。
とにかく、ウルベルトが大人しく従う姿勢を見せた事で、漸くそれを引っ込めた佐助の指示の下、急いで端末を操作しながら【ユグドラシル】内に残っている自分のデータを呼び出した。
「へぇ……旦那は【ユグドラシル】を引退しても、データそのものを消してなかったんだね。
しかも、しっかりアップデートまで済んでいるじゃないか。
……もしかして、本当は旦那もログインするつもりはあったって事でいいのかい？」
きっちり、アップデート済みだったウルベルトのデータを見た佐助が、予想外だと思わずそう漏らせば、バツが悪そうに横を向くウルベルト。
そして、小さく観念したように呟いた。
「……悪かったな。
俺も、テロの実行日を一日間違えてたんだよ……」
モモンガに対して、最後のけじめとして会いに行く意思はあったのだと、そう呟くウルベルトの言葉を聞いて、少しだけ佐助はホッとした。
最終的に、ウルベルトはテロを優先させたものの、日付さえ違っていればちゃんとモモンガに会いに行く意思はあったのだと、準備が済んだ状態を見せられれば、それが嘘ではなく本当だと納得する事が出来るからだ。
「……そっかぁ……それなら、まぁ、いいんだよ、うん……
でも、そのお陰で予定よりも早くログイン出来そうだ。
他の皆からは、【今日、顔を出す】って返事を殆ど貰えなかったとか言ってたし……あまり待たせると、円卓の間から移動しちまいそうだからなぁ、モモンガの旦那は。」
せっかく、ウルベルトも連れて行けるのだからと、サクサク作業を進めていく佐助の横で、ウルベルトは聞かされた言葉に少しだけ更にバツが悪くなるのを感じていた。

自分以外の仲間が、もっと顔を出すと思っていたからこそ、最後の最後で不義理をする選択をしたのだが……もっと不義理をする面々の方が多かったらしい。
もしかしたら、その事が佐助を余計に神経質にさせていたのかもと、ウルベルトが反省していた事も露知らず、当人は暢気に【ユグドラシル】へのログイン準備に入っていたのだった。
＊＊＊＊＊＊＊
一方、ヘロヘロがログアウトして、一通り怒りを発散させるようにテーブルを叩いたモモンガは、そろそろ円卓の間から移動しようと、ゆっくりとそれまで座っていた椅子から立ち上がっていた。
北斗―佐助―が来る約束をしているが、彼には【最後は王座の間で迎えたいと思っています】と言う事を、昨日の夜の時点で告げてあったので、問題はないだろう。
ただ……移動するのにあたり、ギルド武器である【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】を持って行きたいと思わなくもないが、流石に彼が来るなら勝手に持ち出すのは駄目だろうと、一旦杖に伸ばした手を引っ込めようとした瞬間である。
≪北斗が、ログインしました≫
≪ウルベルト・アレイン・オードルが、ログインしました。≫
と、モモンガの視界に二人のログインポップが浮かび上がったのは。
北斗―佐助―はまだしも、ウルベルトの名前がポップされた事に驚き、思わず目を見開いているモモンガの前に、佐助の姿が転移して現れ。
驚いて、声もかけられないでいるモモンガに対して、それは晴れやかな様子で佐助は次に転移してきた相手の首根っこを掴むなり、にこやかに一言。
「モモンガの大将、ばんわー！
仕事先のお土産に山羊一頭、狩ってきましたー!!」
まるで、猫の子を摘み上げるかのように、首根っこを掴んでウルベルトを持ち上げた佐助は、笑顔のままモモンガにそれを差し出してい

るし、掴まれたウルベルトの側はウルベルトの側で、普段の不遜さは鳴りを潜め、文句を言わずに苦虫を潰した顔をしている。
ニコニコと笑う佐助と、苦虫を潰したような顔をするウルベルトを目の前にして、目を白黒させていたモモンガだが、たった一つだけ確実な事があった。
目の前には、佐助だけではなくウルベルトも一緒に居ると言う事だ。
「……大変お久しぶりです、ウルベルトさん。
北斗さんも、こんばんは！
昨日の話じゃ、もしかしたらログイン出来ないかもしれないって思ってたんですけど、無事にお仕事が終わってよかったです。
と言うか、狩ってきたって……そりゃ、ウルベルトさんは山羊の悪魔ですけど、どっか違いませんか!?」
挨拶をした所で、佐助のセリフを思い出したのか突っ込むモモンガに、クスクスと笑う佐助。
ますます、ぶすっと不機嫌な様子を見せるウルベルトに、自分の発言が不味かったのかと焦るモモンガに対して、サラッと佐助は言い切った。
「いやぁ、そんなに心配しなくても大丈夫さ、モモンガの大将。
ウルベルトの旦那は、ちょいと自分の失態に腹を立てていなさるのさ。
ここん所、旦那は色々と忙しかったらしくてね。
終了日と仕事の終いの日が一緒なのを、勘違いしていたらしいんだよ。
んで、その事を偶然仕事先で会った俺様に指摘されて、しかも勝負に負けたら仕事は一旦休むって賭けまでしなさって、盛大に俺様に負けちまったからね。
色々と、モモンガの大将に申し訳なくて、あんな顔をしているって訳さ。」
ニヤリと笑う感情アイコンを出しつつ、そうモモンガに宣った佐助に対して、ウルベルトは思わず軽く頭を叩いたが、佐助は気にする様

子など全くない。
まぁ、同士討ちは出来ない仕様だし、例えで来たとしても戦士職の佐助と魔法職のウルベルトでは物理攻撃能力と、物理耐性能力が全く違う以上、殆どダメージなど通らないだろう。
それを理解してなお、ウルベルトは叩かずにいられなかったのだが……それを突っ込む者は誰もいなかった。
「……どんな理由でも、こうしてウルベルトさんが来て下さって、最後まで一緒に過ごせるのなら、俺はすごく嬉しいです。」
そう、嬉しそうにモモンガに言われて、バツが悪そうに視線を逸らすと、ウルベルトは漸く口を開いた。
「……お久しぶりです、モモンガさん。
色々と、不義理をしてすいませんでした。
後、残り僅かしかありませんが……今まで不義理していた分も付き合いますから、一緒にシャットダウンまでナザリックで過ごしましょう。」
ユラユラと揺れていたウルベルトの視線が、最後にモモンガに向いた瞬間、やったと言わんばかりに両手を上げて喜ぶモモンガと佐助。
軽く手を打ち鳴らし合った所で、フッと佐助がある事に気が付いた。
「なぁ、モモンガの大将。
そこに立ってたのって、もしかして【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】をもって王座に向かうつもりだったりした？
だったら、最後なんだし最強の大将の姿が見たいな、俺様。
むしろ、大将だけじゃなくてウルベルトの旦那もきっちり最強装備を揃えようよ。
どうせ、宝物殿の奥にしまってあるんだし、最後くらいは格好良く装備を固めて終わらせようぜ、大将も、旦那も、俺様も！」
両手を打ち鳴らし、そう主張する佐助の言葉に、ウルベルトもうんうんと頷いて同意を示す。
「そうですね……せっかく作ったんですし、モモンガさんが装備しないまま終わるのも、勿体ないですよね。

俺の装備もあるなら、宝物殿に取りに行ってきっちりと装備を整えた後、三人で有終の美を飾ると言う提案も悪くありませんし……」

二人から勧められ、自分も持っていきたいと思っていたモモンガは、少しばかり躊躇いがちに【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】に手を伸ばしていた。

終了、約二十分前から終了直後まで～そして、世界は……

数分後、【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】で、三人とも揃って宝物殿に転移してきた。
【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】を持った際に発生した、色々なエフェクトに関して話していたせいで、転移してくるまで時間が掛かった結果である。
「最後を王座の間で」と、モモンガは昨日の時点で佐助に対してそう言っていたのだが、それよりもウルベルトの装備をきちんと最強にして、その状態で一緒に最後まで過ごす方が、彼の中での優先順位は高いらしい。
と言うより、最終日に縁遠くなっていた友人と過ごせるのが素で嬉しいらしく、すっかり最初に考えている事を忘れているのではないかと言うのが、佐助の予想だった。
『……まぁ、どんな形ででもモモンガの大将が愉しく最後を過ごせるなら、俺様はどこでどう過ごしても構わないんだよね。』
実際に、モモンガが最初に考えていた事を実行するなら、かなり時間が押している状態なのだが……わざわざ楽しそうにしているモモンガに水を差すのも悪いし、何より慌てさせて友との語らい慌ただしいものにするのも気が引けた。
そんなドタバタにする位なら、「この宝物殿内で三人揃って最強装備を身に着けてたら、いつの間にか時間が過ぎてました」の方が、余程ましな気が佐助はした為、わざとこれに関しては黙っていたのである。
その判断が、この後で思わぬ結果を引き起こすのだが……当然、佐助はまさかそんな事になるなんて、夢にも考えていなかった。

＊＊＊＊＊＊

それはさておき。
色々とナザリックの思い出を語り合いつつ、宝物殿の霊廟前の広間まで辿り着いた三人の目に入ったのは、懐かしい仲間の姿。
水死体に、無理矢理タコの頭が付いた様な醜悪な姿を、更にボンテージで包んだブレインイーター、タブラ・スマラグディナがそこに居た。
だが、こちらの姿が視界に入っているにも拘らず、身動き一つする事無く静止している姿を見て、それがここの領域守護者であり、モモンガが作ったＮＰＣであるパンドラズ・アクターだと、すぐに三人とも気が付いた。
「……あれ、何でタブラさんの姿をしているんでしょうね？」
モモンガ自身、ここに訪れたのは随分と前になるものの、それでも退出時にパンドラズ・アクターをタブラの姿に変化させたまま放置した記憶はない。
その言葉を聞いて、少し考える素振りをしたのは、佐助。
久し振りに、パンドラズ・アクターの姿を見る為か、「外装解除」と告げて素の姿に戻して四方から観察する素振りを見せたのはウルベルトである。
そして……次の瞬間、モモンガにとってある意味禁断の一言をぼそりと呟いていた。
「……ドイツ語……」
ウルベルトがそう呟いた瞬間、素に戻る以外一切のモーションすらしなかったパンドラズ・アクターが、クルクルと踊る様な派手な動きを見せながらポーズを決めたかと思うと、一言。
「Ｗｅｎｎ　ｅｓ　ｍｅｉｎｅｓ　Ｇｏｔｔｅｓ　Ｗｉｌｌｅ!!」
モモンガに顔を向けて、そうドイツ語を口にしたのである。
実は、ウルベルトが口にした【ドイツ語】と言うのは、パンドラズ・アクターへの特定指示コマンドであり、ギルドメンバーがパンドラズ・アクターの前でそう目の前で告げてやると、派手なアクションとドイツ語をランダムで見せてくれるのだ。
パンドラズ・アクターを作った当時は、それこそモモンガが一番格

好いいと思うものを見付けては、どんどんと組み込んでいったのだが……どうやら、今のモモンガにとってそれは結構な精神的なダメージを与えるものらしい。
がっくりと、思わず側にあったソファに手を掛けて項垂れる姿を見て、ウルベルトが楽し気に笑う。
それに反応して、「恨めしい」と言う感情モーションを出すモモンガの姿に対して、益々楽し気な笑みを零すウルベルトに、つい「怒り」の感情モーションを連打するモモンガ。
それもまた楽しそうだと思いつつ、佐助はまた停止したパンドラズ・アクターを指差しながら一つ提案した。
「今日で最後だし、モモンガの大将がそんな反応するなら、パンドラズ・アクターの設定を変更すればいいんじゃね？
元々、パンドラズ・アクターはモモンガの大将のＮＰＣなんだし、ここで好きに変更しても誰も文句は言わないと思うぜ。」
実際、パンドラズ・アクターに搭載した能力面での変更でもない限り、他のギルメンがこの場に居たとしても、文句を言うことはない筈だ。
それにかんしては、ウルベルトも同様に考えたらしい。
佐助の言葉に同意するように頷きつつ、指で【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】を示して笑う。
「そうですね……俺も今のを見れただけで十分に満足しましたし、ちょっと位なら変更しても構わないと思いますよ。
北斗さんの言う通り、【ユグドラシル】は今日で最後ですからね。
さて……そういう訳で、パンドラズ・アクターの設定を変更する事を俺たち二人が賛成した時点で、【何かを決める時は多数決】と言う点でも問題はなくなりましたよ？
どうしますか、モモンガさん。」
笑顔の感情モーションを出しながら告げるウルベルトに、はぁっと溜息を漏らしながらモモンガは肩を竦めた。
「もう……お二人からそんな風に言われたら、断れなくなるでしょう。
まぁ、俺があんな風に反応したから、お二人はそう言って下さるん

でしょうけど……本当に、変えてしまってもいいんでしょうか？
そりゃ、俺としても久し振りにあのコマンドを直接見たら、割と本気で【黒歴史】設定だって思いましたし、その部分を変更してもいいって賛成して貰えたのは嬉しいですけど。
変更するって言っても、どう変えたらいいのか迷いますし……」
困ったように呟くモモンガに対して、ノリノリなのはウルベルトだ。
実際、モモンガも設定を変える事には抵抗がないらしく、【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】を使って設定画面を出すと、どこを変更するべきなのか迷っている。
佐助は、その様子にニコニコと笑いながら動作設定画面を指差し、幾つか提案してみる事にした。
「そうだな……取り合えず、ウルベルトの旦那が発動させてモモンガの大将がダメージを食らった、ドイツ語の部分は変更で決まりだね。
とは言っても、全部削るのはもったいないし……今の【ドイツ語】とか、幾つか設置した特殊コマンドによる動作連動を削ったらどうかな。
それと、設定部分にある「常に舞台役者のような、大袈裟な言動、挙動をする」って部分を削って、「本来は冷静沈着な性格だが、必要に応じて道化も演じ分けられる役者である」って変更すれば、【パンドラズ・アクター】の名前に相応しいんじゃないかと思うけど。」
その佐助の提案に、それならとウルベルトが注文を出す。
「どうせなら、ドイツ語でしゃべれる設定も、「精神的に高揚してしまうと、どうしてもドイツ語が出てしまう事がある」に変更すればいいんじゃないですかね。
元々、パンドラズ・アクターは頭が良い設定なんですし、せっかく登録したドイツ語を使えなくするのは勿体ないでしょう？」
どうやら、ウルベルトはパンドラズ・アクターが着ている装備のモデルになった軍服の国に言葉の設定は、出来るだけ残したいらしい。
二人からの提案に、少し考える素振りを見せたモモンガは、素早く設定を変更させていく。

そして、完成したものを表示した画面を、二人に向けて提示した。
「……これでどうでしょう？」
お二人の提案は、出来るだけ組み込んでみたつもりですが……」
ちょっとだけ、自信なさげに呟くモモンガの言葉を聞きながら、二人は覗き込んだ画面の設定を追っていた。
佐助の提案どおり、【ドイツ語】などの特殊コマンドに関連した部分は、大きく変更されていた。
今までは、設定された特殊コマンドの音声入力と共に、連動してオーバーリアクションをランダムで取る様になっていた部分が解除され、コマンドそのものの無くなっていたのだ。
これで、もううっかりコマンド入力して黒歴史を披露すると言う事はないだろう。
その代わり、ウルベルトの提案を受け入れて、設定文の中に【精神的に高揚すると、どうしてもドイツ語が出てしまう】と言う一文が追加されていた。
もう一つ、佐助が変更したらどうかと提案した、「常に舞台役者のような、大袈裟な言動、挙動をする」が「本来は冷静沈着な性格だが、必要に応じて道化も演じ分けられる役者である」に変更されていたので、モモンガ的にもその文面で問題ないと判断したのだろう。
そして、最後に一つ。
挙動の部分の「ナチス式敬礼」が削られていた。
「……モモンガさん……」
つい、いつの間に消したんだと二人が突っ込めば、モモンガは頬を掻きながら首を竦めた。
どうやら、佐助が提案したドイツ語関連のコマンド修正時に、一緒に消したらしい。
「いやぁ……何となく、動作コマンドを見た訳じゃないですけど、消した方がいいような気がしたんですよ、これも。
別に、半分以上当時の俺の趣味で設定したコマンドですし、あっても無くても困るコマンドじゃありませんでしたからね。
これで、パンドラズ・アクターの修正は終了って事で。

そろそろ、ウルベルトさんの衣装を取りにいかないといけませんし。」
別に、佐助もウルベルトもその修正に文句はなかったのだが、自分が修正したい部分を先に口にしていなかったのが、ちょっとだけ申し訳なく感じたらしい。
どこか誤魔化すように、パンドラズ・アクターの設定画面を消したモモンガが、「急ぎましょう」と移動を促した瞬間だった。
グラグラと、大きな振動が宝物殿内に走ったのは。
突然の衝撃に、ナザリックで何か起きたのかと警戒しつつ、先ずはウルベルトの装備を揃える事を優先しようと、全員が一瞬の内に判断を下す。
この中で、一番動作の早い佐助がモモンガに指輪を預け、装備を取って来る為に霊廟内に走り込もうとしたのだが……それは出来なかった。
何故なら……
「一体、その様に急がれるなど……一体何が起こっているのでしょうか、モモンガ様、北斗様、ウルベルト様。」
そう、今まで三人で設定を弄っていてた筈の、パンドラズ・アクターから心配そうな声を掛けられたからだった。

## 時間終了直後から続く、ドタバタな会話をするモモンガ達の話

宝物殿内で突如発生した振動と、パンドラズ・アクターに声を掛けられると言う状況に、三人とも心底驚いていた。

直前まで、三人でパンドラズ・アクターの設定を色々と触っていただけに、この状況は心臓に悪かったのだ。

と言うより、本来なら自分の意志で動く事が無い筈のＮＰＣであるパンドラズ・アクターから声を掛けられるなんて、誰も想像していなかったと言うのが本当だろう。

そんな三人の心境を理解しているのかいないのか、首を傾げながら問い掛けた姿で返答を待つパンドラズ・アクターに対し、最初に動揺から立ち直って返事を返す事が出来たのは、この三人の中で色々な意味で精神面が強い佐助だった。

「あー……うん、それが全く判らなくてな。

俺たちも、今から状況を確認しようとしていた所なんだよ。

パンドラは、何か状況を掴んでいるのか？」

スッとモモンガたちより一歩前に出て、パンドラズ・アクターに対峙しながら問い掛ければ、とても困ったような素振りで首を振る。

まぁ、今まで自分の意志で言葉を発する事が無かったＮＰＣが、この状況を把握している方が佐助的には怖かったので、否定してくれて助かったと思っていた。

とは言え、佐助がパンドラズ・アクターの相手をしつつ本気で状況が掴めないと思っている間に、後ろの二人はＧＭコールやらログアウト関連やら調べていたらしい。

「……駄目ですね、ＧＭコールをしようとしても、そのシステムコマンドが無くなっています。」

「俺の方も、ログアウトどころかシステムコマンドすら出ませんからね。

と言うか、既に終了時間が過ぎてるんですけど……」

ウルベルトとモモンガが確認した言葉を聞いて、佐助も手早く自分の状況を確認するが、彼らと状況は変わらないようだった。
本当に、どうなっているのか状況が把握出来なくて、困惑したように三人で顔を見合わせる。
状況を把握する為にも、王座の間に移動した方がいいだろう。
そう思い、佐助が視線をモモンガとウルベルトに向けると、彼らも同じ事を考えていたらしい。
一先ず、パンドラズ・アクターをこの場に残して王座の間の前に移動しようと、【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】で転移しようとして……出来なかった。
この宝物殿の奥の広間への転移は出来なくても、ここからの転移は出来る設定になっていた筈なのに、その力を発揮しない。
その状況に、三人は思わず動揺していた。
「ど、どうしましょう！
指輪で転移出来ないなんて……俺たち、宝物殿の中と言うか、サーバー内に閉じ込められてしまったんでしょうか？」
泡を食ったように、骸骨の眼孔の奥で赤い眼の光を点滅させるモモンガ。
「もしかしたら……思い出したかのように終了間際の駆け込みログインとか、色々サーバーに過負荷が掛かって運営がバグを出したのかもしれませんよ？
最終日だからって事で、運営の対応が甘かったとか。」
いやいや、流石にそれはないだろうと首を振るウルベルト。
彼としては、「運営が悪い」と言う事で済ませたいと思っているのかもしれない。
それに待ったをかけたのは、佐助だった。
「あー……それはないだろうね、ウルベルトの旦那。
今回、【ユグドラシル】が最終日って事で、割と運営側が警戒してたっていう話を、俺様は職場で小耳に挟んでるんだわ。
結構過疎ってたんだけど、それでも【ユグドラシル】は日本最大のＶＲＭＭＯだったからさ。

この規模のサーバーにテロを仕掛けられたら、シャレにならないって事で色々と俺様が所属しているのとは別の部署に、協力依頼が来てたみたいだし。
そもそも、それだとパンドラが自分の意志で話している状況がおかしいでしょ。」
ウルベルトの言葉を否定した理由を述べれば、途端にウルベルトが渋い顔になる。
かつて、たっちと対した時のような険悪な雰囲気こそ流れないが、色々と今回ここに来るまでの経緯から思う所があるのだろうと言う事は、佐助本人も理解していた。
二人の間に入る様に、口を開いたのはモモンガである。
「だとしたら……一体、何がどうなっているんでしょうね。
【ユグドラシル2】のサービスが始まって、そのままデータが移行したと考えるには、流石に色々と無理があり過ぎますし。
……なぁ、パンドラズ・アクター。
ＮＰＣのお前の視点から、何か気付いた事とかないのか？」
つい、他の意見も聞きたくなったモモンガが、側にいたパンドラズ・アクターに対して問い掛ける。
普通なら、こんな事を質問しても自分で思考する事が出来ない筈のＮＰＣであるパンドラズ・アクターに、まともに返事が出来る筈が無い。
しかし……既に自分の意志を持って行動をしているパンドラズ・アクターの反応は、彼らの予想を見事に裏切った。
そう、それまで口を開く事無く静かに三人のやり取りを聞いていた彼は、少し考える素振りをみせたかと思うと、一つだけ思い当たった事があるかのように口を開いたのである。
「……正直申し上げますと、モモンガ様たちが何をお話されているのか、私には理解の範疇に及ばない点が多々ございます。
全て【リアル】が関わる事と思います故、ＮＰＣの私では仕方が無い事とは思いますが……
ですが……一つだけ、先程から気になっている事がございます。

宝物殿は、どことも繋がる事が無い独立した空間として、ナザリックの中にありながら隔たれた場所として存在しております。
故に、アイテムか何かを使用しない限り、この場で風を感じる事はない筈なのですが……先程から、どこからか空気の流れが発生しているように感じるのです。
私の勘違いでなければ、ですが。」
パンドラズ・アクターの言葉に、真っ先に反応したのは佐助だった。
指先を舐めると、スッと眼前に翳してパンドラズ・アクターの言葉の裏付けをとる。
佐助の真剣な表情に、ウルベルトもモモンガもこの場は静かに待った。
この、何がどうなっているのか全く判らない状況下で、僅かなりとも情報を集める邪魔をするのがどれだけ危険な事なのか、理解出来ないほど馬鹿ではない。
「……確かに、宝物殿の中に風が発生しているね。
問題は、その風が吹いてくる方向が一ヶ所じゃないって事かな。
更に付け加えるなら、風に混じって土や草木の匂いもしっかりあった。
この宝物殿は、構造上から考えても自然に接する場所じゃないのに、だ。
……これはどう考えても、何か異常事態……そうだな、まるで別の世界に飛ばされたとか、そんな普通ではあり得ないが起きたと判断するべきだと、俺様は思うんだけど……情報が少な過ぎてそれ以上は何とも言えないかな。」
暫く間を置いて口を開いた佐助に、ウルベルトもモモンガも唖然とした顔をした。
まさか、この宝物殿に風が……それも自然の匂いが混じった風が吹いている状態など、どう考えてもあり得ない異常事態と言っていいだろう。
この状況では、確かに情報が少なすぎるという佐助の言葉は正しく、誰もが困惑した様子を見せる。

どうしたものかと、本気で悩み始めた三人に対して、思わぬ提案をしてきたのがパンドラズ・アクターだった。
「……あの……もし宜しければ、一旦あちらの席にお掛けになられてはいかがでしょうか。
現在の状況に関する情報を、御方々がお互いに正しく共有する為にも、一旦冷静になる必要がございます。
ですので、今からあちらのソファにお掛けになられて、何かにメモを取りながら話し合われるべきだと、具申させていただきます。
現状で、無暗にこの場を移動するのは危険かと思われますから、あそこソファセットを利用するのが、一番でしょう。
何より……そのように至高の御方々を立たせたままにしておくのは、宝物殿の領域守護者としての矜持に関わりますので。
もし、敵などの襲撃をお考えでしたら、この広間に通じる通路全てに召喚モンスターを壁役として一時的に配置してみれば宜しいかと思われます。
もちろん、我々をこのような状況に陥らせた相手に、召喚モンスターが可能とは考えておりません。
ですが……ほんの僅か一瞬、御方々が敵に対して体制を整えると程度の時間は稼げると、私はそう愚考いたします。
もし、それで宜しいとの事でしたら、私は皆様方にお出しするお茶の準備に入らせていただきたく思いますが、いかがでしょうか？」
首を傾げながらの問いに、思わず三人は顔を見合わせた。
確かに、こうして立ったままで話しているよりは、状況についてメモを取りながら一つ一つ丁寧に確認していく方が、余程建設的だろう。
お茶を飲むのだって、色々なステータス向上効果があるものを選んで出して貰えば、実際に効果が現在もあるのか確認出来て一石二鳥だった。
モンスター召喚にしても、実際に現状で召喚するとどんな感じになるのか、その状況を確認する為の実験と確認になるので、試してみるのは悪くない案だろう。

成程、パンドラズ・アクターから提案された内容は、どれも現状では最良の物だった。
「……そうだな、今は慌てるよりも冷静になるべきか……」
真っ先にそう呟いたのは、モモンガだった。
不思議と、パンドラズ・アクターからの提案に対して抵抗を覚えなかったからだ。
と言うより、何故かモモンガは目の前にいるパンドラズ・アクターに対して、自分の意志で動く事に驚きはしても、自分に対してパンドラズ・アクターが敵対する事はないと、漠然と感じていた。
もしかしたら、パンドラズ・アクターは自分が作ったＮＰＣであり、先程まで設定を弄っていたからこそ安心だと、そう感じるのかもしれないのだが。
だから、三人の中でギルド長としてこの場を仕切る意味でも、冷静さを維持する必要を感じて、自分から二人に対しての確認の言葉を口にしたのである。
「一先ず、この場に居るもの全員でお互いに持っている情報を含めて状況を把握する必要はあるでしょう。
まぁ、一緒にこの状況に陥っている訳ですし、それ程所持している情報に差はないでしょうが……
パンドラの言う通り、あちらのソファに座って、自分たちの現状をメモに取りながら確認していきましょう。
ウルベルトさんも、北斗さんも宜しいですね？」
モモンガの確認を取る言葉に、ウルベルトも佐助も同意を示す。
何も把握できていない現状では、確かに冷静になってお互いの状況を把握していく必要があるのは間違いが無かったからだ。
全員揃ってソファに移動すると、パンドラズ・アクターがスッと頭を下げる。
「それでは、お茶の用意をしてまいります。
ついでに、私自身の自室の状況も確認してまいりますので、しばらくお待ちいただけますでしょうか。」
それだけ告げて、その場から自室へ向かおうとしたパンドラズ・ア

クターの首根っこを捕まえたのは、三人の中で一番素早い佐助である。
まだ、この場所だって本当に安全なのか確認が取れていない状況下で、単独行動をさせるなんて危険な真似を、例えＮＰＣだとしてもさせる訳にはいかない。
正直言って、この四人だけと言う戦力が心許ない状況下で、それを更に減らすなんて選択肢は、佐助の中に存在していなかった。
「ちょーっと、待った。
流石に、この状況下では自室であっても安全かどうか解らないでしょ？
それなのに、なんであっさりと単独行動をしようとするのかな、パンドラは。
もちろん、俺様達の為にお茶を用意して暮れようって思ってくれたのは嬉しいよ？
でもな、現状では戦力ダウンを招きかねない行動は流石に認められないんだわ。
それでなくても、パンドラ以外は魔法詠唱者が二人に忍者が一人なんて言うバランスの悪さなんだ。
ここで、パンドラに退場されるような状況になると、本気で困る訳よ。
それ位は、パンドラだって判るよな？」
なぜ、急に自分が止められたのか、佐助から言われるまで思い当たっていなかったらしい。
この宝物殿内での事なら、ある程度対処可能だという自負と、自室は特に特殊なエリアであるが故に、危険が無いと思い込んでいた事に気付いたパンドラズ・アクターが、申し訳なさそうに首を竦める。
むしろ、パンドラズ・アクターの中では、危険な場所への露払いの役目は自分が請け負うべきだと、そう考えている部分も存在したが故に、自分が単身で動く事に躊躇いが無かったともいうのだが。
とにかく、この判断が不味かった事だけはちゃんと理解出来たらしい。

「……申し訳ございません。
ですが、他の場所に赴くよりは危険は少ないと思われます。
それでもご心配だとおっしゃるなら、この場は召喚したモンスターに一度守りを任せて、皆様ご一緒に私の部屋の状況を確認しに赴かれませんか？
あそこは、モモンガ様や他の方々から頂いたアイテムが多数保管されておりますし、確認するべき点は多々あるかと思われます。」
パンドラズ・アクターとしては、ある程度安全だと言う前提で動いていたらしいが、流石に異世界に丸ごと飛ばされた空間が安全かどうかは、佐助には微妙だと思えた。
もちろん、パンドラズ・アクターの主張もある程度正しいとは思う。
そうでなければ、霊廟の奥にある世界級アイテムが消えていたり、そこに至る前の霊廟のアヴァラータがどういう状況になっているのか判らないからだ。
とは言え、流石に彼一人での単独行動を許すつもりはない。
「うーん……今のパンドラの提案をどう思う？大将とウルベルトの旦那は。
俺様としては、パンドラの提案は悪くないと思う。
どっちにしても、手持ちのアイテムを増やしておいた方が安全なのは間違いないし、まともな補給が出来そうなのは、この場所だけって感じだからね。」
迷ったら、みんなで意見を出し合うのは当然の話。
今までだって、そうやってギルドを運営して来たんだから、パンドラズ・アクターの提案を全員でどうするか考えるべきだと、それと無く促していく。
まだ、モモンガとウルベルトの二人は、どことなくこの状況にどうしていいのか困惑している部分が見えるからこそ、一応まだ冷静な佐助が主導権を握っているだけだ。
もう少しして、モモンガが落ち着いて物を考えられるような状況になったら、ギルド長である彼がこの場を仕切るべきだろう。
そんな事を考えつつ、佐助はモモンガとウルベルトに対して返事を

促すような視線を向けた。
「そうですね……この際ですし、先ずはパンドラの自室にあるアイテムの方から確認をしていきましょうか。
確かに、現在ナザリックと宝物殿が上手く繋がっていない状況ですし、この状況下ではここで集められるアイテムがどれだけあるのか、それの確認作業は確実に必要でしょう。
それに、あそこは内側からロックすると外から遮断され、超位魔法も一撃は確実に耐える強度を持たせてあります。
中にはキッチン等もありますし、籠城だって出来る環境だと思いますよ。
ただ……その前に、霊廟の方に入って世界級アイテムやらギルドの皆さんから預かっている装備やら、回収してお置いた方がいいと思います。
パンドラの自室は、ロックを解除しなければ中に入るのは難しいですが、霊廟から先は条件さえ合えばさっくり入り込める環境ですし。」
モモンガが、パンドラズ・アクターの自室よりも世界級アイテムの回収を優先するべきだと主張すれば、それに同意するように頷くウルベルト。
まぁ、彼の場合は自分の最強装備が霊廟の中にあるのだから、そちらの回収は最優先事項だと思っているのだろう。
異常事態に備えて、自分の装備をきっちり揃えておくのは、最優先課題の一つだからだ。
「俺も、モモンガさんの意見に賛成ですね。
今の時点では、全く状況が把握出来ていません。
その中で、世界級アイテムや俺たちの装備を完全な状態にして備えるのは、最優先事項です。
もし、パンドラの自室を確認しに行っている間に侵入者が来て、俺たちが戻って来るまでに奪われる事態に発展したら、泣くに泣けませんし。
かと言って、戦力分断は下策だと言う北斗さんの意見も、現状では正しい。

現在、戦士職に属するのは北斗さんしかいない上に、その北斗さんだって壁役に適したビルドなのかと言えば、違いますからね。
出来るだけ、別行動を取るのは避けるべきでしょう。
ですので、先ず霊廟を経由して世界級アイテムを回収し、その上でパンドラの自室へと向かうのが一番いいルートでしょうね。
多分、その方が霊廟の中にある世界級アイテムが無事かどうか、気を揉みながら他のアイテムの確認をするより、余程作業効率もいいでしょう。」
そう、モモンガの意見を支持しつつ自分がやりたい事を口にするウルベルト。
このウルベルトの言葉は、確かに佐助たちが抱えている問題を正確に指摘していた。
この四人の中に、完全な戦士職で壁役が出来る者はいない。
一応、パンドラズ・アクターがギルドメンバーに姿を変えればその能力を発揮出来るが、本来の八割しか能力が使えない為に、ワールドエネミークラスが出てきたら、とても万全とは言い難かった。
やはり、この状況下で動くなら、全員揃っての方が間違いないだろう。
ある程度持ち直したモモンガが、今の意見を纏め終えたらしい。
最終確認の様に、全員の顔を見ながらその意見を口にした。
「では……皆さんの意見を纏めると、全員で行動するのは確定でいいでしょう。
ただし、最初に確認するのは、パンドラの自室ではなく奥の霊廟から。
世界級アイテムや仲間の装備を回収しつつ状況を確認、その後でパンドラの自室へ向かって中の状況を確認し、安全を確保すると言う事でいいでしょうか？」
モモンガの問い掛けに、誰も反対する事なく頷いて同意する。
ここまでは、誰も文句はないだろう。
だが、一つだけ霊廟に入るのには問題があった。
モモンガも、その事に気付いているのだろう。

困ったように、口元に手を当てて思案しつつ口を開く。
「さて……全員で霊廟に向かう事で決まった訳ですが、ここで一つ問題があります。
霊廟の中に設置した【アヴァターラ】を、どうやって回避するのか、と言う点です。
今までは、パンドラに【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】を預ける事で回避していましたが、今回は全員で動くので、それも出来ません。
装備していなくても、所持しているだけで襲ってくる以上、アイテムボックスに収納すると言う手も使えません。
召喚したモンスターに預けると言う手もありますが……【プレイヤー】よりも強いモンスターは召喚出来ませんし、余り良い手とは思えません。
そんな訳で、どうしたらいいと思いますか？」
モモンガの言葉に、ウルベルトもパンドラズ・アクターも、どうしたものかと悩む素振りを見せる。
当然だろう。
【全員で行動する】と決めたばかりなのに、この先の【霊廟】に向かう為には誰かが残らざるを得ない状況だと確認できてしまったのだ。
それを回避するのに、何かいい手段はないかと尋ねられて、迷わない筈がない。
短時間なら、大量に呼び出した召喚モンスターでも耐えられるのではないかと思わなくもないが、それよりも確実な手がある佐助が、困ったような顔をしながら手を上げた。
「あー……うん。
俺様なら、その問題も何とか解消出来ると思う。
その前に一つ、みんなに話さなきゃいけない事があるんだけど……聞いて貰えるかな？」
窺うように声を掛ければ、普段とは違う佐助の様子に思う所があったのだろう。
全員が了承し、佐助に話すように促してくる。

彼らから促されて、漸く安心したかのように佐助はゆっくりと口を開いた。
「まず、ここから話す話は絶対に嘘じゃないと言う事を、大前提に聞いて欲しい。
そうじゃないと、話が先に勧められないからね。
あのさ……俺様、実は前世の記憶があるんだ。
約六百年前の、戦国時代に生きた忍だった記憶が、ね。
しかも、俺様には前世の記憶と共に、その頃に持ってた能力とかも継承されてるんだ。
俺様が持つ能力の名は、【婆沙羅】って言う。
この婆沙羅にも、それぞれ攻撃魔法の様に属性があって、俺様が使える属性は【闇】なんだ。
それに忍の技を合わせると……こんな事も出来たりするんだ。」
クルリと、佐助がその場で側転をした瞬間、側転する前位に居た場所と側転して移動した先に全く同じ姿をした佐助が立っていた。
魔法もスキルも、発動させた形跡が無い事に驚く面々に対して、佐助は小さく首を竦める。
「これが、影分身。
俺様の意識を分けたような存在だから、ある程度まで自分で判断して行動する事も出来るし、それこそ影武者的な真似も出来る。
だから、こいつに指輪を付けさせて中に霊廟に向かわせたら、【アヴァターラ】が生きているかどうか確認出来るんじゃないかな。
あくまでも、【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの所持者を襲う】訳だし、影分身でも同じ効果があると思うんだ。
それで、こいつがもし襲われるようなら、もう一体出してそいつに指輪を預ければいいし、襲われないならこのまま移動すれば大丈夫でしょ。
あ、襲われた時の指輪の回収は、心配しなくてもこうして影潜りで指輪をこっちに引き寄せるから、そんなに心配しなくても問題ないからね。」
へらへらと、何でもない事のように笑って言う佐助に、モモンガも

ウルベルトも驚きで声が出ない。
特にウルベルトは、【リアル】の自分がどうやって現場から佐助の自宅に運ばれたのか理解して、顔色を無くしていた。
パンドラズ・アクターはと言えば、佐助の能力を目の当たりにして、キラキラと目を輝かせてどうやってもう一人の自分を構築しているのか、興味津々と言った様子で見ている。
ある意味、ちょっとした混沌（カオス）な状況を引き起こした佐助が見守る中、真っ先に立ち直ったのはモモンガだった。
「……では、北斗さんの、その……【婆沙羅】でしたか？
とにかく、北斗さんが持ってる能力を使えば、誰もが危険を冒さずに簡単に確認出来ると言う事で、間違いないでしょうか？」
佐助が見せた、普通では信じられないような状況を前に、冷静な問いかけをしてくるモモンガ。
やはり、本人は雑用を主としたギルド長と言っていても、様々なギルメンの問題を解決して来た経験から、混乱状態から立ち直るのは早いのかもしれない。
とは言え、先程から色々と信じられない状況が続き過ぎて、かえって冷静になっているのかもしれないが。
どちらにしても、このモモンガの順応力は他人よりもかなり高いと、佐助は考えていた。
「……流石は、モモンガの大将。
一先ず、【婆沙羅】で俺様が作った影分身に関しては、その認識で間違いないよ
ホント……何かと濃いギルメンを相手にしてただけあって、普通はもっと驚いた状態のままなのに、精神的な立ち直りとかも早いよな、うん。」
だからこそ、ついそんな声を漏らしてしまったのだが、それに対してモモンガから帰って来た答えは、佐助が思っていたのとは少し違っていた。
「それなんですけど……どうも、種族スキルの中にあった【精神鎮静化】が掛かっているみたいで、精神が高揚し過ぎると、一気に沈静化

して冷静になるみたいなんです。
だから……北斗さんの事も含めて、この状況下で精神的に色々と振り切れそうになる度に、一気に鎮静化が掛かっているんですよ。
これに関しては、さっき情報交換をしましょうって言った時に話をしようと思っていただけで、黙っていた訳じゃないんですけど……ウルベルトさんも北斗さんも、異形種として何らかの種族スキルとかの影響が出ていないか、確認した方がいいんじゃないですか？」
自分の精神鎮静化の事を告げると共に、ウルベルト達にも大丈夫か確認した方がいいと提案するモモンガ。
確かに、異常事態が発生してから自分の身に何が起きているのか、きちんと確認する必要はあるだろう。
だが、それはもう少し安全が確保出来てからでも、それ程問題はない筈だ。
この異常事態……もしかしたら、別世界に宝物殿の区間だけ飛ばされたのかもしれないと言う、恐ろしい事態を想定するなら、余計に全員の装備を万全にするべきだと、佐助は考える。
そして、その意見はウルベルトも同じだったのだろう。
スッとモモンガから佐助、そしてパンドラズ・アクターへと流れるように視線を向けると、軽く手を上げた。
「モモンガさんの話は、一考に値します。
ですが、それなら余計に何が起こってもいい様に、俺の装備と世界級アイテムだけは確実に確保しておきたい。
いざと言う時に、身を守れる手段はいくつあっても足りませんからね。
そう言う意味でも、北斗さんのその影分身でしたっけ、それに先に斥候役を任せると言う事に、俺も賛成です。
これで、三人とも意見が合いましたし、モモンガさんが言った事も早めに検証した方が良さそうですから、今すぐ動いて貰ってもいいですか、北斗さん。
パンドラも、この場は北斗さんに任せるって事で構わないな？」
最後に自分の意見を口にしたウルベルトが、そのまま状況を纏めつ

つパンドラズ・アクターにも確認を取る。
それに対し、僕の自分が役に立てないこの状況を気にして視線を動かしていたパンドラズ・アクターは、それでもこの決定が一番彼らの考えに沿っていると判断したのか、頷いて同意を示した。
多分、自分の役割は別のところにあると、そう思い直したのだろう。
全員の同意を得られた事で、佐助はホッとしたように胸を撫で下ろしながら、ふとある事を彼らに言い忘れたと思い出す。
「それじゃ、俺様の影に指輪を渡して霊廟内に行って貰うわ。
あ、そうそう。
俺様が持っていた能力の事とかも説明したし、まだここが異世界かどうかはっきり分かった訳じゃないけどさ。
それでも、これからは俺様の事は猿飛佐助……そう、佐助って呼んで欲しいかな。
どうも、【婆沙羅】を普通に皆の前で使い出したら、北斗より佐助で呼ばれた方がしっくりくると思うんだよ。
猿飛佐助は、前世の名前であって【リアル】の名前じゃないから、普通に使っても問題ないからさ。」
影分身に指輪を持たせ、霊廟に向かったのを確認しながらにっこりと笑って佐助がそう言えば、モモンガもウルベルトも呆れたような顔をしていた。
彼らとしては、それなら最初から【猿飛佐助】で登録すれば良かっただろうに、と言いたいのだろう。
しかし、佐助がそれをしなかった理由はちゃんとあった。
「あー……言っていくけど、俺様の名前は歴史にこそ残っていないけど、戦国時代の忍を描いた小説の中には割と出てくる名前なんだぜ？
ただでさえ、敵味方問わずに【忍ばない忍】だのなんだの言われた俺様がそんな名前使ってたら、弐式の旦那と揉める火種待ったなしでしょうが！
そういう知識は、弐式の旦那以外でも持っていそうなギルメンは結構いたし。
何より、【猿飛佐助】の名前はネットで検索すれば、普通にｗｉｋｉ

が見つかる位にはあったからね！
多分、【ユグドラシル】のプレイヤーにも、歴史小説に詳しい奴はそれなりに居たと思うよ？
そう言う奴らに、変に絡まれるのも面倒だったから、登録する時の名前は【北斗】にしたんですぅ。」
初心者時代、最初の無双のお陰でＰＫに散々付き纏われた経験が余程嫌だったのか、本気で嫌そうに顔を顰めている佐助に対して、モモンガたちは苦笑するしかない。
確かに、過去でもそれなりに有名（？）な名前なら、最初の段階で使用を避けるのは当然だった。
とは言え、最終的に【ユグドラシル】では【悪の華】と言われた【アインズ・ウール・ゴウン】の一員だった訳だし、それ程問題はなかった気もするが……それは言わない方が佐助の為なのだろう。
そんな事を考えつつ、先に問い掛けたのはモモンガだった。
「それでは、これから北斗さんの事は佐助さんとお呼びすればいいと言う事ですね？
新しい呼び名に慣れるまで、間違えるかもしれませんが……それ位は勘弁してくださいね。」
名前を変える事は問題ないが、呼び間違える可能性はあるなと苦笑しているモモンガ。
その横で、頷いたのはウルベルトだ。
「確かに、慣れるまでは呼び間違える事は、普通にありそうだな。
呼び易い名ではあるが、今まで散々北斗さんと言ってましたからね。
まぁ……暫くは四人だけで行動する事になりそうですし、その間に慣れればいいでしょう。」
今までの付き合いの長さを考えれば、それも仕方がない話ではあると言うウルベルトの主張に、佐助も反論するつもりはない。
これればかりは、どうしようもない事実だからだ。
一人、ぶつぶつと口の中で繰り返していたパンドラズ・アクターは、どこか満足そうな顔をすると佐助を見てにっこりと笑った。

「……ご尊名、拝命いたしました。
これから先は、私も北斗様の事を佐助様とお呼びさせていただきます。
それにしても……佐助様の力の一旦を拝見し、それに纏わるお話を聞かせていただけるなど……本当に、僕冥利に尽きますね!!」
うきうきと、どこか嬉しそうな様子を見せるパンドラズ・アクターの仰々しい物言いに、こればかりは仕方がないかと、三人は苦笑したのだった。

## 霊廟前でのやり取りと、ウルベルトの心中

佐助の分身が、霊廟の中を確認しに入ってから、そろそろ五分が過ぎようとしていた。

佐助本人が何も言わないから、霊廟の中で何が起こっているのか、モモンガたちには良く解らない。

念の為に、霊廟の前に陣取って奥を覗き込んではみるものの、薄っすらとした明かりに照らされている霊廟内の様子は確認し難い為に、中の状況は余り確認出来ないと言っていいだろう。

一応、佐助の分身が奥に入ってから戦闘している様子は窺えないし、問題はなさそうだと思っていた時だった。

するりと、佐助の分身がこちらに戻ってきたのは。

「中の方を確認してきたけど、あれなら大丈夫でしょ。

特に、何もなかったし。

一応、念の為に【闇婆沙羅】も使って索敵したけど、罠も含めて問題なかったから。

問題の【アヴァターラ】も、俺様が持ってる指輪に反応する事なかったから、宝物殿内の罠そのものが一時的に機能停止してるのか、全面停止してるのかは、ちょっと判断に迷う所だけどね。」

色々と確認して来たらしい言葉に、全員は一先ずこのまま中に入れる事だけは確定した事にかんして、ホッと胸を撫で下ろす。

ただ……宝物殿内の罠とかが全て機能していないとすると、将来的に見て色々と問題がある事が増えてくるのは、ほぼ確実だった。

むしろ、ここを拠点として動くにしても、ここを一旦何らかの形で封印して動くにしても、現段階では情報が少な過ぎるだろう。

一先ず、先の事は奥にある世界級（ワールド）アイテムを回収してからの話になるだろうが。

取り敢えず、だ。

佐助の分身が偵察してくれたお陰で、霊廟内の移動に関しては安全な事は確認出来た。

後は、サクサク回収のために行動するだけなのだが……ここから先

に進むにしても、最初の予定通りそれぞれの入り口に対して、何体かの召喚モンスターを置いておく必要があるだろう。
この場合、連絡用に素早いシャドーデーモンをウルベルトが受け持ち、壁役としてモモンガがデスナイトを呼ぶと言う事で、佐助の分身が戻るのを待つ間に合意が済んでいた。
パンドラズ・アクターには、他にもアイテム関連の鑑定などが待ち構えているので、一先ず召喚関連に関しては温存する事で話し合いも済んでいる。
と言うか、既に必要なモンスターに関しては、この場に召喚して配置済みだった。
「では、この中の安全も確認出来た事ですし、世界級（ワールド）アイテムと装備を取りに行きましょうか。」
全員の顔を見渡し、そう切り出したモモンガの言葉に誰もが同意する。
何時までも、のんびりしている時間はないのだ。
とにかく、確実に安全に休める場所としての活動拠点を確保する為にも、霊廟でのアイテム回収は短い時間で済ませた方がいいだろう。
「……一つ、みんなに提案があるんだけど、いいかな？
もし、みんなが構わないなら俺様の分身をもう一体召喚して、ウルベルトさん以外の装備はその分身たちに回収させないか？
装備回収と、世界級（ワールド）アイテムの回収とで二手に分かれた方が、多分効率が良いと思うんだよね。
時間が無いって事で急ぐなら、その方が絶対早いでしょ。
まぁ、【アヴァターラ】に身に付けさせてる装備の方が、どう考えても数が多いんだから、回収は世界級（ワールド）アイテムの方が先に終わると思うけど、それでもそこから残りを一気に回収した方が、全員で同時に掛かるより多分早いんじゃないかなって、俺様的には思う訳よ。
もちろん、一つくらい分身を増やしたとしても、俺様には特に負担はないからね！」
霊廟に向けて歩き出す寸前、佐助からそんな提案をされた事でモモンガたちの足が止まる。

最初の予定では、佐助の分身も装備を取り外す際の荷物持ちとして、このまま同行させる予定ではあった。
だが、確かに今の佐助の提案の方が効率は確実にいいだろう。
ウルベルトの装備は、霊廟でも中ほどに設置されている。
入り口付近の仲間の装備を、佐助の分身たちに任せる事が出来れば、ウルベルトの装備を回収した後にサクサクと世界級（ワールド）アイテムの回収に向かう事が可能だった。
「……あー、その方が確かに効率は良いですし、お願いしても良いですか？」
佐助さんの分身は、霊廟の入り口から【アヴァターラ】の装備の回収をしてもらって、その間に俺達はウルベルトさんの装備を回収、そのまま奥の世界級（ワールド）アイテム回収に向かうと言う事で。
ウルベルトさんも、それで構わないですよね？」
佐助に同意しつつ、ウルベルトに確認を取るモモンガに、ウルベルトは苦笑しつつ頷いた。
ウルベルトからも同意を得られた事で、佐助は迷わす分身をもう一つ増やし、それらに指示を出す。
元々、【アヴァターラ】に飾られている装備アイテムは、全部神器級と言う貴重なものが多い。
だから、装備アイテムに関する取り扱い知識を、それぞれの分身に額を合わせる事で直接伝播して、共有化させているのだ。
「それじゃ、お前たちは先に霊廟に入って入り口から一体ずつ丁寧に装備を剥がしてくれ。
俺達はウルベルトの旦那の装備を取ったら、そのまま奥に向かって世界級アイテムを回収、その後に反対側から回収を始めるから。」
自分の分身達に、テキパキと指示を出している佐助を見ながら、ウルベルトは少しだけ思考の海に沈んでいた。
正直言って、ウルベルトは色々と佐助の使う【闇婆沙羅】については思う所もあるし、佐助本人にも言いたい事は沢山ある。
もし、こんな現状で余裕があまりない状況でなければ、切々と本人に【そのあり得なさ】について、文句を言っていただろうという自覚

も、ウルベルトには十分あった。
なんと言っても、実際に【リアル】で佐助から【闇婆沙羅】を使われた事があるだけに、その思いは多分このメンバーの中で一番強いだろう。
だが……ウルベルトは佐助本人が嫌いかと問われれば、出会った時点ではどちらかと言うと友人として好きな部類に入っていたのだ。
ウルベルトは、【ユグドラシル】でモモンガと佐助が始めて顔を会わせた時に、ＰＫに圧されていた佐助を一緒に救出に入ったメンバーの一人だった。
そもそも、始めて一月経っていない初心者レベルでありながら、レベル差を無視した強さでＰＫを撃退して単独でプレイしている異形種プレイヤーの噂を聞き付けて来たのはウルベルトである。
実際に彼が活動しているエリアに行ってみて、ＰＫの襲撃から佐助の事を助けて見れば、中々見どころのあるプレイヤーだと思ったのも嘘ではない。
クランに誘ってみたが、色々と忙しいらしく【滅多にログインが出来ないから】と、申し訳なさそうに断られた時は、仲間になれない事が惜しいとすら思っていた。
だから、彼がギルドになった後にモモンガさんに誘われて加入したいと聞いた時だって、一も二もなく推挙者として名を連ねるのを了承したのだ。
彼が仲間になれば、微妙にギルド内での不協和音を発生させるウルベルトとたっちの関係も、ウルベルトと同じような立場のモモンガと佐助の二人によって調整されて、もっと楽しく遊べると思っていたから。
そう、ウルベルトは佐助も自分たち側の人間だと思っていたからこそ、彼に親しみを感じる友人の枠に収めていたのだ。
だからこそ、佐助の仕事の内容が、自分が敵だと認識している富裕層の番犬だと言う事を知って、余計に言い様の無い不快さを覚えてしまっただけで。
しかし、改めて冷静に佐助の立場になって考えてみれば、生きるた

めにはそれも仕方がなかった事位、ウルベルトにだって解る。
あの世界で、幼いころから戦闘能力が高くそれを生活の基盤に置くのなら、軍人になるか富裕層の番犬のような存在になるしかない。
特に、佐助はウルベルトやモモンガよりも早くに親を亡くしている。
普通なら、その時点で佐助の未来はかなり暗いものになっていた筈だった。
だが……実際にそうならなかったのは、かなり無理をしていた両親が残しただろう貯蓄分があったのと、佐助自身の生まれつきの身体能力の高さから、小学校を卒業したら警備会社へ就職する事を条件に、卒業までの学資を会社側から受けていたからである。
その話を、ナザリックで佐助と同じ忍者を選択してた弐式炎雷から又聞きの様に聞いた時、ウルベルトの胸に苦いものが込み上げていた。
事情を何も知らず、勝手な思い込みで佐助への態度を邪険なものにしていた、自分の浅はかさと愚かさに、だ。
そう……ウルベルトは、佐助の仕事を偶然話題に出て知ってから、彼の事をたっちと同じ位蛇蝎の様に嫌ってしまっていた。
敵に与する相手を、友人の枠に入れてしまっていた事を、無かった事にするために。
ウルベルトが憎いと思い、普通の貧民層でも避けるだろう富裕層の番犬なんて仕事を、どうして佐助が選んだのか考えもしなかったくせに、だ。
既に、ギルド内でウルベルトは佐助の事をたっち同様にあからさまに嫌う態度を見せていたから、今更最初の頃の様に仲良く出来るとは思えなかった。
佐助本人は、割とそんなに気にしている様子は見れなかったが、周囲が気にしてたっちと同様に余程の事情が無ければ一緒に戦闘する状況にはもっていかない状況だった事もあって、二人だけで話す機会にも恵まれなかった。
その結果、ウルベルトと佐助の仲は冷え切ったままウルベルトがロ

グイン出来なくなるまで続いていたのである。
ウルベルトは、当時の事を振り返ってこう思う。
もし、もう少し自分から佐助と話すようにしていれば、彼との関係は変わったんじゃないか、と。
確かに、自分にとって憎い富裕層の番犬として警備会社の警備員が、佐助の仕事だった。
その事実は、本人が認めているのだから変わらないだろう。
しかし、だ。
その仕事に、本人が望んでついているかどうかなんて、佐助自身に聞いてみないと判らないじゃないか。
現に……佐助の場合、守ってくれる親も親戚もないまま、今の仕事先に青田買いの様に借金を背負わされていたから、そこに就職する以外にどうする事も出来なかっただけなのだ。
多分、本人にその事を尋ねれば、笑って【そんな事ないよ、ウルベルトの旦那】と言われるだろう。
それ位、今の自分の仕事に関して佐助本人が開き直っている事を、ウルベルトはここに連れて来られる前の会話によって知っている。
自分の家だと佐助が言った、あのベッドと端末以外は生活するのに必要な数日分の着替えがあるだけの、本当に何もないがらんどうの部屋で。
彼が、あっさりとそんな環境の中で【仕方がない】と開き直れた理由には、先程打ち明けられた【前世の記憶】も絡んでいるだろう事位、ウルベルトにだってすぐに想像は出来た。
彼の前世が、戦国時代を生きていた本物の忍びだったとすれば、むしろ【リアル】で警備会社に勤めてテロリストの始末をするのに抵抗が無いのも、むしろ納得がいく話なのだ。
前世も現世も、佐助が血なまぐさい環境で生きているのには変わらないが、それでも現世の方がまだ自由があったからこそ、彼は自分の意思で【ユグドラシル】をプレイし始め、ウルベルトやモモンガと知り合う事が出来たのである。
【ユグドラシル】での佐助は、自由奔放でありながら仲間を守る為にな

ら本当に手段を択ばない、そんなプレイヤーだった。
忍者を選んでおきながら、戦場に出れば【忍ばない忍者】として名を馳せたのだって、佐助がそうしたいと思って動けるのは【ユグドラシル】の中だけだったからだ。
【リアル】での佐助は、何があっても富裕層に従う事を強制され、上からの命令以外で動く事は絶対に出来ない立場だったのだから。
それなのに、自分の意思ではどうにもならない、佐助の抱える事情を考えもせず、詰まらない事に拘って自分から疎遠になったのはウルベルトの方だ。
リアルの一件だって、冷静に考えれば佐助は本来ならテロリスト全てを処分しなければいけなかった筈。
それなのに、その中にウルベルトの姿を確認した事で、その命令を無視してウルベルトの事を助けている事は、どう考えても違反行為だ。
もし、それを上層部に知られたら、佐助本人が処分対象にならないだろうか？
そう考えれば、かなり危険な賭けをしてまで、佐助はウルベルトを助けてくれた事になる。
本人にすれば、【モモンガへの礼儀を果たさせる為】という目的があったからこその行動だろうが、今後の生活を考えるなら、無理をするべき事じゃなかったと、助けられた側のウルベルトですら思えるのに。
それでも……もし、佐助が己の立場を無視してウルベルトを助けてくれた理由の中に、少しでも友情を感じてくれていたのなら……嬉しいと思うのは、少し単純すぎるだろうか？
《……最初に邪険にしたのも俺なら、俺の方から歩み寄るのが、正しいよな？
とは言っても、あれで佐助さんはマイペースで、こちらの邪険な態度をさらりと流せるタイプだからなぁ。
こっちが気にし過ぎてるだけで、向こうはそんなに気にしてない気もする……

それでも、やっぱり助けられた礼は言うべきだよな。
これからは、お互いに協力体制で動くんだし。》
そう思いはするものの、実際にはその場でウルベルトの口から言葉は出なかった。
別に、今までの自分の態度を振り返ると、バツが悪すぎたとかではない。
事情を知らないモモンガと、【リアル】を知らないパンドラズ・アクターの前で、この話をしても良いとは思えなかったからだ。
特に、モモンガの前でこの話をするつもりは、今のウルベルトにはない。
もし話すとしたら、それは佐助との話が済んでからだろう。
彼は、ウルベルトと佐助が【リアル】で本当に殺し合う所だったのだと、無理に知る必要はないのだから。
「……ウルベルト様、どうかなさいましたか？
何か、気になることがまだございましたでしょうか？」
そんな風に、己の思考に潜り込んでいたウルベルトに、声を掛けたのはパンドラズ・アクターだった。
佐助とモモンガは、少し先に進んだ霊廟の入り口前に立って、動かないウルベルトを心配そうに見ている。
多分、二人が入り口前まで移動しているのは、ウルベルトがついて来るものだと思って、普通に移動を開始していたからだろう。
それに対して、最後尾を任されたパンドラズ・アクターは、立ったまま動かないウルベルトに気付いて、何かまだ不安要素が残っていたのかと、声を掛けてくれたのだ。
その状況に気付いたウルベルトは、目の前で首を傾げるパンドラズ・アクターの肩を軽く叩いてから苦笑した。
「いや……少しだけ、考え事をしていただけだ。
心配させて済まなかったな、パンドラ。」
そんな風に笑い掛けつつ、ウルベルトはモモンガたちが待つ霊廟の入口へと足を向けた。

霊廟に入ってみたら、世界級アイテムが一つ足りないんですけど!?

霊廟の中は、静かだった。
外の控えの間よりも薄暗く、どこか幻想的な雰囲気を醸し出している。
目的の場所は、霊廟の中でも少し奥に配置されたウルベルトのアヴァターラだ。
他の仲間の装備は、佐助の分身が行う話になっているのだから、サクサクとスルーして先へと進む。
暫く進めば、目的であるウルベルトのアヴァターラに辿り着いた。
少し不格好なそれは、モモンガが自分の手元にあるウルベルトの画像データを元に、何とか作り出したものである。
それを始めて目にするウルベルトも、造形に対して何か文句を言う様子はない。
元々、モモンガの不器用さはギルメンの中でも定評があった話だ。
それでも、色々と試行錯誤して作っただろう、仲間のアヴァターラに対して、文句を言うのはおかしいだろう。
不満があるなら、モモンガを残して【ユグドラシル】を辞めなければ良かったのだ。
そうすれば、こんな風にモモンガがアヴァターラを作る事もなかっただろう。
ウルベルトも、その事が良く判っているから文句なんて言うつもりはない様子だった。
≪まぁ……文句を言った瞬間に、俺様が一撃でウルベルトの旦那を沈めてやるつもりだったけどね。
モモンガの大将が、どんな気持ちでアレを作ったのか、それを察せられない奴には天罰（物理）は当たり前でしょ。≫
そんな風に考えていた事をおくびにも出さず、佐助は飄々とした様子でウルベルトのアヴァターラの台座へと一足で飛び上がり、慣れた

手付きで装備を剥ぎ取ってはモモンガ目掛けて投げ下ろしてく。
　こうして、佐助が台座に上がってサクサク回収すると言う段取りも、この霊廟の中に入る前の打ち合わせで決めておいた事であり、受け取った装備をモモンガがウルベルトに手渡してその場で身に着けていく事で、無駄にワンクッション置く時間を減らしていた。
　それこそ、流れるような作業で装備を身に着け終えたウルベルトは、寸分の狂いもない位にぴっちりと己の装備を着こなしている。
「……改めてこうしてみても、やっぱりウルベルトさんのその姿は格好いいですよね。」
　モモンガが預かりこの霊廟に収めていた、神器級以外の装備も揃えて万全の姿になったウルベルトは、確かに彼が目指していた【悪の魔法詠唱者】としての格好良さを際立たせていた。
　だからこそ、モモンガが久し振りにその姿を間近に見て感嘆の声を漏らす様子にも、否定するつもりはない。
　それに、言われたウルベルトの方がどこか照れながらも誇らしげな様子を見れば、佐助にも文句はないのだ。
　佐助が見たかったのは、こうして仲間と楽しげに笑い合っているモモンガの姿なのだから。
　佐助の横では、最後尾にいたパンドラズ・アクターも、ウルベルトの最強装備を纏った姿を目にして、感動したような顔をしている。
　と言っても、あくまでも彼が醸し出す雰囲気からそう察しているだけで、実際に見える彼の顔は変化のない埴輪そのものでしかないのだが。
　パンドラズ・アクターの場合、目を大きく見開いたとか目が座ったとかなど、目元の形の僅かな変化かないと、顔を見ただけではその感情を読み取れない。
　これに関しては、創造主であるモモンガから見ても同じ状況らしいのだが、それでも漂わせている雰囲気から何となく微妙に理解出来る事もあるらしく、それで対応しているのだとか。
　ぶっちゃけ、それ相応の外見を作らなかったのはモモンガ自身なので、彼がそれなりに対応出来ている状況なら、佐助はそれに対して何

か言うつもりはない。
と言うか、多分今のままの姿で外に出る事は出来ないだろうと、何となく佐助の第六感が告げている。
多分、俺たちが今どこにいるのかその辺りが最終的に鍵になるだろうが、それでもこの感は外れていないだろう。
冷静に考えれば、判る話だ。
どんな世界に飛ばされたとしても、人の姿をしているよりも異形の姿をしている方が、好感度を得難い事の方が多いのである。
もちろん、最初から異形と人間種と仲良く過ごしている世界もあるから、一概には言えないかもしれない。
だが……それでもアンデットのモモンガをあっさりと受け入れてくれるかどうかとなれば、実に簡単だ。
普通に考えれば、アンデットは魔物として討伐される対象として見られているだろう。
【ユグドラシル】では、普通に【プレイヤー】が選択出来るキャラクターだったが、異世界で自分からアンデットになろうなんて考える者なんてそうそう居ない筈だ。
だとすれば、モモンガの姿を見ただけで敵対行動を示す可能性が高い。
そして、そんな事になればウルベルトもパンドラズ・アクターも、黙ってはいないだろう。
もちろん、佐助だってモモンガに敵対するつもりなら、相手が誰だろうが容赦するつもりはない。
つまり、だ。
出来るだけ穏便に行動するつもりなら、人の姿になるのは必須案件だと言っていいのである。
佐助本人は、【天狐】と言う種族であることもあり、スキルの【変幻自在】を使えば幾らでも好きな姿になれるので、ほぼ問題はない。
確か、ウルベルトも【人化】関連の魔法を一つ、必要に迫られて取っていた筈だ。
モモンガも、その気になれば幻影魔法が使えた筈だし、確か佐助が

持っている【人化】のアイテムを使えば問題ないだろう。
この四人の中で、実はパンドラズ・アクターが一番問題だった。
パンドラズ・アクターの種族は、【上位二重の影（グレーター・ドッペルゲンガー）】だ。
その気になれば、幾らでも人間の外見を取れると思われるかもしれないが、パンドラの様に四十五の枠のうち四十一を使用している場合は、微妙に話が違ってくる。
一時的に姿を変えているだけなら、それこそ幾らでも人間の姿になるのは可能だろうが、今回の場合は違う。
これから先、人前に出る時はずっと使用するが居そうだと考えれば、早々使える物が無い。
元々、パンドラズ・アクターはナザリックの宝物殿領域守護者として、外に出る事を想定されていなかった為に、二重の影として素の姿をそのまま基本外装に指定してしまったからだ。
つまり、これから改めて外装を設定してやらないと、パンドラズ・アクターを人前に出すのは難しいだろう。
「……さ……さん、佐助さん！
俺の声、聞こえてますか!?」
肩を叩かれつつ、そんな風に問い掛けてきたのはウルベルトだ。
どうやら、つい自分の考えに意識を向け過ぎていたせいで、モモンガたちが移動しようと声を掛けていた事に気付かなかったらしい。
何処か、心配そうにこちらの顔を覗き込むウルベルトに、佐助は慌てて手を振った。
「いやー……ウルベルトの旦那が装備を身に着けている間に、ちょっとだけのつもりでこれからの事を考えていたら、ついつい深く自分の思考に嵌っちゃってたみたい。
余計な心配かけて、済まなかったね旦那方。」
両手を合わせて、申し訳なさそうに頭を下げれば、ウルベルトもモモンガもホッとしたような顔をする。
どうやら、彼らに余計な心配をかけ過ぎてしまったらしい。
「もう、まだ安全な場所を確保していないんですから、そう言うのは後にしてくださいね、佐助さん。

入り口付近で、みんなの装備を回収する為に別行動させてる影分身に、問題が起きたんじゃないかって心配したし警戒もしたんですから！」

ピッと人差し指を立て、ぷりぷりと怒りながら駄目だしするモモンガに対して、佐助がちょっとだけふざけた様に拝む仕種を見せれば、横からウルベルトが頭目掛けて軽くチョップを入れつつ突っ込む。

「……ちょっとは反省してください、佐助さん。

まだ、何がどうなっているのか色々と確認不足の状況下で、佐助さん一人だけ負担が大きいんじゃないかって、真面目に心配しているんですから。」

正直、戦士職の佐助にとって魔法職のウルベルトの攻撃などほぼダメージを与えるものではないが、その言葉と合わせて聞けば思わず申し訳なくなる。

今佐助が考えていた事は、みんなで話し合って決めればいい事であり、佐助一人が気を揉む話じゃない。

それなのに、色々と考え過ぎた結果として彼らを心配させていたのだとしたら、これは反省するべきだろう。

「……ごめんね、みんな。

俺様、ちょーっと考えが先走ってた。

もう少し、冷静にならなきゃいけないのに。

そうだよね、今、こうしてこの場にいるのは俺様一人じゃないんだから、皆で話し合うべき事なのに……」

流石に、自分だけが先の事に気を回しすぎていた事に気付き、佐助はしょんぼりと肩を落とした。

別に、佐助はモモンガやウルベルト、そしてパンドラズ・アクターの事を信用していない訳じゃない。

それでも、先回りして色々と考えてしまったのは、佐助自身の【リアル】での仕事柄と言うべきだろうか。

もしかしたら、【前世】の影響も出ている可能性はあるが、その辺りは一先ず考えないことにして、だ。

どうやら、ウルベルトも装備をきちんと元の物に変えられたようだ

し、そろそろ先を急ぐべきだろう。
「……さて、佐助さんも心配は要らないようですし、先に進みましょうか。
ウルベルトさんの準備も出来ましたし。
余りモタモタいると、佐助さんの分身に追い付かれてしまいかねませんから。」
同じ事を考えていたのか、モモンガがスッと視線を世界級アイテムのある方に向けつつ、促すように声を掛ける。
それに頷くと、全員で世界級アイテムのある場所へと走り出したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「……やはり、一つ足りませんね……」
まるで追いかけっこをするかのように、全員で駆け込んだ世界級アイテムの管理室で、思わぬ問題が一つ発覚していた。
仲間と共に、【ユグドラシル】で様々な冒険や戦闘をする事によって得た、この場所に収めて置いた筈の世界級アイテムの数が、どうしても一つ足りないのだ。
と言うか、この部屋に来た時点で、一つ欠けている状態なのがすぐに見て分かった。
何せ、誰の目で見ても判り易いように、きれいに並べて展示してあったのだ。
その状態で、一つ欠ければその場所が陳列台を残して開いている状態になる訳で。
もちろん、今回の宝物殿の一部だけの転移によって、陳列してあった台座から転がり落ちた可能性もあった。
だからこそ、全員で部屋中を探して回ったのだが……やはり、答えは【どこにも無い】だったのである。
この事実を前に、この場に居た四人全員で顔を突き合わせると、お互いに何か知っていないか情報を擦り合わせ始めた。
「まぁ……ここに入るには、【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウ

ン】が無ければ無理だし、ギルメンの誰かが持ち出したって事で間違いないでしょうね。」
そう口に出して、状況を一つ明確にしたのはウルベルトだ。
確かに、現状では彼の言う通りなのだろう。
持ち出されたのは、広域範囲攻撃が出来て対物体最強の力を持つ【真なる無(ギンヌンガガプ)】であり、世界級アイテムの中でも【二十】と呼ばれる物じゃなかった分、まだマシではある。
だが……既に引退したかそれ同然のギルメンが、【ナザリック地下大墳墓】を維持していたモモンガにも無断で、仲間と共に集めた世界級アイテムを勝手に持ち出していると言う事実が、佐助には何よりも不快で仕方がなかった。
そもそも、世界級アイテムを宝物殿の外に持ち出すなら、例え少数になっていたとしても、残っている面々からの承諾を得るべきだろう。
少なくても、ギルド長のモモンガに一言断りが有って然るべきだ。
だが、この場で世界級アイテムがなくて慌てふためくモモンガの様子を見れば、断りもなく持ち出したのは間違いなくて。
「……全く、一体誰でしょうかね、こんなふざけた真似をしでかしたのは。」
ついつい、怒りで声に力が籠る。
そんな佐助を宥めるように、その肩を軽く叩いたのはモモンガだった。
本当は、モモンガとて勝手をされた事に怒りを感じてもおかしくないのだが、佐助の方が先に怒ってしまったので、冷静に状況を判断出来てしまったのだろう。
「佐助さんの言いたい事も判りますが、今更怒ってもどうする事も出来ないですよね。
ナザリック内に残っているかどうかと言う事も、現状では確認が出来ませんし。
一応、パンドラに宝物殿へ出入りしたメンバーが誰なのか、確認を取る事なら出来ますが……」

視線を、それまで向けていた佐助から横に居たパンドラズ・アクターに移動させるモモンガの動きに合わせ、他の二人の視線も彼に向かう。
全員の視線を受け、パンドラズ・アクターは困惑したように顎に手を当てると、少しだけ考える素振りを見せる。
そして、答えに思い当たった所で口元に手を置くと、小さく頷いてから口を開いた。
「そうですね……モモンガ様も含め、宝物殿の奥の間にお越しになられた方は、ここ数か月はいらっしゃいません。
宝物殿の入り口と言うべき表の間の方には、度々金貨を補充にお越しになっていらっしゃったことは存じ上げておりますが……私とは顔を合わせる事無く御帰りになられていましたからね。
先程、モモンガ様たちが揃っていらっしゃる前にこの宝物殿にお越しになられたのは……半年ほど前でしょうか。
そう、タブラ・スマラグディナ様が突然ふらりと現れ、私に指輪を預けてこの霊廟奥の間に立ち入られていらっしゃいます。
霊廟から戻られた後、すぐに転移していかれましたが……そう言えば、普段とはどこか雰囲気が違っていらっしゃった様にも思えます。
何度も、霊廟の方を振り返っては首を振られていらっしゃいました。
私としては、あの霊廟の中にある【アヴァターラ】をご覧になられたからかと思っておりましたが……」
パンドラズ・アクターの証言と、最後にこの宝物殿に立ち入ったと言う状況的に考えるなら、世界級アイテムを持ち出したのは、ほぼ間違いなくタブラ・スマラグディナだろう。
そこで、ふとある事をウルベルトは思い出したらしい。
片手で帽子を手に取り、もう片方の手で軽く頭を掻き回しながら、頭が痛そうに呻くような声を上げる。
「確か……タブラさんは、守護者統括で王座の間の守護者でもあるアルベドに持ち出された【真なる無(ギンヌンガガプ)】を持たせたがっていましたね。
防御特化であるが故に、攻撃方面ではコキュートスやセバスなど他

の僕に劣るからと言う理由で。
元々、アルベドの請け負う主な役割は、王座の間におけるモモンガさんの盾役なんだがなぁ……」
ウルベルトの言葉に、モモンガも佐助もかつてタブラ・スマラグディナが、この件をギルドの議案に出して、多数決で却下された一件を思い出していた。
そもそも、モモンガが世界級アイテムを個人所持しているのだって、ギルドメンバーから承認されたからこそ。
幾ら、ナザリックの守護者統括と言う立場に据えていたとしても、NPCに世界級アイテムを所持させるのを許可するのは難しいだろう。
それこそ、ナザリック内の転移機能を管理する【桜花聖域】の領域守護者のように、その特殊性から世界級アイテムを所持させているのとは、話が違うのだから。

とにかく、これで【真なる無(ギンヌンガガプ)】を、世界級アイテム保管庫から持ち出した相手を確定出来たと考えて良いだろう。
パンドラズ・アクターに与えた能力から考えれば、隠密行動に特化した弐式炎雷が相手でも、発見可能な索敵能力を持つのだ。
そんな彼の目を逃れて、宝物殿内に侵入して世界級アイテムを持ち出す事が可能なのはギルメンには居ないし、弐式炎雷以上に隠密スピード特化した実力者のプレイヤーなど、ほぼ居ないだろう。
なので、タブラ・スマラグディナの名が上がり、持ち出す動機もしっかりある時点で、ほぼ確定案件だと考えて良いだろう、と佐助は幾つもの情報から正解と思しき答えを導き出す。
「あー……そんな事、言ってましたっけ……
そう考えると、タブラさんが持ち出してアルベドに装備させてる可能性が高い、と言う事になるのかな？
確かに、ここ一年位は【リアル】の方が忙しくなってて、俺様もモモンガの大将とナザリックの維持をする為の狩をしに行く以外は、短い時間を円卓の間で話して過ごして終わりだったっけ。

王座の間も、宝物殿の奥の間も確認している余裕なんて欠片も無かったから、こうしてタブラさんが勝手に持ち出してる事実すら気付けなかったもんねぇ。
でもまぁ、ナザリック内にある事がほぼ確定出来たって事で【良し】としますか。
もし、これでナザリックから勝手に持ち出して売り払ったとかだったら、タブラさんの事を軽く絞めてやらにゃダメだって思ってたからね！」
ニィッと口の端を上げながらそう告げると、モモンガとウルベルトの視線がそっと横に逸らされる。
どうやら、今まで仲間である彼らに見せていなかった、【リアル】での佐助の獲物を狙う笑みを見せてしまっていたらしい。
一先ず、足りない世界級アイテムの行方に関しては、ある程度まで推測出来たのでそろそろ移動しないと、予定が狂うと思った時である。
それまで、別行動をしていた佐助の分身の二人が、入り口からひょっこりと顔を覗かせたのは。
「どうやら、思っていた以上にここで時間を使ってしまったようですね。
彼らが、こうしてここまでやって来たと言う事は、既に【アヴァターラ】の装備の回収は全て終わったと考えるべきでしょう。
では、霊廟の外に移動しましょうか。」
モモンガの言葉に、誰もが同意するように頷くと、もう一度だけアイテムの回収し忘れが無いか確認しながら、霊廟の中を移動し始めたのだった。

俺様たち四人が、余裕で生活出来るパンドラの自室って…ねぇ

霊廟から出た面々は、最初にいた霊廟の前室に変化がないのを確認して安堵の息を吐く。

自分達が、霊廟内に居る間に侵入して来るものはいなかったのだから、安堵するのは当然だろう。

現時点では、宝物殿の最奥部とも言うべきこのエリアが飛ばされたここがどこなのか、まだ何も確認していない状態なのだ。

この世界の住人の強さが判らない以上、敵対する行為は控えたかった。

とは言え、この場所の外の通路に陳列されているだろう、伝説級のアイテムの回収はしておきたい。

モモンガ達には言ってないが、佐助はこの世界に飛ばされたと気付いた瞬間、真っ先に分身を通路の途切れた場所に飛ばしていた。

目的は、通路への敵の進入を防ぎつつ、こちらに敵の接近を報せる罠を仕掛ける事。

その目的は、何事もなく無事に達成されていて、佐助たちが霊廟内に行っている間も罠が起動した形跡もない。

そこまでしておいて、モモンガたちに霊廟前の前室の入り口を全て召喚モンスターで固めさせたのは、罠だけで敵の侵入が防げなかった時の壁役が欲しかったから。

この辺りも含めて、モモンガたちに話しておくべきだろう。

≪……これは、緊急避難的な意味合いがあったから、今の俺様がモモンガの大将たちを守るために出来る事の一つとして、大将たちには言わずにこっそりと単独で罠を仕掛けたけど、通路にある伝説級のアイテムや装備の回収する必要性を踏まえて話しておく方が良いよね。

とは言え、仕掛けた罠はあくまでも前世の記憶をもとにして構築した単純なものばかりなんだけどさ。

もちろん、ちょっとばかり【闇婆沙羅】を使用して見分けが出来な

くしてあるけれど、それ以外は特に魔法やスキルを使用していないし。
だからこそ、大量に作成しても俺様自身のＭＰやＨＰには影響が出なかった訳だし、独断専行した事も含めて謝れば許して貰えると思う。
……思うけど、さっきの事を考えるとお説教は必須かなぁ……≫
そう思った途端、佐助は少しだけ口元に笑みを浮かべていた。
正直、説教されると判っている状況で笑うのはどうかと思ったが、それも全部心配しているからと言う彼らの気持ちの裏返しだと思うと、どことなくくすぐったい気持ちになって、無意識のうちに笑みが浮かんでしまったのだ。
本当に、小さく口の端を上げた程度にしか笑みを浮かべなかったのに、目敏くそれを見付けたモモンガが声を掛けてくる。
「佐助さん、何かいい事があったんですか？」
それとも、何か気付いた事でも？」
様子を伺うような声で尋ねるモモンガに、霊廟から回収した仲間の装備を前にどう管理した方が良いのか、パンドラズ・アクターと話しながら横眼でこちらを見ているウルベルト。
パンドラズ・アクターも、時折視線を向けてくる事からこちらの様子を気にしているのが丸わかり出し、そこに何か問題があったのかと言う心配の色が見える。
どれも、自分の事を気にしてくれているのが良く判って、何処か気恥ずかしい気持ちを抱きながら、佐助はゆっくりと口を開いた。
「……実はさ、みんなに黙ってたんだけど……」
そうして、素直に通路の分断された部分の罠に関して佐助が告白した瞬間、予想通り三人がかり（そう、僕として控える筈のパンドラズ・アクターすら、苦言を呈してきたのである）で説教をされてしまったのだった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「……全く、佐助さんは独断専行過ぎます！
まぁ、状況的にすっかり通路の装備アイテムなど一切の事を忘れて

いたのは事実ですし、それに関しては感謝するべきなんでしょうけど。
これからは、ちゃんと相談してから動いてくださいね。
事後報告する場合でも、こんなに間を開けないで下さい。
佐助さん一人に無理をさせて、もし何かあったら……それこそ、俺たちは後悔してもしたらいないんですから。」
安全が確保されている事が確定した、霊廟前の前室のソファに座りながら、ぷりぷりと未だに怒っているのはモモンガだ。
その横では、ウルベルトが佐助の分身が書き起こしたこちらに来ている通路の配置図を前に、どの辺りにどのアイテムが残っているのか、パンドラズ・アクターと検証している。
佐助本人はと言えば、モモンガの座っているソファの前の床に正座させられ、がっつりと反省するように促されている最中だった。
予想以上に、モモンガに心配をかけて怒らせてしまった事を反省しつつ、佐助はモモンガに漸く許しを得てソファに移動する。
そして、テーブルの上に広げられていたこちら側に来ていた通路を確認して、眉を思い切り潜めた。
「……思っていたより、こっちに来ているエリアは多いけど、武器庫と防具庫が多いわりに消費アイテム系やデータクリスタルを始めとする素材系がかなり少ないねぇ。
これだと、それこそどれだけ各自のアイテム所有数が問題になってくると俺様は思うんだけど……その辺りは、パンドラの部屋の安全を確認して、最悪籠城が出来る場所を確保してからになるのかな？」
広範囲である事は、罠を仕掛けさせに向かわせた時点で把握していたが、その内容までは確認していなかった事を少しだけ悔やむ。
重要性が高いアイテムは、その時に回収すると言う方法もあったのに、すっかりそれが頭から抜け落ちていた事実に気付いたからだ。
とは言え、佐助的には単純なものだからこそ効果的な罠を仕掛けたつもりなので、そう簡単に抜けてくる者は居ないだろう。
罠の内容を話した時、ウルベルトもモモンガも、【えげつない】と言わんばかりに、それは嫌そうな顔をしていたのだから。

それはさておき。
佐助の言葉に、それまで図面を見ていたウルベルトやパンドラズ・アクターはもちろん、佐助の説教をしていたモモンガも考える素振りを見せる。
多分、アイテム等の補充が予想よりも少ないことから、今後の行動をどうするべきなのか考える部分が多くあったからだ。
アイテムの補充が出来るか出来ないかは、自分達がどんな状況に置かれているのか解っていない時点で割と重要な案件だから、余計に考える部分があるのだろう。
佐助だって、自分達が居る場所の情報の少なさには、いい加減神経を尖らせているのだから。
暫く沈黙が続いた後、口を開いたのはパンドラズ・アクターだった。
少しだけ躊躇いを見せた後、被っていた軍帽に手を掛けながらそれまで考えていた事を纏め上げたらしい。
スッと、視線を落としてから顔を上げて全員に向き直ってから口を開いた。
「では、やはり私の自室へまず向かうべきでしょう。
モモンガ様を始めとした、至高の御方々から頂いた品々はもちろんですが、モモンガ様が未鑑定の状態ではある者のレアだろうと言うアイテムを取り敢えず収納しておく場所として、使用していたエリアもありますし。
他にも、モモンガ様が個人的に【課金ガチャ】なるもので獲得したと思われる、中位から高位ランクのアイテムも収納してある場所もございますので、其方の内容も確認しておくべきかと。
出来れば、宝物殿の武器庫などの通路の収蔵品は使用しない方向で、話を進められるべきだと具申いたします。
こちらの世界では、あれら行為のアイテムは再入手できない可能性が高いと、その考えて今後の行動を進めておかなくては、本当に必要な際に既に手元になくて困る事態にもなりかねません。
もちろん、御方々の生命等を脅かす事態ならば、消耗する事を承知の上で使用なさることに反対するつもりはございませんが。

どちらにせよ、私の自室には通路の伝説級のアイテムよりも下位のアイテムが多数眠ってるのは間違いないのですから、私の部屋へ入り安全の確認と残りの通路のアイテムの回収が済み次第、私はそちらの整理に当たらせていただきたく願います。」

迷う暇があれば、行動をするべきだと主張するパンドラズ・アクターに、全員が苦笑を浮かべた。

確かに、安全な籠城可能な拠点の確保が済めば、次に必要なのは手持ちの物資の確認とこの世界の情報の収集だと言っていいだろう。

パンドラズ・アクター自身が、「自分が外に出ての情報収集する」と言い出さないのは、自分よりも索敵や情報収集に優れた佐助の影分身が居るからだ。

もちろん、パンドラズ・アクター自身の本音の部分としては、危険な事は自分が請け負うべきと言う考えもあるのだろうが、それでも最初の段階で単独行動を禁止されている時点で、同じ事を口にするつもりはないらしい。

何より、今までの様に割と簡単にアイテムが手に入らない可能性もある状況下において、どれだけ使える物があるのか初期の段階で確認しておくのは、当然の行動だった。

このメンバーの中で、アイテム管理に一番詳しいのは他の誰でもないパンドラズ・アクターなのだから。

パンドラズ・アクターの主張は、先程の佐助の言葉にも繋がるものだったので、モモンガもウルベルトも反対意見はないようだった。

むしろ、今後の事を考えるなら、確かにどれもきちんとしておくべき案件である。

そうして、パンドラズ・アクターの自室に向かうことが確定した。

＊＊＊＊＊

パンドラズ・アクターの部屋への入り口を開くには、割と複雑な手続きが必要だった。

元々、王座の間のアルベドと同じく、自室を持たない設定になる筈だったのを、モモンガさんが課金して部屋を増設したと言う経緯がある。

だからこそ、隠し部屋のような仕様になってしまったのだ。
とは言え、この状況下では隠し部屋仕様なのは悪くない籠城先になるので、文句はないのだが。
「はい、鍵はこれで開きましたよ。」
扉を開けたのは、本来の部屋の主であるパンドラズ・アクターではなく、それらを設定したモモンガである。
何故、彼が扉を出現させて開けたのかと言えば、自分が知っているシステムと変化が無いかの確認の意味も兼ねてのテスト作業として、この扉が選ばれたからである。
モモンガ自身から、「この場所の創造主として、色々と設定に変化があればその差が見分けられるだろうから」と、パンドラズ・アクターを押し退けての主張をされた為、今回は彼の主張に譲った形になった。
今までの流れから考えても、この宝物殿内なら危険は少ないだろうと、そう判断された結果でもある。
扉の中に広がっていたのは、様々な書物が詰め込まれた書棚とアイテムを整備する為の様々な道具が並べられた道具棚、そして書棚を背後に控えた大きな執務机と椅子が並べられた書斎空間だった。
もちろん、部屋の中にあるのはそれだけではない。
余り見苦しくない程度に、部屋の書棚の前やら道具棚の前にも幾つかの箱が並べられていて、そこから幾つかのアイテムが顔を覗かせていた。
それらを一瞥した後、モモンガは慣れた様子で一つの呪文を口にする。
「……敵感知……」
部屋全体に向けてそれを掛けるが、どこからも反応は見られなかった。
遅れて反応があった時の事も考え、念の為に暫く待ったのだが……やはり、こちらに敵意を向けそうな存在はいないらしい。
それでも、そう言うものを隠せるアイテムなどを使用されていると困るので、先陣を切って部屋の中に入ったのは、佐助の影分身だった。

ざっと部屋の中を歩いて回って、彼自身の探知能力で何も感じないのを確認し、モモンガたちの方に振り返る。
「これなら、部屋の中に入っても大丈夫でしょ。
……少なくても、この部屋には何もいないみたいだからね。」
影分身が、佐助と同じ声で話すのを不思議な感じで聞きながら、モモンガたちは書斎部分へと入っていく。
一応、出入り口を閉めずにすぐに退出が出来るように影分身を入り口の守りに残し、改めて部屋の様子を見た。
どうやら、ここは主にパンドラズ・アクターの仕事部屋として、様々なアイテムの定期点検や磨き出し、そして材勢管理データの管理用に使用されているらしい。
そんな風に、彼らが部屋の中を探索するのを横目で見ながら、パンドラズ・アクターが真っ先に移動したのは執務机の前だった。
素早く手で触れると、丁寧にスライドさせるような動きを左右に何度か繰り返していく。
十数かいそれを繰り返し、最後に机の中央部分に出来た黒い空白部分に触れると、机の天板全体が揺らぎ……次の瞬間、そこに現れたのは宝物殿を始めとしたナザリック全体の資金運営管理画面だった。
但し、現在確認が出来ている宝物殿の奥殿を示す部分以外は、全て【ＮＯ　ＤＡＴＡ】と表示されていたのだが。
天板に表示された画面を見て、パンドラズ・アクターはやっぱりと納得したように首を竦めた。
状況的に、罠そのものが停止している時点で確認出来ない可能性が高い事は理解していたが、それでも自分の目で確認しなくてはいられなかったのだろう。
佐助やウルベルトは、この場所にこんな仕組みがあるとは思わず、興味深くそれを見詰めている。
逆に、この執務机の仕組みを知っていたモモンガは、苦笑しつつパンドラズ・アクターの肩を叩いた。
「お前が、先程から何かにつけて自室に向かいたがったのは、これを確認したかったと言うのも一つの理由なんだろうって事は、何となく分

かってたんだ。
今、ここで表示されているのは、宝物殿内にある資金運営管理室のデータを転送したものだし。
元々、この部屋は資金運営状況の報告書を作る為にあるって設定で作り込んだ場所だから、この手の仕掛けも用意してあったんだよな、うん。
だけど……こうして資金管理画面を見る事が出来ない事が確定した事で、完全に別の場所に分断されているのは間違いない訳か……」
画面を覗き込みながら、状況を確認していくモモンガに対して、パンドラズ・アクターはそれまでたっていた場所を譲りながら同意するように頷いた。
これで、僅かなりとも繋がりがある可能性は完全になくなった事は確認出来たのだから、それだけで【良し】とするべきなのかもしれない。
同じ様に、反対側から画面を覗き込んでいたウルベルトが、スルリと指先で画面上にある第七階層の一角にある【赤熱神殿】を示す辺りを優しく撫でる。
そこが、彼の作ったＮＰＣであるデミウルゴスが居る場所だから、ついその名前に反応してしまったのだろうとモモンガと佐助は当たりを付けたものの、それを敢えて口にする事はなかった。
逆に、佐助は改めてナザリック全体を図面として見た事で興味を引かれたのか、階層ごとに名前と要所を確認しながら何度も頷いている。
彼自身、他のギルメンのＮＰＣの作成には協力をしたものの、一人だけで作り上げたＮＰＣは存在していない。
仕事の関係上、ギルメンが揃っていた頃はログインが不定期だった佐助は、【ログインする時間を確保するのがギリギリでＮＰＣを制作している時間まで取れない】と辞退したからだ。
そんな事から、自作と断言出来るＮＰＣを持たない佐助は、ウルベルトのようにナザリックの中に強く執着する存在はいないらしい。
まぁ、自作のＮＰＣが居たとしても、ウルベルトの様に執着したか

と言われると、佐助の性格的に微妙なのだが。
それはさておき。
パンドラズ・アクターの行動によって、ここが完全にナザリックから分断されている事だけは確定したので、これからの行動の指針はある程度絞る事が出来るだろう。
もちろん、まだはっきりと話し合った訳じゃないから、あくまでも佐助の予想であり確定じゃないのだが、モモンガの性格とウルベルトの今の様子から考えて、ナザリックを探すのは第一条件に上がる筈だ。
モモンガは、仲間と共に作り出したナザリックとその場に居るだろうＮＰＣ、そして自分達のようにこの世界に転移してきた仲間が居ないか、気にしているだろう。
もしかしたら、自分達と入れ違いに円卓の間に現れて、そのままナザリックと共に転移している可能性だって、全くない訳じゃない。
そう考えるならば、モモンガがナザリックに戻る事を視野に入れて行動する事を主張するつもりなのは、ほぼ間違いなかった。
ウルベルトは、確実に自分が作り出した最高傑作である第七階層守護者である悪魔のデミウルゴスに、絶対に会いたいと思っているだろう。
何せ、目の前でモモンガの作ったパンドラズ・アクターが、自分の意思で行動している姿を目にしたのだ。
彼の性格なら、デミウルゴスが自分の意思で動く姿を見たいと思わない筈がない。
だからこそ、彼もナザリックへ戻る事を前提とした行動を主張するだろうと、簡単に予測がついた。
パンドラズ・アクターは、二人ほど戻る理由はない気が、佐助にはしていた。
彼にとって、モモンガやウルベルト、そして佐助が側に居るこの状況で、焦る理由はそこまで大きくないだろう。
もちろん、宝物殿領域守護者として、分断されているこの状況に対して何も思わない訳ではない。

だが、自分の創造主であるモモンガがいて、その親友のウルベルトと仲間の佐助が側に居るのを前にしたら、優先順位はモモンガ達に置かれてもおかしくないのだ。
そして佐助は、ナザリックに戻るかどうかに関して問われたら、パンドラズ・アクターと似たような感覚だと答えるだろう。
佐助の優先順位は、第一にギルド長であるモモンガだ。
その次に、この場に居るウルベルトが来て、その下にパンドラズ・アクターと続いていく。
これは、モモンガの事を自分が仕える相手として佐助が認識しているからであり、次にウルベルトがくるのはモモンガが親友として大事にしているからだ。
パンドラズ・アクターが、他のギルメンではなくそのすぐ下に来るのは、モモンガを一人にしたギルメンよりも彼が楽しげに作り出したＮＰＣとして、自我を持った現時点では息子的な立場と認識したからに過ぎない。
そんな感じのメンバーだから、最終的にはナザリックに戻る意思は明確にあるが、それよりも現状の確認と安全の確保が優先されてしまうのは仕方がない話だった。
ざっくりとだが、そんな風に自分も含めた考察をしながら、佐助は影分身の片方を呼び寄せた。
ここから先の部屋に進むのは、今呼び寄せたこの影分身と佐助たちだけのつもりだ。
もう一体は、警戒体制のままこの場に残す。
そうする事によって、安全が確認されたここの場所の確保をさせておく予定なのだ。
もちろん、これは今からモモンガ達に話す予定だった。
先程、独断専行で叱られたばかりなのに、勝手に影分身を残したりはしない。
「モモンガの大将、ウルベルトの旦那、そしてパンドラ。
そろそろここから移動しないか？
今は、この先何があるか判らない状況下なんだ。

こうして、安全が確認された場所に居るのも良いけど、アイテム確保の為にも先を急いだ方が良いと、俺様は思う訳よ。
この部屋に関しては、俺様の影分身を一人置いておけば良いさ。
それなら、万が一の事態が起きた時にも対応可能だしね。」
書斎の中を探索し始めた面々に、佐助はそう声を掛ける。
今回は、行動する前にちゃんと相談したので、モモンガもウルベルトも文句はないらしい。
むしろ、その方が確実だろうと納得した様子で軽く頷くと、移動の為に奥に続くドアへと集まっていく。
パンドラズ・アクターは、少しだけこの場所に何か心残りがある素振りを見せるのだか、佐助の言葉にこの場は従ってくれるようだった。
そんな事を考えつつ、佐助は側に来た分身にこの場での待機と、万が一敵が宝物殿内に侵入して来た時に、こちらへの伝達とこの場の死守を命じておく。
「それじゃ、佐助さんの方の指示も終わったみたいですし、そろそろこの扉の奥のプライベートエリアに移動しまそうか。」
モモンガの言葉によって、四人は移動を始めたのだった。
＊＊＊＊＊＊＊
佐助の分身を先頭に、パンドラズ・アクターのプライベートエリアを全て探索したのだが、特に何も問題はない事が判明した。
部屋の区画は、書斎から繋がるリビングから寝室、バスルーム、クローゼットルームやキッチンなど、それぞれの場所に直接移動できるような造りになっているのを確認して、ほぼここだけで生活可能な空間が出来ていた。
これなら、確かにパンドラズ・アクターの生活空間は、外に頼らずとも宝物殿の中だけですべて済ませて澄ませてしまえるだろう。
むしろ、至れり尽くせりの環境を前に、本気で驚く位である。
初めて入る、パンドラズ・アクターのプライベートエリアの豪華さに目を細めているのは、ウルベルトと佐助だ。
まさか、ここまできっちりと作り込んでいるとは思わなかったの

だ。
「……確かに、これなら籠城する場所としては文句なしだね。」
佐助などは、寝室に備え付けられていたアメリカンサイズのキングベッドを見て、思わず苦笑してしまった位だが、この状況下ではかなりありがたかった。
あの広さのベッドがあるなら、ベッドで同時に二人……いや、ちょっときついのを覚悟すれば三人雑魚寝して休息を取る事も可能だろう。
リビングの三人掛けのカウチソファだって、あれだけゆったりしたサイズなら十分寝られるだけの広さがあるし、キッチンがカウンター仕様で、そのまま向かい合わせで三人までなら座って食事が出来る状態なのも、実にありがたい作りだと言ってよかった。
本当に、これだけきっちり何でもそろっているのを見ると、第九階層にある佐助の自室よりも設備的には充実しているのではないだろうか？
そんな事を考えつつ、安全確保が済んだリビングでパンドラズ・アクターがお茶を入れてくれるのを待っていた。
本来なら、安全確保が出来た時点で次の打ち合わせに入るべきなのだろうが、流石に色々とあり過ぎて一旦休憩すべきだと言う意見が採用されたのである。
パンドラズ・アクターのキッチンには、とても一人暮らし様とは思えないパンドリールームが併設されていて、きっちりと食品のストックがされているとのことだった。
しかも、それらの食品を収納する棚そのものに魔法処理がされていて、それぞれ食品の種類ごとの棚の中にある限り、腐敗などの心配は一切ないらしい。
それを聞いて、本気でこのパンドラズ・アクターの自室エリアは籠城が可能な仕様だと、佐助は思わずにはいられなかった。
今回提供されるのは、【ユグドラシル】では単純な嗜好品と言うだけではなく、集中力と知力アップ効果のバフが付くブレンドハーブティで、使用されたハーブは四種類。

タイム、マリーゴールド、レモンバーベナ、ローズマリーのブレンドだと、用意し始めた時点でパンドラズ・アクターから聞いている。
今回の休憩は、一旦情報を纏める前のリラックスタイムではあるが、同時に次の行動の為に色々と疲れた精神の回復も目的なので、パンドラズ・アクターがこのハーブティの選んだのは間違いじゃない。
それらのハーブを、手慣れた手付きでブレンドしてポットにお湯を注いでいくパンドラズ・アクターの姿は、とても様になっていた。
ウルベルトなど、優雅さすら見えるパンドラズ・アクターの動きを、目を細めながら見ている様子から察するに、デミウルゴスにも同じ事が出来ないか、考えているのかもしれない。
「皆様、どうぞお待たせいたしました。
お茶請けとして、チョコレートとプレーンの二種類のフィナンシェをご用意させていただいております。
こちらも、是非ご賞味くださいませ。」
ハーブティを用意する前にした押し問答の末、モモンガの横に座る事を漸く納得させる事が出来たパンドラズ・アクターによって、そう言いながら丁寧にテーブルの上に並べられたハーブティを各自で手に取ると、まずはその香りを楽しむ事にした。
用意されたお茶請けのフィナンシェも、精神疲労回復効果などが見込まれるバフが付いていて、ちゃんと考えて用意されたのが見て取れる。
目の前に用意された、それこそ食欲を誘う香りに目を細めつつ、最初にお茶を口にしたのは佐助だった。
これは、単純に前世の記憶によって毒見役的な意識が働いたからに過ぎないのだが、それに関して誰も気付いていないので咎められる事はない。
どちらかと言うと、この中で一番回復が必要だと思われているのは佐助だったので、最初にお茶を飲んだりお茶請けを食べたりした事に安堵している雰囲気すらあった。
「うん、どれも美味しいもんだね。
流石はパンドラ、こういう事をさせても卒が無いもんだねぇ。」

ハーブティを一口飲み、お茶請けのフィナンシェを一つ取ってモグモグと食べながら褒める佐助の言葉に、パンドラズ・アクターはスッと頭を下げた。
その様子は、どう見ても嬉しげである。
二人のやり取りを見つつ、モモンガとウルベルトも佐助と同じようにハーブティを口にして……次の瞬間、モモンガに思わぬ惨事が訪れた。
いや、ある意味予測すべき事態だと言うべきだろう。
全身が骸骨であるオーバーロードとなった時点で、モモンガが飲食不能だと言う事は。
口に含んだハーブティが、顎の骨からそのまま膝の上に零れ落ちる姿を見て、慌ててタオルを取り出すパンドラズ・アクターの正面に座ったウルベルトも、その横に座ってモグモグと二つ目のフィナンシェを食べていた佐助も、すっかりその事を忘れていたと言わんばかりに顔に手を当てる。
当の本人であるモモンガすら、自分が飲食不能だと言う事を考えもしなかったと、パンドラズ・アクターが取り出したタオルで膝を拭いつつ、【失敗した】と言わんばかりに片手で顔を抑えているのだから、用意した側のパンドラズ・アクターを責めるのは筋違いだろう。
しかし、だ。
パンドラズ・アクターは、この状況を前にしてそうは思わなかったらしい。
むしろ、自分の失態を責めるかのようにそれまで座っていた場所から床に移動して正座すると、叱責の言葉を待つ体制になる。
パンドラズ・アクターが、自分が叱責を受けると思った瞬間に床の上で正座したのは、先程モモンガたちが佐助の説教をする場面を見ていたからだ。
ある意味、お茶を飲みながら休憩するだけの筈の時間が、予想外に混乱した状況を招いたのだった。

パンドラへの処遇と、モモンガさんのお食事事情を含めた事を相談してみた

その場は、何とも言い難い沈黙に包まれていた。
原因は、それこそ己の失態を悔いるような姿で、床の上に正座して叱咤を待つように俯くパンドラズ・アクターだ。
今回の事は、正直言ってこの場にいた全員のうっかりだと言えるだろう。
彼らが、ほんの数時間前までいた【ユグドラシル】の中では、飲食によるバフ付けは当たり前であり、それはオーバーロードのモモンガに対しても有効な手段だったのだ。
実際に食べる訳ではなく、あくまでもバフ付けの一環として口に運べば消えるものだったから、こうしてオーバーロードの姿が現実になった際に、物理的に飲食不能な状況になるとは考えていなかったとも言えるだろう。
そう考えると、この件でパンドラズ・アクターを責めるのは筋違いだ。
彼からすれば、三人とも普通にモモンガも飲食可能なような対応をしていたのだから、何らかのアイテム効果なり魔法なりで対策済みだと考えていた可能性が高いだろう。
だからこそ、全員のお茶の支度をしたのだろうから。
そう考えるなら、ここでパンドラズ・アクターを叱るのはおかしいだろう。
しかし、だ。
そう佐助たちが考えていたとしても、パンドラズ・アクター本人が納得しなければ意味がない。
失態を犯したと、床に座ってしまっている彼に対して、【こちらのミスだ】と告げたとしても、素直に頷かない気がするのだ。
彼は、被造物として創造主であるモモンガに対して、多大なる忠誠心を捧げている。

だから、今回のようなミスをすると【全て、己の創造主であるモモンガの意を汲めない、自分が悪いのだ】と、そう言い出しそうだからだ。

とは言え、ここでこのままにする訳にはいかないだろう。

もし、パンドラズ・アクターだけじゃなく、今は離れてしまったナザリックのＮＰＣがこの状態なのだとしたら、それこそ佐助たちは精神的にストレスを溜めてしまいそうな環境だからだ。

そうならない為にも、佐助たちは先ずはパンドラズ・アクターへの対応を間違えないようにした上で、これからはゆっくりと彼の意識を変えていけばいいだろう。

もちろん、設定として成立していてどうする事も出来ない部分もあるかもしれない事を視野に入れ、ある程度まではこちらが譲る必要があるかもしれないが。

一先ず、今考える事はパンドラズ・アクターへの対応だろう。

モモンガたちも、似たような事を考えているのかどうか判らないが、一先ずこの場には沈黙が下りていて誰も会話をする者がいない。

そこで、佐助が選んだのはまず集団伝言（マスメッセージ）でモモンガとウルベルトに連絡を取る事だった。

『モモンガの大将、ウルベルトの旦那。

ちょっと俺様からの提案なんだけど、聞いてくれるかい？』

そう集団伝言（マスメッセージ）告げた途端、速攻で食い付いたのはモモンガだ。

『佐助さん、この状況をどうにかする方法を思い付いたんですか！』

多分、モモンガとしてはパンドラズ・アクターだけに非が無い以上、彼を叱責するのは筋違いだと思っているのだろう。

だからこそ、素早くそれに同意するように返事を返す。

『そうなんだよ、モモンガの大将。

多分、このままお咎めなしだと、パンドラの方が気に病んじゃうと思うんだよね。』

そこに突っ込んできたのは、ウルベルトだ。

彼としても、今のパンドラズ・アクターの様子は、見ていられなかったのだろう。

『あー……そんな感じを漂わせていますね、今のパンドラは。
モモンガさんに対して、失態を働いたって感じで可哀想なくらいに悲壮感たっぷり漂わせていますし。
それで、どんな方法を考えたんです？』
そう水を向けるウルベルトに、佐助はあっさりと同意した。
どうやら、この場に居る三人とも今のパンドラズ・アクターの様子は、そう見えていたと言う事なのだろう。
『やっぱり、ウルベルトの旦那もそう感じたんだ。
俺様からの提案は、パンドラには罰の代わりにモモンガの大将に飲食可能になるようなアイテムを探させて、それで駄目ならアイテムを作らせるって案はどうだろうってもんさ。
モモンガの大将の為に、パンドラが考える最高のアイテムを用意する事が償いだと言う事にして、ここでの探し物を率先して動いて貰うって形を取れば、本人も納得しないかなって思って。』
なので、そのまま佐助は思い付いた事を口にする。
実際、佐助の提案はこの場の対応としては一番問題が無いものだった。
これならば、パンドラズ・アクターは自分の得意分野として最大限の力を発揮し、モモンガの為に最高の物を用意するだろう。
『それはいいな。
確かに、これだけ広いクローゼットルームの中から一つだけアイテムを探すのも大変だし、【探せなかったら代案でアイテムを作れ】って言うのが良い。
それなら、パンドラもモモンガさんの為に最高のモノを用意してくれるだろうし、モモンガさんが飲食可能になれば、俺達も気兼ねなく食事とかできるからな。』
最後に自分の本音を交えつつ、ウルベルトは佐助の意見に同意してくれた。
ここで反対されたら、代わりの事を考える方が面倒だったので、ウルベルトから反対されなかったことに安堵しつつ、佐助は次の事を伝える。

『ウルベルトの旦那は賛成って事で。
モモンガの大将は、この提案に異論があるかい？
もしなければ、モモンガの大将からパンドラに言い渡してやって欲しいんだよ。
多分、それがパンドラに対して一番いい対応だと思うんだよね。』
これは、とても大事なことだった。
佐助から言い渡しても良いが、パンドラズ・アクターの気持ちを考えるなら、やはりモモンガが伝えた方がいい。
パンドラズ・アクターが、失態を犯した相手がモモンガである以上、その沙汰もモモンガから与えられるべきだと、佐助は思ったのだ。
この意見も、ウルベルトは反対じゃないらしい。
『分かりました、佐助さん、ウルベルトさん。
確かに、俺が言う方がパンドラも納得してくれると思います。
それじゃ、一旦伝言（メッセージ）は切りますね。』
佐助とウルベルトの言葉に、安心したような気配を漂わせながらモモンガが同意し、そして伝言（メッセージ）は切れた。
そして、モモンガはパンドラズ・アクターの前に立つと、おもむろに口を開く。
「あー……今回の事は、勘違いさせる言動をしていた俺たちも悪かったし、お前がそこまで気に病む必要はないさ。
そう告げても、多分お前は納得しないだろうから、一つ罰を与える事にしようか。
罰の内容は、この後に行う情報整理が終わった後、俺が飲食出来る状態になる様なアイテムを、この部屋にある大量のアイテムの中から探してくる事だ。
もし、俺が使えるアイテムがなければ、お前がその手で俺が使用出来るものを作ってくれてもいい。
俺のために、お前なら最高のアイテムを探してくれるだろう？」
「お前なら出来るよな？」と、言わんばかりのモモンガの言葉に、パンドラズ・アクターは承諾の意を示すように深々と頭を下げた。
それを見て、やはりＮＰＣは創造主である自分達に対して、強すぎ

る位の忠誠心を捧げているのだろうと、佐助は思う。
だからこそ、パンドラズ・アクターからすれば失態に近い事をした自分に対して、こんな風に失態を挽回する機会を与えられ、ますますそれを強くしたのかもしれないと、漠然と感じていた。
まぁ、反発されるよりは悪くないと思いつつ、佐助は次の事を提案する。
「あのさ、ウルベルトの旦那。
今回は、モモンガの大将に人化の魔法を掛けてやって欲しいんだけど。
そうすりゃ、大将も一緒にお茶が出来るだろう？
やっぱり、こういうのはみんなで楽しむもんだと、俺様は思う訳よ。
今だけなら、俺様たちでモモンガの大将を守る事くらいは出来る余裕は十分あるし、問題ないと思うんだよね。」
そう提案すると、ウルベルトは笑いながら頷いた。
彼としても、このままだとモモンガだけが仲間外れになる今の状況を、放置するつもりはなかったのだろう。
多分、佐助が提案しなくても、彼の方から言い出していた可能性はかなり高い。
「確かに、佐助さんの言う通りですよね。
この世界の情報は、まだ全く得ていない状態ですが、俺と佐助さん、そしてパンドラがモモンガさんの側にいる以上、早々遅れを取るつもりはありませんし。
なので、モモンガさんが食事を取れる状況を作る方が優先ですよ。
そもそも、一人だけ食べられずにお預けって、それこそどんな罰ゲームですかって言いたくなりますしね。」
ピッと、鋭い鉤爪の指を立てながらそう言うウルベルトに、床に正座していたパンドラズ・アクターも頷いて同意する。
三人が同意している様子に、モモンガも反論が浮かばなかったのだろう。
ここで反論すると、仲間の事を信用していないと言われかねないし、あくまでもモモンガの事を気遣っての提案だった事から、抗い難

かったのかも知れないが。
何処と無く、苦笑を浮かべている雰囲気を漂わせながら、モモンガは肩を竦めた。
「……もう、三人からそんな風に言われたら、断れないじゃないですか。
解りましたよ、素直にその提案を受けることにします。
それじゃ、ウルベルトさんお願いしても良いですか？」
モモンガの同意が出たことで、ウルベルトは素早く魔法をモモンガに使うと、その姿を人に変えた。
瞬く間に、魔法の効果によってモモンガは穏和そうな黒髪黒目の青年に姿を変えている。
その姿を見て、ウルベルトはにっこりと笑って見せると、アイテムボックスから鏡を取り出して、それをモモンガに差し出した。
「はい、モモンガさん。
どうやら、こちらでこの魔法を使う場合、【ユグドラシル】の頃に姿を指定していないと、どうも【リアル】の姿になるみたいですね。
以前、オフ会でお会いした時の年齢なのは、多分、俺がモモンガさんの人間の姿と言われてイメージ出来たのが、その時の姿だったからかもしれませんが。」
モモンガが受け取った鏡に映るのは、黒髪で黒い瞳の二十代前半の青年だった。
この姿は、確かにウルベルトが言った通り、四年ほど前に最後に行った【アインズ・ウール・ゴウン】のメンバーでのオフ会の際の、優しげな青年だったモモンガの姿をベースに、死霊系魔術師の衣装を着せたような状態になっていると言っていいだろう。
魔法による再現率は素晴らしく、知り合いが顔を合わせれば十人が十人【モモンガだ】と認識出来る姿に、その様子を見守っていたパンドラズ・アクターなどは「これがリアルのモモンガ様……」などと呟いている。
一つだけ、今の姿に問題があるとすれば、それはモモンガの服の前面が全開だった為に、腹部の結構きわどい所まで丸見えだと言う所だ

ろうか。
流石に、それは拙いだろうと佐助が必死に目で合図を送れば、すぐに気付いたモモンガが服の前を閉じていく。
どこか慌てている様子は、自分がうっかり服の前を開けたままだった事を恥じているのだと、すぐに察する事が出来た。
その様子を見るだけで、アンデッド化した事でモモンガに付与されていた精神鎮静化も、一時的なものだとしても消えているのがすぐに判る。
これで食事などを取れるようになれば、アンデッド化による様々なストレス発散手段がなくなっていたモモンガも、少しは楽になるんじゃないかと佐助は考えていた。
横に座るウルベルトも、似たような事を考えていたのか服を直すモモンガを見て、どことなく安心した要は表情をしている。
だが、そう言うウルベルトだって種族が悪魔化している事で、精神面などに何らかの変化が起きている筈だ。
佐助自身、前世の記憶も追加される分そこまで酷いものじゃないが、微妙に狐族としての影響が出ていないとは言い切れない状況なのだから。
この辺りに関しては、やはりきちんとそれぞれの状況を話し合い、どうするのか対応も含めて相談する必要があるだろう。
それは、一先ず横に置いておくとして、だ。
これでモモンガの食事関連の問題は、この場においては解決したと考えていいだろう。
何故、この場においてと制限を付けるのかと言えば、単純に魔法を使用した人間化の場合、制限時間の問題が発生するからだ。
ウルベルトが、今回使用した魔法は第八階位のものであり、この魔法の効果が発生している時間は一時間ほどしかない。
つまり、だ。
あくまでも短時間しか効果が無い魔法では、今後の活動を考えると色々と問題があって使えないと言う判断を下しているのだろう。
この世界が、人間種と異形種が混在しているような、そんな【ユグ

ドラシル】と同じような世界なのか、それとも
異形種が中心になっている世界なのか、または人間種が中心となっている世界なのかで、それこそどう対応するべきなのかが変わってくるだろう。
最初に上げたような世界なら、それこそ俺様たち全員はこのままの姿で普通に旅が出来るだろう。
二つ目の異形種が中心の世界でなら、むしろこのままで行動する方が多分面倒が無い。
もちろん、そんな世界情勢の中でも転移した場所が人間種の国の中だったら、警戒して人間の姿を取る方が良いかもしれないが。
問題は、三つ目に上げた人間種が中心の世界だった場合、だろうか。
この場合、確実に異形種である今の姿をこの世界の人間たち見せるのは、はっきり言って得策じゃないだろう。
特に、モモンガはアンデッドの中でも、骨だけのスケルトン種である。
この世界の常識が判らない以上、アンデッドと言うだけで忌み嫌われる事態になろうものなら、それこそウルベルトやパンドラズ・アクターが黙っていないだろう。
佐助だって、自分の全てを捧げる主君と認めるモモンガにそんな対応をされたら、怒り狂う自覚はあった。
もちろん、モモンガが気にしなくても済むように、裏に隠れてだが。
《モモンガの大将に、何かしようとする方が間違いなんだよね。
そう言う輩が出る前に、露払いして憂いを無くすのも俺様の役目だと思うし。
でも、まぁ……優しいモモンガの大将は、俺様が傷付く事こそ嫌いそうだし、出来れば穏便に済ませたいかな？
その辺りも踏まえると、やっぱり人に化けるのが一番なんだよねぇ……》
つらつら、頭の中でそんな事を考えつつ、佐助はパンドラズ・アクターが改めて紅茶を用意して来るのを待っていた。
先程の騒動によって、すっかり冷めてしまったお茶を改めて淹れに

行ってくれているのである。
今度こそ飲めると、期待しまくっているモモンガの姿を見つつ、佐助はこの場で先程の考えを提案しておくことにした。
「俺様、一つ提案したいんだけどさ。
もし、俺様達が転移させられた場所が、人間中心の国だったり世界だったりしたら、俺様達は多少面倒でも人間の姿に擬態しておいた方が良い気がするんだよね。
この世界の住人の力が、俺様達と比較してどれ位の位置にあるのか判らないし、実際に外に出るのはある程度の情報収集を済ませてからの話だけど、その為にも決めておく必要がある事とか一杯あると思うんだよ。
魔法とか使って、人間の姿に偽装するのは正直いって面倒かもしれないけど、危険を避けると言う意味では有効な手だと思うし。
だからさ、パンドラも含めて全員の人間の外装、決めちゃわない？」
軽いノリで提案する佐助の言葉に、ウルベルトは面倒くさそうに片手を振った。
「でも、俺の魔法じゃ短い時間しか人間の姿になっていられないだろ？
モモンガさんは飲食可能にする意味でも、パンドラが人間化のアイテムを用意するだろうとは予想が付くさ。
そのアイテムを俺達も使うと想定して、この状況下で全員分揃えられるのか？」
幾ら、パンドラズ・アクターの部屋に眠っているアイテムが予想以上に多かったと言っても、それでも数に限りあるのは間違いない。
作り出すにしても、素材の大半は分断されたナザリックの方にある為、作れるアイテムだって限度があるのだ。
そのウルベルトからの指摘に、佐助はにっこりと笑ってみせる。
「実際に、アイテムが必要になるのはモモンガの大将とウルベルトの旦那だけだからね。
俺様の場合、【天狐】の特殊技術の一つに【擬態】があるから、そっちで人間の姿に化ければ自分で解除しない限り解けないから問題な

しだよ。
パンドラは、言わずと知れた【二重の影】だらかね。
どんな感じの人間になるのか、ある程度指示して上げれば二重の影の能力で姿を変える事は可能だし。
必要なアイテムの数が二つくらいなら、それこそ何とかなるんじゃないかな。」
自分の特殊技術と、パンドラズ・アクターの種族特性を上げてやれば、納得したのかウルベルトからそれ以上特に何かを言うつもりはないらしい。
多分、ウルベルト的には魔法で姿を変えるのは色々違和感が伴うものなのだろう。
その点、アイテムを使用して変化する場合、一時的に種族属性を封印するなどレベルダウンを代価に支払う必要はあるが、アイテムを外してそれを解除しない限り姿を維持できるというメリットがある。
その便利さを取るか、それとも自分のレベルを取るかと言う選択になるが、外の世界の情報が一切手に入っていない現状では、まだどちらがいいとも判断できない状況だった。
「それに関しては、考える必要はあるとは思いますけど、それよりも優先するべきは外の情報でしょうね。
今の状況では、自分たちがこの世界でどれだけの力を持っているのか、全く判っていません。
そんな状況下で、レベルが下がる選択肢は出来るだけ避けるべきだと言う気持ちの方が、俺としては強くあるのですが、佐助さんのいう事も否定できません。
このままの姿で出歩けるのなら、それに越したことはないでしょうが……偽装も兼ねてパンドラや俺達の人間の姿を決めておくと言うのは悪くないでしょう。
俺たち以外に、この世界に【ユグドラシルのプレイヤー】が来ていた場合、俺達三人とパンドラだけでは対応できない可能性もありますからね。」
ウルベルトと佐助のやり取りを聞いていたモモンガが、そう言いな

がら首を竦めるのを見て、ウルベルトも納得したように頷いた。
確かに、レベルダウンは余り望ましくないが、現状では擬態の手段は必要だと考えるべきだろう。
モモンガが指摘した通り、【ユグドラシルのプレイヤー】が自分たち以外にも同じように転移させられてきていた場合、今のままの姿では問題が起きる可能性が無い訳じゃない。
「まぁ、モモンガさんの言う指摘ももっともだよな。
何と言っても、俺たちは悪名高きギルド【アインズ・ウール・ゴウン】のギルドメンバーだし。
その中でも、俺は【アインズ・ウール・ゴウン最強の魔法詠唱者】だし、佐助さんは【アインズ・ウール・ゴウンでも戦士系トップスリーの忍ばない忍】で、モモンガさんに至っては【アインズ・ウール・ゴウンの非公式魔王】だからなぁ。
こちらにその意思が無くても、勘繰られるのは間違いないだろうな、うん。
そう言う意味では、この世界の情報を得てある程度安全が確認されるまでは、俺たちはこの姿を晒さない方向で考えるべきかもしれない。」
モグモグと、フィナンシェを手に取って食べながら、ウルベルトはモモンガの意見に同意した。
これで、ナザリック地下大墳墓と一緒に転移してきていたのなら、もう少しだけウルベルトも強気の意見を発していたかもしれないが、現状ではナザリックは自分たちと共に存在していない。
宝物殿の中に収められていたアイテムの中でも、特に貴重で高火力のアイテムや装備が手元にあるとは言え、それでも守りの面で考えるなら片手落ちの状態だ。
そんな拠点が不安定な状況で、流石に無理をするつもりにはなれないのだろう。
最初に、この話を提案した佐助としても、彼らが納得して自重してくれる上に自分の提案を前向きに考えてくれるのが割と嬉しかったので文句はなかった。

「お待たせいたしました、皆様方。
新しくお茶の準備をさせていただくにあたり、紅茶だけではなく珈琲もご用意いたしました。
どちらも、先程用意したものとほぼ似たようなバフ効果を持ったものを選択しておりますので、気兼ねなくお好みの物をおっしゃってくださいませ。」
そこに、ワゴンを押しながら戻って来たパンドラズ・アクターが声を掛けてきた。
予想よりも時間を掛けてきたのは、色々と好みを考えて用意して来たからだったようだ。
特に、今まで飲食が出来なかったモモンガの事を考えて、色々と試せるように用意してきたのだろう。
ワゴンの上には、飲み物だけではなく軽食も追加されていた。
「皆様、茶菓子だけではなくサンドイッチとスープもご用意させていただきました。
ここから先の事を考えると、軽いお食事もされた方が宜しいかと思いましたので。
サンドイッチは、二種類の具を用意させていただきました。
卵とハム、レタスを挟んだシンプルなものと、ローストチキンとチーズ、レタスを挟んだものになります。
また、スープはベーコンや根野菜を刻んで煮込んだ具沢山のミネストローネと、玉ねぎとジャガイモをたっぷりと使ったポタージュの二種類になります。
スープに関しては、どちらも以前作り置きしたものに手を加えた程度の手抜きの物なので、本来は皆様方に提供するのは躊躇われるのですが、状況的に下手に時間を掛けてお待たせする方が問題だと判断いたしました。
もし、お気に召さないとおっしゃるのでしたら、こちらは下げさせていただきますが……どうなさいますか？」
不安げな様子で問うパンドラズ・アクターに、三人とも苦笑を浮かべた。

この状況下で、一から手間をかけて作った食事を希望するつもりはない。
そもそも、【リアル】の食事環境を考えれば、作り置きでもきちんとした食材を使って作られた料理に文句を言うつもりなど、この場にいる誰にもなかった。
むしろ、先程から僅かに漂うスープの美味しそうな匂いが食欲を刺激して、早く食べさせて欲しいと言いたいところなのだ。
ここで食べないと言う選択肢など、佐助にもモモンガにもウルベルトにも、最初から存在していなかった。

楽しい食事と、周囲の探索をしてみたんだけどねぇ……

佐助達が、パンドラズ・アクターが用意した軽食に舌鼓を打つ横で、軽食を用意した本人は食事するよりも、遠隔視の鏡を取り出してその操作に当たっていた。

パンドラズ・アクター曰く、

「皆様に対して、下手なものをお出ししない為に味見をさせていただきました。

割と沢山口にした事もあり、それなりに小腹は満たしておりますので、ご安心を。」

との事なので、今回は本人の主張を優先することにしたのである。

今までに得た外の情報は、佐助の分身が罠を仕掛けに行った分断部分しかなく、しかも外の部分にまで気を回していなかった為に、完全に情報が足りない状態なのだ。

今の佐助たちにとって、どんな情報でも喉から手が出るほど欲しくて仕方がないのである。

だからこそ、少しでも外の情報を収集しようとするパンドラズ・アクターの行動を、彼らに止める理由はなかった。

パンドラズ・アクターが操る遠隔視の鏡が、無事に起動して最初に映し出したのは、ゴツゴツとした岩肌だった。

細く伸びたそれは、先に明かりが見えないほど長く続いている。

現時点で見えている岩肌も、どこかツルツルとした滑らかな雰囲気を持ち、洞窟よりは鍾乳洞よりの雰囲気だった。

鍾乳洞には付き物の水が床にはなかったので、その辺りはまた未確定ではあるのだが。

「……最初に映し出す視点に指定したのは、この宝物殿の通路の分断された部分だったのですが……

これを見る限りでは、どうやらどこかの洞窟……いえ、この場合は鍾乳洞でしょうか。

そこへ、分断された部分が繋がっているようですね。
もちろん、幾つか視点を変えて精査する必要はあるでしょうが、この宝物殿が山間か地下の鍾乳洞の中にすっぽりと填まり込んでいる可能性が高いと、状況的に考えるべきでしょう。
どちらにせよ、人目につく場所にいきなり放り出されたのでは無いと言う点では、今の状況は其れほど悪くないかと思われます。
何せ、この分断されている状態の宝物殿は、外側を見るとかなり形状が特殊ですので、人に見られる可能性が少ない地下にある方が、色々と対応策が多いですし。
我々と共に来ただろう、宝物殿の一部の形状はかなり歪だと言って良いでしょう。
それこそ、奥殿へ続く廊下が四方に伸びている上に、霊廟から最奥部が首から頭へと伸びている形ですからね。
視点を変えて外から見た場合、巨大なゴーレムに見られた可能性もあります。
そんな形状が、草原の中にいきなり出現して人目に曝されている状態だとしたら、どんな最悪を招くことになるか想像しかねますからね。」
パンドラズ・アクターによって、それぞれの前に展開された水晶の画面に映し出されているのは、今、彼自身が見ている遠隔視の鏡の映像だ。
元々、生産職系に属する能力を持ち、魔法職の様々な魔法を使用可能と言う器用なパンドラズ・アクターは、使用する遠隔視の鏡の映し出す映像を魔法媒介として使用し、佐助たちに個々に水晶の画面を需要体として組み込んだものを展開すると言う、ある意味地味な大技を披露してくれた。
これだって、普通一人で確認するなら不要な手間だろうに、さらりとやってのける辺りは、パンドラズ・アクターの能力の高さが窺えたと言えるだろう。
何より、僅かな情報だけである程度の現状をさくさく分析していく頭の良さは、流石ナザリックでも三本の指にはいる知恵者である。

彼の分析は、ほぼ間違いないだろう。
前世の記憶の中で、鍾乳洞を知っている佐助の意見も、パンドラズ・アクターと同じだったからだ。
それにしても……と、佐助はパンドラズ・アクターの知識量の多さに驚く。
宝物殿の領域守護者として、外に出さない前提だったにも関わらず、この知識量の豊富さは何処から来ているのか気になるが、今は役に立っているので深く追求するべきではないだろう。
時間が出来た際に、それとなく聞くのが無難だと判断した所で、モモンガかパンドラズ・アクターに指示を出した。
「確かに、パンドラの言う通りだな。
さて、そろそろ映し出す場所を移動しようか？
宝物殿の転移した場所が、単純に人目がある草原や沼地で無かった事は、隠蔽工作がしやすいと言う点でも悪ない状態だろう。
まずは、この鍾乳洞の形状などを含めた全体像の把握と、どんな場所にあるのかの確認だな。
外へ繋がる場所など、侵入者対策を施す為に必要な場所の把握は最重要案件だと言ってもいい。
その方向で、パンドラもこちらに状況が判り易い様に視点を展開してくれ。」
モモンガの指示を聞いて、パンドラズ・アクターは遠隔視の鏡の視点を広げ、更に周囲を丁寧に探索し始めた。
その横で、佐助は丁寧に鍾乳洞の様子を観察しては必要な情報を抜き出し、そこから更に必要な物を書き出していく。
ウルベルトはウルベルトで、パンドラズ・アクターが今展開している視点が、宝物殿のどこの通路に繋がっているのか、そこに重点をおいたらしい。
パンドラズ・アクターが用意してくれたのだろう、現状の宝物殿の待合室の広間部分と、そこから枝分かれしている保管庫兼通路の展開図の写しに、メモを張り付けながら記入しているようだった。
そんな二人が書き出した、走り書きのようなメモを纏める作業をし

ているのが、モモンガだった。
ウルベルトが、已に記入し終えて移動した場所を見て、書き出したメモをチェックしては、正式なデータとしてもう一つの展開図の写しにその内容を清書していく。
その上で、佐助が拾い上げた鍾乳洞関連の情報を付加して書き込めば、自分達が今いる場所の詳細データの完成だ。
少しずつでも、自分達がいる場所の情報が集まって来た事で、モモンガ達の意識が未知の世界へと向いているのが、佐助には良く判った。
どんな状況でも、仲間と共に細かい情報を収集して必要なデータを作り出すのは、割と楽しい作業だと佐助は思っている。
何かを仲間と協力して、自分たちが楽しむために一つの目的のために動くと言うのは、佐助にとって前世でも現世でも余り縁が無かった事だからだ。
前世では、何かを楽しむというささやかなことすら、許される立場じゃなかった。
現世で、それを初めて体験したのが【ユグドラシル】のギルド【アインズ・ウール・ゴウン】の仲間たちである。
だから、こうして仲間たちと一緒に、自分達が見知らぬ世界を冒険できるのが嬉しかったのだ。
もちろん、面と向かってそれを伝えるつもりは、今の佐助にはない。
こう言うのは、物事がある程度落ち着いてから、思い出程度で話す方が色々と面倒がないと、佐助は考えているからだ。
少なくても、この世界で自分達の立ち位置を確定し、ある程度の基盤を作る方が優先事項になるだろう。
出来れば、その過程でナザリックが見つかれば問題ないのだろうが、そこまで都合良く話が進むとは、佐助は考えていなかった。
《ま、知らない世界に別々に飛ばされたんだし、そう簡単に合流出来るとは限らないよね。
そもそも、本当にナザリックがこっちに来ているのかも解らない訳だし。

何にしても、先ずは情報収集が優先かな？》
次々と集まる情報を、分身達にそれぞれ分担を決めて書き取らせながら、佐助はそんなことを考えていた。
＊＊＊＊＊
それから暫く時間を掛けて、ある程度の情報を集める事が出来た。
予想より、手元に集まった情報が多かったからか、モモンガが確認して纏めるのに四苦八苦していたのを、パンドラズ・アクターが慌てて手伝っていた様子は、とても微笑ましいと思ったものだが。
現在判った情報は、下記の通りだ。
まず、ここが山脈の地下にある鍾乳洞の中心部に近い場所だと言う事。
二つ目は、外は【リアル】で見る事が出来ない緑豊かな自然が広がっていている事。
山脈は東側に大きく伸びていて、西側に平野がありそこに人間の村落と大き目の街が幾つかある事。
更にそこから西へ進むと、大きな湖が存在している事。
北側には、西側よりも大きな平野があり、そこに特に人間種が集まる大きな街（もしかしたら国？）がある事。
さらに北に遡ると、また山脈があってそこに飛龍と人間の集落がある事。
自分たちが居る北東側には、山間の盆地のような場所がり、そこにはビーストマンの街がある事。
南側には平野があるが、それより先に進むと山脈がまた連なり、南東の方角には海に繋がる入り江がある事などなど、色々な情報だ。
これだけ一気に情報が集まると、それこそ精査がある程度済むまでは動くのは危険だろう。
どう考えても、この世界は【ユグドラシル】ではない事が確信出来たからだ。
それはさておき。
この情報から今後の行動を考えるとするなら、やはり人間種の姿になる必要がありそうだと、小さく佐助は口の中で呟く。

自分たちが要る山脈の周囲にある中で、ざっくりと見た感じで一番近い場所にあると思えたのが、人間種の村だったからだ。
もちろん、少々手間が掛かってもビーストマンの住む北の方角に抜ける事も出来なくはないが、人間種の方が色々と話が通じやすい気がしたからである。
但し、それはあくまでもこの山脈の周囲を囲む平野部の中で、と言うだけ。
西側の湖の向こう側にも、人間種が作った国があるようだが……佐助の第六感が、その国に近付くべきではないと告げている。
厄介事に関して、自分の第六感の鋭さは前世から自覚がある佐助としては、危険だと直感した国には近付くべきではないと、モモンガたちに告げる事にした。
この佐助の第六感に関しては、モモンガたちも【ユグドラシル】の頃から良く知っているので、そう告げれば反対する事はないだろう。
何も知らない場所で、自分たちの安全を確保しながらナザリックと仲間を探すとしたら、こういう第六感とかは馬鹿に出来ないからね。
そう判断を下した佐助は、集めた情報で作ったざっくりとした地図に記された、湖の向こう側にある平野側を指し示しつつ、第六感として感じたままを告げていく事にした。
こういう情報は、早い段階で共有しておいた方が良い。
そもそも、わざわざ湖の反対側にある平野に向かうよりも、このまま現在位置から北上して情報が得られそうな人里を探す方が、移動距離も稼げるはずだ。
「んー……あのさ、俺様的にはこっちの方には行きたくない感じがする。
あくまでも、俺様が【水晶の画面】越しに感じた漠然とした感でしかないけどね。
何となく、この湖の向こう側にある平野は嫌な感じなんだよ。
それこそなんて言うのかな……そう、こう背筋がゾワゾワするって言うか、近付きたくないって感じなんだよね。
こんな状況だし、今の段階では近付かない方が良いんじゃないかっ

て、俺様的には思う訳よ。」
つらつらと、自分が【水晶の画面】越しに感じた勘と共に意見を述べれば、モモンガが思案するように顎に手を当てる。
佐助の勘が、馬鹿に出来ない事を承知しているだけに、集めた情報を加味して精査しているのだろう。
その横で、ウルベルトもざっくりと書いた地図を細く鋭い爪で辿っていたかと思うと、自分の意見を口にした。
「……あー、そう言えば昔から佐助さんの勘は当たりますからねぇ。
それだと、西へ向かうルートは避けるべきだろうな。
元々、俺達なら【飛行】の魔法を含めて山越えの手段はいくらでもあるし、この位置から湖を渡る利点は少ないだろ。
それなら、最初から北側の平野を北上しつつ、この平野の中でも大きな都市を目指した方が、無駄が少ないんじゃないか？
南側の平野は、あまり村落が無かったみたいだし、東側のビーストマンの街に関しては、一旦保留で問題ないと思うな。
何せ、ビーストマンが他の異形種に対して友好的かどうか、良く分からないし。
それなら、最初から対応が解る人間の村落を目指した方が、余程有益だろ。」
二人の意見を聞いていたモモンガに、それまで大人しく黙って聞いていたパンドラズ・アクターが、口元に手を当てながら首を傾げた。
どうやら、佐助の勘の鋭さがどこまでなのか、把握しかねているのだろう。
しかし、二人の話から自分なりに意見を纏めているのかも知れなかった。
暫く考えたところで、小さく頷いてから口元の手を外すと、パンドラズ・アクターは静かに口を開く。
「……私は、宝物殿の中しか知らない不肖の身ですので、佐助様の勘がどこまで凄いものなのか、存じ上げておりません。
ですが、私もウルベルト様の意見と同じく、湖を渡る必要性が見出だせませんね。

そもそも、北上すれば確実に接触可能な人の村があるのなら、そこでこの世界の基礎知識の確認をするべきでしょう。
それなりに人がいる村ならば、大きな街の住人と何らかの形で交流があることも考えられますし、こちらがこの世界に疎い事への誤魔化しも可能かと思われます。
それらの点を踏まえますと、情報の収集と共に少しずつ足場を固める事から始めるべきでしょう。」
現状に沿う意見を出すパンドラズ・アクターに、誰もが納得するように頷いて見せる。
確かに、ここがどういう世界なのかまだ良く判っていない段階ではあるが、最初の時点で足場からしっかり固めておかないと、後で自分たちが困る事になるだろう。
そういう意味では、パンドラズ・アクターの意見は間違いじゃないし、今後の指標の一つとして考えるのには適していた。
これは、佐助だけじゃなくモモンガもウルベルトも同じ意見なのだろう。
だからこそ、頷いて見せたのだろうから。
三人から意見が出た事で、モモンガがゆっくりと口を開いた。
「佐助さんが、【湖の向こう岸には行きたくない】とはっきり言い切った時点で、ある程度選択肢は絞られたようなものですよね。
ウルベルトさんの言う通り、佐助さんのこういう時の勘は殆ど外れませんし。
正直、動物が本能的に危険を察知して逃げだすのと、佐助さんの勘ってかなり近いんじゃないですか？
今までだって、佐助さんが乗り気で参加を希望したクエストはどれも上手く攻略出来ましたけど、参加を渋ったクエストは何とか攻略出来たとしても被害甚大になるものばかりでしたしね。
そう言う点から考えて、先ずは近場から攻略して足場を固めていくと言うパンドラの発言は理に適っていますし、それを主体として採用で良いでしょう。
一旦、自分たちの足場がある程度固まった時点で、ウルベルトさん

が言う通りに北上していく事にしましょうか。
このまま、この宝物殿内に引き籠っている事も出来ませんからね。
その為にも、先ずは保管庫兼通路のアイテム回収する班と情報収集をする班と言う形で、一旦二手に分かれましょうか。
情報収集は、魔法職である俺とウルベルトさんがこのままここで行う事にします。
申し訳ないんですけど、佐助さんとパンドラにはアイテム回収に回って欲しいんです。
この中で、宝物殿内に保管されているアイテムに関して一番詳しいのはパンドラですし、佐助さんは分身で人手を増やす事が出来ますからね。
俺やウルベルトさんが、パンドラと一緒にアイテム回収をするより、多分回収が早く済むと思うんですよ。
なので、お願いしても良いですか？」
三人の意見を纏めつつ、これからの行動指示を出すモモンガの言葉に、佐助は異論がない。
実際に、佐助がアイテム回収側に回ると言うのは、モモンガの言葉通り分身で人手を増やせることを考えれば妥当だし、アイテムに詳しいパンドラズ・アクターがそのサポートに回るのも納得の理由だ。
また、魔法職のウルベルトとモモンガがこのパンドラズ・アクターの自室エリアの中に残ってくれていた方が、佐助的にも助かる。
この、どこに敵になる可能性御ある存在が要るか分からない状況下で、守るべき対象の半数以上が確実に安全圏に居てくれるのは、かなりありがたいのだ。
これで、守るべき対象としてパンドラズ・アクター一人に集中しつつ、アイテム回収作業に当たれるのだから。
それに、モモンガとウルベルトの二人が、パンドラズ・アクターから引き継いで情報収集する方が、多分効率的だろう。
佐助の場合、どうしても情報を集めるために分身を外に飛ばす必要があるが、彼らなら魔法を幾重にも唱えて安全を確保した状況で情報収集が可能だ。

これは、同じことをウルベルトも考えたのだろう。
納得したように頷くと、ウルベルトは軽く手を挙げた。
「それなら、私が千里眼の使用を受け持ちましょう。
攻勢防壁の厚さは、多分モモンガさんより上でしょうし、モモンガさんに補助魔法を追加で掛けて貰えれば、私が千里眼を使用する方が適正ですから。
その分、これから拾う情報に関しても、モモンガさんが精査してくださいね。
まず、探すのはここから一番近い人里でしょうか。
接触するなら、ある程度早い方が良いですからね。」
ニッと笑いながら言うウルベルトに、三人が食べた食器を片付けながらパンドラズ・アクターも頷く。
流石に、食べたままその場に食器を放置するのは、彼には容認出来なかったらしい。
運んできたワゴンに、食このお茶を淹れたカップ以外の食器をのせ終わると、軽く頭を下げる。
「では、こちらを下げて参りますね。
すぐに戻りますので、戻り次第佐助様と共にアイテムに回りたいと思います。
それでよろしいでしょうか？」
確認するように問うパンドラズ・アクターに、モモンガはかるくうなずいて同意する。
確かに、これからの作業や集まってくるだろうアイテムの事を考えると、この場に食器が散らかっていない方がいい。
これに関しては、佐助だけじゃなく他の二人も同じ意見なのだろう。
だから、笑顔で頷いて同意してやる。
三人から承諾が得られた事で、安心したようにパンドラズ・アクターがワゴンを押してキッチンへと向かっていく。
それを見送り、佐助はモモンガたちに対して一つの提案をする事にした。

「あのさ、モモンガの大将、ウルベルトの旦那。
俺様の影分身を一体、二人の護衛としてこの場に置いて行こうと思う。
アイテムの回収に関しては、俺様と俺様の影分身の一体のペアとパンドラと俺様の影分身のペアの二組に分かれて行動すれば、効率よく進められると思うからね。
もし万が一、俺様が仕掛けた罠を乗り越えて敵が侵入してきたとしても、影分身が相手をして時間を稼いでいる間にここに逃げ込む事は可能なはずだと思う。
俺様と影分身はもちろんだけど、俺様の影分身同士もある程度意識が繋がっているし、そう言う状況になればモモンガの大将たちに、残しておいた影分身からこっちの状況を伝える事も出来ると思うんだよ。
相互連絡用って意味でも、伝言の魔法を使うよりも影分身を通しての連絡の方が、確実に連絡が取れる可能性が高いと思うんだよね。
俺様かパンドラに付けた影分身から、いきなり連絡が途絶えた時点で何らかの原因がある事は確定出来るだろうし、そうなればモモンガの大将もウルベルトの旦那も警戒態勢がとれるだろう？
そう言う意味でも、影分身を残していこうと思うんだけど……駄目かな？」
軽く鼻面を掻きながら、そうメリットを示すように提案する佐助に対して、モモンガもウルベルトも反対するつもりはないらしい。
そもそも、この場に居る面々の中で一番戦闘経験が高いのは佐助なのだ。
モモンガたちだって、【ユグドラシル】の中では様々な経験をしているが、それでも佐助の経験値とは比較出来るものではないだろう。
実際、【リアル】でも【前世】でも裏の仕事に従事していたような佐助と比べる方が、まず間違いなのだが……それはさておき。
そんな佐助が、モモンガたちを心配しているからこそ色々と考えた上で、こうしてわざわざ提案している事に対して、モモンガたちは異を唱えるつもりはないのだ。

あくまでも、佐助は全員で確実に生き残るための術を探っているのだから。
暫くして、パンドラズ・アクターがキッチンから戻って来た。
彼に対して、先にモモンガたちと話し合った事を話して聞かせた所、特に反対意見は上がらなかったので、そのままその予定通りにする事にした佐助は、まず自分の分身の内の一体にこの場の警護と連絡係を命ずると、パンドラズ・アクターを伴い彼の自室エリアから外へと向かった。
その途中、書斎エリアにいた分身を回収すると、そのまま揃って彼の自室エリアを出て待合室に移動する。
もう一人の分身と合流したところで、一体をパンドラズ・アクターに付けてそれぞれ別れてアイテムの回収に向かったのだった。

# アイテムの回収と資金集めについて考えてみた

それぞれ、能力に合わせて分担して作業をするのは、かなり効率が良かったらしい。

佐助とパンドラズ・アクターが、さくさくアイテムを集めていく間に、ウルベルトが攻勢防壁を働かせつつ千里眼で情報を集め、それをモモンガが纏めていく。

今回、ウルベルトは容赦なく隠蔽魔法と攻勢防壁を働かせているので、余程それを抜いてこちらの情報を取るのは無理だろう。

もちろん、同じ【ユグドラシルプレイヤー】なら、それを越えてくる可能性はあるものの、それなりにダメージを与えられているはずなので、その辺りを佐助は心配していない。

魔法関連の運用について、ウルベルトに対する信用は高いのだから。

これは、モモンガにも同じ事が言えるのだが、ウルベルトは特にその傾向が強い。

補助魔法系は、モモンガの方が力を入れているものだが、それでも魔法全体に自信を持っているのは、間違いなくウルベルトだ。

それを考えるなら、ウルベルトに任せる方が正しいだろう。

何より、集めた情報の分析能力は、ウルベルトよりもモモンガの方が高い。

なら、やはり役割分担はこれで正しいのだ。

アイテム回収をさくさく進めつつ、佐助は再度罠の状態を確認しつつ、更に細かなものを追加していく。

先程は、それほど時間を使う余裕がなかったから、簡易的なものの中でもそれなりに時間が稼げる罠しか設置する事が出来なかったが、今回は違う。

ちゃんと、事前にその話をモモンガとウルベルト、そしてパンドラズ・アクターに通してあるから、それ相応に時間が取れた。

ちゃんと時間を取ることが出来た以上、それ相応しいだけの罠を仕掛けられるので、外からの侵入者に対して一段と安全度が増すだろ

う。
　これは、モモンガ達を守りつつ拠点の安全を確保する為には絶対に必要な事なので、佐助は己が持つ知識を総動員して全力で当たるつもりだった。
　それこそ、戦忍だった前世の知識から、現世における戦闘系警備員としての知識まで、あらゆるものを使うことすら厭うつもりもない。
　ただ、こちらの世界では【リアル】にあったような、化学物質等は存在していないので、その部分を魔法やアイテムで差し替える必要はあるだろうが。
《……ま、別にそれがなくても代用が出来る知識はあるけどね。
　俺様の罠は、戦忍時代に培った知識が中心だし。
　せっかく、【リアル】とは違って自然が豊かな世界なんだし、それを壊すような要因になるようなモンは持ち込みたくないねぇ。
　それと、この通路に繋がってる場所が場所だけに、罠に爆発系は組み込むのは止めておいた方が良いでしょ。
　幾らなんでも、自分も含めて味方ごと生き埋めなんて状況は引き起こしたくないし。》
　そんな風に、罠に使用する魔法やアイテムなどを考慮しつつ、出来るだけ地味でも効果があるものを選択していくことにした。
　まず、撒菱は絶対選択肢から外せないだろう。
　何と言っても、忍者の使用する小道具と言えば手裏剣と撒菱だろうから。
《やっぱり、こういう使い捨て系になり易いアイテムは大量生産できる体制が必要だよねぇ。
　うーん……パンドラなら登録した外装の中に生産系のメンバーもいるから、必要な数だけ材料さえ用意すれば作ってくれるかな？
　とは言っても、こっちの世界の素材がどんな感じかも分からないし、それなりに使い物になるかも含めてもきちんと確認しなきゃ駄目だろうね。》
　つらつらとそんな事を考えつつ、佐助は手を動かして幾つも罠を仕掛けていく。

そうして仕上げた罠を前に、満足そうな笑みを浮かべながら佐助は回収したアイテムを抱えて一旦パンドラズ・アクターの自室へと向かう事にした。
一応、自分が請け負っていた左半分の廊下にあった物は全て回収し終えていたからだ。
必要だと思って仕掛けてあった罠の強化も済み、これなら問題ないだろうと判断したからこそ戻ることを決めたのだが……どうやら、まだパンドラズ・アクターが受け持つ側が完全に終わっていないらしい。
先程、アイテム回収のための分担を決めた際に、展開した宝物殿の展示室兼通路を左右で単純に半部に分けたのだが、パンドラズ・アクターが受け持った右側の方がこちら側に来ている面積が大きくて、回収するアイテムの数が多かったのだ。
その辺りの配分は、パンドラズ・アクターによって上手く言葉巧みに誘導されていたらしい。
全く、こういう所は人に気を使って裏方をやりたがるモモンガに似ていて……本当に困った子供である。
現状のような時は、誰かに負担が掛かり過ぎないように配分するのが、正しいやり方だ。
もちろん、それ位の事はパンドラズ・アクターにも分かっていたのだろうし、彼的には罠を仕掛け直すと言うこちらの話も踏まえて、自分の分担を増やしたのだろうと言う事は推測出来る。
むしろ、これが他のメンバーだったなら、正しい選択だったと言っていいだろうが……何分、相手は佐助だ。
この手の作業は、それこそ前世の経験で慣れている彼にとって、負担と言うほどの事はない。
故に、パンドラズ・アクターの行動は気を回しすぎだと苦笑しつつ、現在彼がいる場所へと足を向けた。
佐助の方が先に終わったと言っても、パンドラズ・アクターも残り僅かだったらしい。
どうやら、最後に残っていた幾つかのアイテムを手にしている彼の

前に移動すると、そっと声をかける。
「そろそろ、全部集め終わったかな？
終わったなら、モモンガの大将たちの所に戻ろっか。
多分、向こうもある程度情報を集め終わっているだろうし。
向こうに戻って、モモンガの大将たちの方も終わってたら全員で、終わっていなかったら俺達で手分けして作業開始しなけりゃ、いつまでも終わらないでしょ。
とにかく、今は何が残っていてどこに収納するのか、それぞれ確認しながら分類する必要があるからね。」
にっこり笑いながらそう告げてやれば、パンドラズ・アクターも同じことを考えていたらしく頷いて同意する。
最後の一つを回収し、それを【無限の背負い袋】に収めて持ち上げたのを見届け、佐助は踵を返した。
その後に、ちゃんとついてくるパンドラズ・アクターを確認した上で、自分の分身の一体にここにも罠を仕掛け直すように指示を出す。
残した分身の分の荷物は、もう一体が軽々と持ち上げて運んでいるので、万が一残った分身が敵襲を受けたとしても、アイテムを奪われる心配はないだろう。
《さて……モモンガの大将たちはどういう情報を得たのやら。
正直、どこかでこちらの世界の路銀を得ておく必要があるんだけど……その辺りまで、モモンガの大将たちは考えてるのかな？》
奥で待つモモンガ達の元へ向かいつつ、これだけは必ず必要な物をどう得るか、そこに思案を巡らせていた。
どうやら、今の段階ではモモンガ達はそこまで頭が回っていないようだが、実際にこれは考える必要がある案件だ。
もちろん、佐助一人が考えなくてはいけない内容ではなく、モモンガ達に相談するべき案件なのだが、やはりその為にはそれに対する提案も考えておく必要がある。
長い視野で物を考えるなら、周囲からの反応を考慮に入れた上で、定期的に稼げる方法を確立する必要があった。
それでも……

「……まずは、【路銀がなくなりそうだ】と言う言い訳が通用する程度の、最低限の見せ金は持たないと駄目だよね。」
そう、どこの村に向かうにしても、最低限の手持ちのお金を持っておいた方が良い。
佐助の予想では、多分この世界の文化レベルは戦国時代とそれ程変わらない程度のではないかと考えている。
だとすれば、小さな村では物々交換が主流で、余り金銭のやり取りがあるとは思えない。
だが、それはあくまでも村の住人たちだけのやり取りの話だ。
村人以外が相手の時は、金銭でのやり取りをしている可能性は高かった。
何せ、村が外で使う為の金銭を得る貴重な収入源だ。
村の中では、物々交換が通用したとしても、他の街ではそれが通用しないだろうから、そこで使う為の金銭を確保するなら、村を訪れた旅人たちに食料などを渡す代わりにそれの代価として金銭を得る位しかない。
戦国時代は、村から国へ税を納めるのに米を使用していたが、そこはこちらも変わらないだろう。
米があるか判らないので、それに代わる主食となる穀物だから、麦あたりが対象かもしれない。
どちらにせよ、最初にどこかの村を訪れるのなら、それ相応の対価となるものが必要だと、佐助は考えていた。
多分、モモンガ達もすぐに気付きそうな気もするが、この話題は早めに解決しておいた方が良いので、戻ったら自分から提案するべきだろう。
できれば、村を探して情報収取している際に気付いてくれると良いのだが、こればかりは何とも言えない。
そう考えていた佐助に、背後から声が掛かった。
「あの……佐助様、一つ宜しいでしょうか？」
その声に振り返れば、どうやら今まで同声を掛けるべきかパンドラズ・アクターは迷っていたらしい。

視線で促せば、漸く意を決したように口を開いた。
「先程、話題に出てこなかった事で一つ気になっていたのですが……人の村に接触するとして、彼らから情報を得る際の代価はどうするつもりなのでしょうか？
私たちの世界の金貨が、こちらの世界で通用するとは思えませんし、アイテム等で対価となり得るのか判りません。
なので、出来れば事前に金銭を得る方法を考えておくべきかと。
もし、差し支えなければ、私の持つ職業レベルの中に【吟遊詩人（バード）】がございますので、それを使うと言う手もあるかと思いまして。
これなら、【叙事詩を語る】事を対価として、色々得られると思うのです。
……いかがでしょうか？
もし、佐助様が駄目だと思われるなら、モモンガ様たちの前でお伺いするのはどうかと思い、ご意見を伺いたくこうしてお尋ねしました。」
こちらの様子を窺うように問うパンドラズ・アクターに、佐助は驚いたように目を見開く。
言われてみれば、パンドラズ・アクターが持つ【吟遊詩人】の職業はこういう状況下に打って付けだろう。
これを利用しない手は、まず無い。
と言うか、パンドラズ・アクターがそんな職業を持っていた事を知らなかった佐助としては、嬉しい誤算だった。
なので、素直にパンドラズ・アクターの事を褒める事にした。
実際、金策問題は今後の課題になるだろうから、この後向かう事になるだろう村で直接行う情報収取での、最重要課題の一つだと言っていいだろう。
モモンガ達は、まだこの問題に気付いていないようだったのに、ＮＰＣのパンドラズ・アクターはが気付けたのは、やはり財政担当として色々な金銭面の管理をしていたからかもしれない。
「良く気付いたね、パンドラ。
俺様自身、どうやって金策をするか考えていたんだけど、パンドラ

が吟遊詩人の職業を持っていてくれて助かったよ。
小さな村じゃ、娯楽は少ないから旅の途中の吟遊詩人相手なら、彼らなりの報酬を得られる可能性は高かったからね。
それに、ある程度大きな街へ行けば酒場があるだろうから、そこで叙事詩を語る事で収入を得ると言う手段も使えるし。
あー……それでも、いつまでもパンドラに一人で稼がせている状態にはしないつもりだから、そこは安心してくれていいよ。
流石に、いい大人三人が子供に稼がせている状態って言うのは、それこそ他から向けられる目も痛いし、何より悪目立ちするからね。
上手く、街から街への商隊とかの用心棒的な仕事を探せば、旅の路銀稼ぎと情報収集の両方で役に立つだろうから、その辺りも考えてみるさ。
さて、それじゃそろそろモモンガさんたちの所へ行こうか。
いい加減、待ちくたびれてるかもしれないからね。」
金銭的な着眼点と、それを解決する自分の職業を示した事を褒めるように頭を撫でると、パンドラズ・アクターははにかんだような仕種を見せた。
どうやら、褒められて照れたらしい。
そんな様子を、心の中で微笑ましく思いつつ、一先ずモモンガたちの待つパンドラズ・アクターの自室へ向かおうと、彼を促したのだった。
＊＊＊＊＊
佐助たちが戻ると、モモンガとウルベルトは既に目的の村を定めたようだった。
地図には、既に目標となる印を付け終えた状態で置いてある。
だが、それよりも佐助が気になったのは、彼らが顔を寄せながら色々とどうしたものかと相談している事だろうか。
「そんな風に、顔を突き合わせて相談しているなんて、どうしたのさ？
なにか、問題でも発生した？
モモンガの大将、ウルベルトの旦那。」
佐助がそう声を掛ければ、ハッとなったようにこちらに視線を向け

たモモンガが、「あー……」と言葉を濁す。
その横で、同じ様に視線をこちらに向けたウルベルトが、ちょっと困ったようにカリカリと頬を掻きながら口を開いた。
「あー……なんて言うべきなんだ？
俺たち、ここから一番近い村を探すついでに情報収集するって事で、改めて俺たちが居る場所を起点にこの周囲の様子を確認にしたんだけど、な。
俺たちが居る鍾乳洞の上の部分が山になっていて、その山の中に人間種と思しき遺体が数体、あったんだよ。
まぁ、それに関しては、既に白骨化している状態だし、俺達には【関わりない】と言う事でそこまで問題視しなかったんだが……亡骸の横にあった荷物から零れたらしい品の中に、だな。
こっちの世界の硬貨だろう、銅貨やら銀貨を幾つか発見したんだ。
それが、どうも俺たちが【ユグドラシル】で使っていた硬貨と違うみたいだから、それを回収してある程度こちらでも調べた後、路銀としてそのまま使ってしまうかどうか、それをモモンガさんと話していたんだよ。」
状況を説明するウルベルトの言葉に、佐助も流石にそれは予想外だったと言わんばかりの顔をする。
確かに、山の中で行き倒れて白骨化している状態の人間を見付けたのも驚きだが、行き倒れた人物が路銀を手元に残していた事も驚きだ。
それに、やはり【ユグドラシル】とは、硬貨単位が違うらしい。
何せ【ユグドラシル】には、金貨以外の通貨はなかったのだから。
銅貨や銀貨と思しき硬貨が存在しているなら、多分流通している金貨も違うのだろう。
それを確認する意味でも、行き倒れて白骨化していた人たちには悪いが、残っていた品々も含めて硬貨はすべて回収するべきだと、佐助は即座に判断する。
二人の話を聞いて納得したように頷くと、佐助はゆっくりと口を開く。

「あー……そう言う話なら、俺様の意見も言わせて貰っていいかな？
実は、アイテムを回収した際にパンドラとも話していたんだけど、こちらの世界の金銭を得る方法を考えるべきじゃないかって事になったんだ。
正直、どこの村に向かうのせよ、手持ちのお金が何もない状態って言うのは、旅人としてちょっとおかしい気がしたからね。
だから、今回の件に関して俺様の意見を言わせて貰うなら、これからすぐにでも現場に俺様の分身を向かわせて、アイテムとか使えそうな物は全部回収させておくべきかな。
あー……ただ、その見付けた遺体は全部その場に埋葬しておいた方が、気分的にも後腐れがない気がする。
アイテムや硬貨は、彼ら自身の埋葬代として頂戴したと思えば、それほど気に病む事もないでしょ？
回収したものは、全部チェックした上で使えそうな物は残した上で、後は全部【シュレッダー】送りで良いんじゃないかい？
硬貨は、ありがたく俺様達の路銀にさせて貰うとしようか。
人の中に紛れる以上、それなりに先立つものは必要だからね。」
この状況で、誰よりも現実的な内容を含めて意見を口にすれば、モモンガもウルベルトも納得したらしい。
ただ、何らかの理由で死んでいた人間のアイテムや金銭を頂戴するより、彼ら自身の埋葬する手間賃だと思えば、意外に割り切れたようだ。
二人が、見付けた遺体の所持品をどうするか話し合っていた理由も、人間としての部分が倫理観を訴えたからだろう。
何となく、そんな風に感じた佐助は、ちょっとだけ苦笑しつつ戦国時代の裏事情を口にした。
「まだ、きちんと弔ってやった代価として頂戴するんだったら、マシだと俺様は思うけどね。
俺様の前世である戦国時代は、戦場で討ち死にした遺体から勝手に刀とか鎧とか使えそうな物を漁っている奴らなんて、割と普通にいたもんだよ？

当時、鉄は貴重だったからね。
折れた刀だって、全部回収して元の鉄に戻して再生する【古金買い】って稼業もあった位だし。
洗いざらい全部剥ぎ取られて、その癖弔う事もなく褌一つで放置されてた死体なんて、それこそ幾らでも戦場に転がってたんだから。
まぁ……それ自体は【火事場泥棒】だし、勝手に遺体から剥ぎ取ったり折れた刀を拾ったりしている所を見付かったら、厳重に処罰されるんだけどね。」
つらつら、当時の事を口にすればモモンガたちの気配が引き攣るのを感じた。
まぁ、こんな前世の実話を聞くとは思わなかったんだろう。
俺様からすれば、割と戦場での剥ぎ取りは【ユグドラシル】でのドロップアイテムの感覚に近い為、それ程躊躇いが無いんだけど。
実際、【ユグドラシル】では倒したモンスターや敵の遺体は消えてアイテムとかだけが残るけど、ここが俺様達にとって現実になったのだと言うなら、これからはそれらの遺体も残ると考えるべきだろうし。
「モモンガの大将、ウルベルトの旦那。
これは大事な事だから、この際はっきり言っておくけど、これから倒した敵の遺体は全部残ると、そう考えて欲しい。
一応、俺様が側に居れば遺体とかは全部【闇婆沙羅】で回収した上で、改めて完全に土に返す事も可能かもしれないけど、他の人が見ている前じゃそんな事は出来ないでしょ？
まぁ、ウルベルトの旦那やモモンガの大将の魔法を使って、きれいさっぱり荼毘に付すと言う方法なら、人に見られても問題ないかもしれないけどさ。
どっちにせよ、ここが現実なら倒した相手が勝手に消えるなんて事はないと思った方が良いと、俺様は思うんだよね。
そもそも、モモンガの大将たちはこうして実際に白骨化した遺体を目にしても、そのアイテムとかを勝手に使う事を問題にしているだけで、遺体そのものには特に何も感じていないんじゃない？」
【違う？】と問えば、ウルベルトもモモンガも苦笑しながら頷いた。

どうやら、彼ら自身も自分の精神が変質していて、遺体を見てもそれ自体はそこまで気にならなかったらしい。
【リアル】に居た頃の彼らなら、死体を見付けた時点で慌てふためいていてもおかしくないのだが、それが無かった時点で何となくそんな気がしていた佐助は、この件に関してはまた改めて話を詰めるべきだろうと、そんな事を考えつつ話を変える事にした。
視線をパンドラズ・アクターに向けて、佐助は口を開く。
「今は、まだこちらの世界に来たばかりで余りこの世界の常識が分からない状況だし、さっきも言った通り今回はこの遺体の埋葬代で手持ちのアイテムは貰い受けるってことで、この件は終了って事で。
それより、問題は今後の事でしょ。
一応、アイテム回収した後にパンドラから、彼の【吟遊詩人】のスキルを使ってこの世界の酒場とか村で興行して金銭を得たらどうだろうかって提案があった。
俺様的には、それも一つの手として有効だなって思ってる。
ただ、俺様たち自身も傭兵のような仕事で別途稼ぐ必要はあるとは考えてるけどね。
モモンガの大将やウルベルトの旦那は、こっちで金銭を得る方法解いて何か宛はある？」
佐助の問いに、モモンガもウルベルトも考える様な素振りを見せた。
まだ、彼らはそこまで考えが至っていなかったらしい。
村を探す途中で、うっかり発見した遺体の周囲にアイテムやら何やらが散乱していた事で、そちらに意識が向かっていた為だろう。
暫く考えた後、先ずはウルベルトが口を開いた。
「そうですね……佐助さんが言う傭兵と言うのはアリだと俺も思う。
もし、それ以外の意見がないかと言われると……正直かなり難しい所だろうな。
俺たちの中で、生産職を取っているのはパンドラだけだし、何かを作って売ると言うは難しいだろう。
逆に、手持ちの【ユグドラシル】のアイテムに関しては、こちらの

世界での価値がはっきりしない段階ではやめておいた方が良いだろうな。
そもそも、今の俺たちが手放しても問題ないレベルのアイテムなんて、それこそ手持ちはそれほどないだろ？
元々、ここにあるのは簡単に手放せるようなものは少ないし、アイテムボックスの中にあるアイテムだって無限じゃない。
だったら、それを手放すのは最終手段と考えた方が良いだろう。
そう考えると、佐助さんが言った傭兵家業かそれに類するものが一番だと、俺も思う。」
ウルベルトの言う事は、どれも的を射ていると言っていいだろう。
実際、このメンバーの中できちんとした生産職を取っているのはパンドラズ・アクターだけ。
【料理人】だけは、佐助も自分の趣味の一環としてレベル五まで取ってはいるが、それ以外は全て種族と戦闘職で埋め尽くされている。
もしかしたら、データクリスタルなど【ユグドラシル】の素材を使用すれば、こちらの世界でも装備などを作れるかもしれないが、それだって元手になる素材やデータクリスタルが必要だ。
残念な事に、分断された宝物殿のこちら側には余り素材もデータクリスタルもない。
一応、モモンガが余り価値のないデータクリスタルをパンドラズ・アクターの自室の【クローゼットルーム】の中に突っ込んだらしいので、そこを探せば出てくるかもしれないが、それだってどれだけあるか判らない以上、それ当てにするのは良くないだろう。
そんな風に、つらつらと佐助が考えていると、次にモモンガが口を開いた。
「俺も、ほぼウルベルトさんと同意見ですね。
困った事に、俺は死霊系特化の【ドリームビルド】ですし、ウルベルトさんも戦闘特化で生産系の能力はありません。
一応、佐助さんが自分の趣味で【料理人】を取っているのは知ってますけど、それだけでは金銭を得る手段としては弱いですからね。
長期滞在するなら、料理の屋台を開くと言う手もありますけど、そ

うじゃありませんし。
流しの商人として商売をするには、俺たちの持つアイテムがこの世界でどれだけの価値になるのか判りませんし、下手なものを流通させる訳にも行きません。
そもそも、俺たちの手持ちのアイテムを全て持ち寄っても、商人としてやっていける数はありませんよ。
むしろ、補給が無い状態で手持ちのアイテムを放出していたら、こっちが自滅する可能性だってあるんですから、それはしたくありませんね。
ただ……こちらの世界の常識次第では、俺たちが使える魔法はそのまま収入の手段になるかもしれませんよ？
雨が余り降らない場所で、【天候操作（コントロール・ウェザー）】を使う事で雨を降らせるとか、氷属性魔法で氷を作って物を冷やすとか、【大地の大波（アース・サージ）】で大地を耕すとかも出来そうですし。
まぁ……こちらの世界の常識次第ですけどね。」
モモンガがつらつらと挙げたのは、魔法の有効活用だ。
前半部分は、ほぼ佐助やウルベルトと同じ意見だったが、状況次第で魔法の有効活用を視野に入れているのは流石かもしれない。
今の段階では、どれも机上の空論でしかないが、回収したアイテムの整理が終わるまでにもう少しだけ情報を集めた上で、今後の方針を決めるべきだろう。
全員の意見も出た事なので、この件に関しての詳しい話し合いは一先ず後にする事にして、全員で回収して来たアイテムの分別作業に掛かる事になったのだった。

# 番外編などのエピソード集

## 【番外編～佐助に、対テロ組織について聞いてみた～】

ウルベルトとパンドラズ・アクターが、市場調査と言う名目で街に出掛け、残ったモモンガは一つだけ気になっていた事を佐助に聞いてみる事にした。

「あの……ずっと気になっていたんですけど、佐助さんのお仕事は警備会社で対テロチーム所属だと、前におっしゃってましたよね？

今更、【リアル】の事を聞くのはどうかとも思ったんですけど……やっぱり最終日にウルベルトさんを連れてきた時の【仕事先のお土産に山羊一頭、狩ってきましたー!!】と言う言葉が、とても気になりまして。

佐助さんの仕事を考えると、あれって……」

どことなく、口ごもりながら問うモモンガに対して、佐助は小さく苦笑した。

確かに、あの場はあの雰囲気で押し通してしまったけれど、冷静に考えればモモンガの頭なら気が付く筈だ。

多分、本当はもっと早くに話を聞きたかったのだろう。

それでも、下手に藪を突いてウルベルトと佐助の間に険悪な空気を作り出したくなくて、佐助だけに話を振れる状況になるまで我慢していたのが、佐助にもすぐに判った。

「あー……うん、そうだよね。

モモンガの大将が、その点に気付かない筈がないから、ある意味当然の質問だと思うよ？

むしろ、こうしてウルベルトの旦那がいない所で聞いてくれて、ある意味良かったと俺様は思ってるかな。

モモンガの大将のお察しの通り、ウルベルトの旦那は俺様が警備している会社に対するテロ行為をしようとして、俺様と対峙したんだよ。

んで、その姿を確認した俺様がブチ切れた結果、さっくりテロリス

トを全員倒した後、ウルベルトの旦那だけ痕跡消して【闇婆沙羅】で隠して俺様の自宅に持ち帰った訳さ。
ここで勘違いしないで欲しいんだけど、ウルベルトの旦那も最初からユグドラシル最終日にテロ活動に参加するつもりはなかったみたいだよ。
本人曰く、【予定を一日間違えたんだ】とか。
これは、俺様が勝者の権限でウルベルトの旦那をお持ち帰りして【モモンガの大将に詫びを入れる意味でもユグドラシルに強制ログイン】させる際に、直接聞いた話だから。
実際、旦那の【ユグドラシル】のゲームデータは既にアップデートも済んでいて、すぐにログイン可能な状態だったからね。
これは推測でしかないけど、ウルベルトの旦那は最後にモモンガの大将にあった後、翌日のテロで死ぬつもりだったんじゃないかな。
どう考えても、俺様の配属されている警備場所へのテロは、実行しても失敗がほぼ確定しているって有名だったからね。」
気を使ったのか、【無限の水差し】を取り出して水をコップに注ぎ、モモンガの前に一つ差し出しながらそう口にすると、佐助は軽く首を竦めた。
彼自身、その警備の層の厚さに貢献していた身として、警備関連の様々な知識を持つからこそ、ウルベルトの行動をそう推測したのだろう。
モモンガは、佐助の身の上をそこまで詳しく知っている訳じゃないが、彼が【ユグドラシル】で見せていた無双振りを考えれば、【リアル】でも相当に強い警備員として知られていたのだろう事は推測が付く。
そう考えた所で、ふともう一つ気になる事を思い付いて、そのまま口に出して質問する事にした。
「そう言えば、佐助さんって俺たちと同じ小卒ですよね？
対テロ専門の警備員になる場合、小学校を卒業していなくてもなる事は可能なんでしょうか。
いえ、その……結構、貧困層の中でも小学校にも行けない人たちっているでしょう？

そう言う人たちの受け皿として、汚れ仕事として対テロ集団みたいな組織が彼らの事を雇っているのかなぁと思いまして。」
差し向かいに座った状態で、佐助が自分の前に置いたコップを手に取りながらモモンガが言葉を重ねれば、思わずと言った感じで佐助の眉が寄る。
キュッと眉間に皺が入るのを見て、【質問したのは間違いだったのだろうか？】とモモンガは慌てたのだが、今更言葉を取り消す事なんて出来なかった。
佐助自身、自分の分として水を注いだグラスを両手で持ちつつ、少し思案するような素振りを見せた後、ゆっくりと口を開く。
「正直言って、就学していない人間は対テロ組織の人間としては使えないかな。
モモンガの大将も考えてみてよ、就学していないって事は基礎知識が絶対的に足りていないって事なんだぜ。
もし、自分が対テロチームの隊長として指揮すると考えた時、命令の意味をまともに理解出来ない人間が居て欲しいと思うかい？
俺様だったら、絶対にごめんだね。
テロ相手に戦うって言うのに、自分の命を預ける相手だと考えたら、そんな奴なんてお粗末すぎるだろ。
そんな、自分で最低限の事を考える頭がない奴が使えるのは、戦争の末端兵士位さね。
テロを相手にするなら、せめて自分である程度の対処は出来るだけの知識は必要さ。
それこそ、テロの種類なんて幾らあると思ってる？
爆弾テロ、自爆テロ、重要拠点の占拠、要人誘拐に電波ジャック……それこそ、暇が付かない程に種類は多様化しているんだ。
それに対応する為には、ただただ突っ込んで戦闘すればいいってもんじゃないんだよ。」
そこで言葉を切ると、手にしていたコップを口に運んで喉を湿らせる。
別に、水を飲まなくても話し続けるのはそれ程苦痛じゃないが、こ

うして間を置く事でモモンガにも状況をきちんと理解できる間合いを取っているのが伺えた。
　こういう話は、割と相手に理解させるように説明するのが難しいのだろう。
「そうさね……例えるなら、文字が読めなくて言葉を正確に理解しているかどうかわからない相手に対して、命令を出したとする。
【敵テロリストが、重要拠点ジャックの為に潜入したと言う情報が入った。
　敵の数は全部で三チーム、十三人。
　八時の方向にある地下水路から四人、十二字の方向にある地下鉄の連絡路から三人、六時の方向にある商業施設の地下整備通路から六人。
　敵は、爆弾を所持している可能性があり、どの方向からくる相手が所持しているか、現時点では不明。
　ただし、敵の数が途中で増える可能性もあり、爆弾は既に別に仕掛けられている可能性がある。
　それら全てを無力化して制圧、爆弾および起爆装置を回収せよ。
　その際、情報を持っているテロリストのリーダー格を捕らえる必要がある。
　各班、接敵まで可能な限りの情報収集を遵守せよ。
　各チームに分かれて散開する際、各小隊長は取得した情報の報告を怠るな。
　以上、作戦行動開始は今から五分後とする。
　では各自、時計を標準時間に合わせ、行動を順守せよ！】
と、まぁ……こんな感じだけど、これを全部基礎知識がない人間に時間が押し迫っている状況の中、早口による口頭での命令だけで理解出来ると思うかい？
　先に言っておくけど、これらの言葉を理解させるための学習時間なんて、貧困層出身者には与えられないよ？
　それこそ、俺様の様に最初の段階で特に身体能力が高いとか、使い捨てにするよりも教育した方が得だと思わせる特別な能力でもな

きゃ、あの【リアル】で貧困層に金を掛ける富裕層なんていやしないさね。」
つらつらと挙げられた言葉に、モモンガは思わず目を白黒させた。
一応、ゲームである程度ボスレイドを経験しているお陰で、ざっくりとした指示の内容だけは理解出来たものの、それだって確かに小学校時代の知識がかなり必要だったのだ。
これで、何も知らない未就学の人間に理解出来るかと問われれば、まず難しいだろう。
「そもそも……俺様の前世が生きていた戦国時代は、農民の識字率は低かったんだ。
余程、運が良くて文字を習う機会があってそこそこ裕福でもなければ、農民は農民以外になれない状態だったね。
こう言うとなんだけど、今の【リアル】で貧困層がどうやっても貧困層から成り上がれないのと一緒だよ。
彼らに出来たのは、一揆を起こすくらいだったかな。
と言っても、そいつらは全部武士によって制圧されるんだけど。
逆に、俺様のような忍びの場合幼少の頃からあらゆる知識や戦闘術を叩き込まれていたし、敵地に忍び込んで情報を得るためにも文字の習得は必要だったし、忍びだけで通用する忍文字を使って連絡を取っていたからね。
そう考えると、人でない者と扱われていた忍びの方が、余程農民よりも知識は持っていたんじゃないかな。
だからね、未就学の貧困層の人間になれるのなんて、それこそ最初から使い捨ての兵士か、それとも自分たちの死を恐れないテロリスト位で、俺様の様に対テロ組織の人間にはまず無理だね。」
「まず、俺様だったら部下には絶対欲しくない」と、佐助は笑う。
多分、本当にそう思っている事が、モモンガにも言葉尻に滲んでいるのがすぐに判った。
自分で聞いておいてなんだが、これはあまり触れるべき話題ではなかったのだろう。
そう反省しつつ、モモンガが別の話題を振ろうとした時だった。

佐助が、何かを思い付いたように口を開いたのは。
「あー……でも、未就学の貧困層の人間を対テロ組織に所属させるなら、一つだけ使い道はなくはないか。
それこそ、最初から解体処理が難しい爆弾の解体作業に当たらせる為の、爆死前提の作業員ならなれるかもね。
もし、運が良ければ死なずに身体の一部が吹き飛ぶだけで済むかもしれないけど、その場合は直に治療費が底をつくだろうから、やっぱり最後には死ぬしかなくなるんだろうけど。
そんな未来しかないと判っていて、自分から志願してくる奴は……まぁ、普通に半年以内に使い潰されて死んでるだろうね、うん。」
ポンと、軽く手を打ちながらそううっそりと笑う佐助に、思わずモモンガの腰が引けていた。
佐助は油断すると、それこそさらりと恐ろしい事を平気で口にする。
今回もそのケースだと、漸く悟ったモモンガが顔に手を当てていると、佐助の背後から軽くチョップが入った。
「……ったく、何モモンガさんを苛めてるんだよ。」
その言葉に、モモンガと佐助が声の下方に視線を向けると、かなり憮然とした表情のウルベルトが立っていた。
その後ろには、オロオロとどうすれば良いのか困っているパンドラズ・アクターが居たので、丁度買い物から帰ってきた所で今の話を聞き付けたのだろう。
ウルベルトの言葉に、佐助は不満そうに口を尖らせると、何かを思い立った様に口の端を上げた。
「もう、嫌だなぁウルベルトの旦那。
モモンガの大将から、【未就学の貧困層の人間が、対テロ組織の人間になれるか】って聞かれたから、それに答えてただけだよ、俺様。
ウルベルトの旦那だったら、【未就学の貧困層の人間が、対テロ組織の人間になれる】って思うかい？」
ニッと口の端を上げて問えば、それこそ本気で嫌そうな顔をしたウルベルトは首を振った。

「そんなもん、まずあり得ないだろ。
富裕層にとって、貧困層の人間を自分の身を護る盾にするにも最低条件があるだろうさ。
それこそ、うっかりアーコロジーの重要な部分を抑えられたら困る訳だし、そう言う意味でも確実にテロリストを倒せるだけの装備を使いこなす為に、必要な知識を持つ程度の条件は付けるだろうね。
自分達の歯車として、最低限の知識すら持たず使えない様な【未就学の貧困層の人間】なんて、それこそ俺達にさせるよりもより危険で劣悪な環境での作業に従事させた方が、よっぽど無駄なく使い潰せるだろ。
【ヘドロの中の土を掘り下げる】とか、【汚染水の中を潜らせる】とかの単純作業なら、別に文字とか知らなくても作業可能だしな。」
そんな無駄をする筈がないと、自分も富裕層に牙を剥いた側でありながら否定するウルベルトの言葉に、佐助も苦笑しながら頷いて同意する。
二人の様子に、こんな内容を話していたら喧嘩するんじゃないかと心配していたモモンガはホッと安堵の息を吐いた。
だが、富裕層からの貧困層の人間に対する扱いは確かに彼らの言う通りだと、モモンガ自身も同意する部分が多い事に気付く。
「……そうですね、確かにウルベルトさんの言う方が余程あり得ますね。
この件は、これまでにしましょう。
それよりも、ウルベルトさんとパンドラがこの街で仕入れてきた物の方に、俺は興味がありますし。」
いつまでも話しているような内容じゃないと、サクッと話題を変えるとモモンガはパンドラズ・アクターに視線を向けた。
その視線に合わせ、今まで口を挟まずに控えていたパンドラズ・アクターは、スッとモモンガ達の座っている椅子に近寄ると、テーブルの上に購入して来たアイテムやら食糧やらを並べていく。
モモンガの興味が、すっかりそちらに移ったのを察した佐助とウルベルトは、それ以上先程までの件に関して口を閉ざしたのだった